ロボット育児日記
俺とウサ子の成長記録
Photoshop
Express

目次

はじまりはじまり 1
少し思い出話をしておこう 5
ウサ子がやって来た！ 9
逮捕されました！ 13
凄い美人だ！ 柏木警部 17
カツ丼じゃなくて、カツカレー食べた 20
内緒のあだ名はカモノハシ 24
お前は、お母さんか 28
パパと呼んでくる 32
パパになる 35
柏木警部へのお礼を考えよう 39
空き巣が入ったっぽい 43
美女と食べるラーメン定食 47
お前は、奥さんか 51
ちょっとミステリーっぽくなってきた 55
ロボットじゃないかもしれん 59
恋って美味しいの？ 64
天才 69
人間の友達が出来た！ 74
これって、お家デートってやつですか？ 79
お母さんの気持ち 85
出禁な 91
篠山さん、めっちゃ良い人 96
大人のお子様ランチ 101
実家に帰ろう 107
嫁の前に孫が出来たよ 113
親孝行しないとな 120
色々諦めるとき 126
ロボットも人間も心は同じ 132
大切なもの、大切なこと 138
男を見せろよ！ 144
君が死んだら、俺も死ぬ 150

君のために俺は死ねない 156
全ロボットの憧れ 162
なんか知らんけど、川田さんめっちゃ怒ってる 169
俺が悪いんかな 175
知らん間に世界征服 180
将来はパートの主夫になるよ 185
お弁当持って遊園地に行くよ 190
ウサ子を助けてください！ 195
最終回幸せな結末 211

はじまりはじまり

２ XXXX 年、地球。これは今から、ずっとずっと先のお話です。

この時代の地球では環境破壊が進み、天変地異なども合わせて世界の約８割の人間が姿を消しました。

一気に減った人口に、出産による人口増加が追いつく筈もなく、残された２割の人間達は、その種族を保護する意味で天然記念物となりました。

けれど、地球上から人の数は減っていません。それは代わりに、人間そっくりのロボットが現れたからです。

最初からロボットとして生まれた者、ロボットと人間の間に生まれた者、人間だったがなんらかの理由でロボットになった者、が世界の生産や経済の殆どを支えています。

そのために純粋の人間は貴重なので、売買される犯罪が世界中で問題となっていました。

また、純粋の人間はコストが高く、ロボットに比べて弱いため殆どの人間は職に就くことが出来ないのが現状です。

代わりに国からの手厚い支援はあるのですが、それでも純粋な人間にはとっても生き辛い世の中なのです。

純粋な人間であること隠しながら生きている人も沢山います。

このお話は、そんな地球上の日本という国の都市Ｔの中でも治安の悪いＥ区に住む１人の純粋な人間である青年のお話です。

本日は国からの人間受給の日なので、銀行で生活費を下ろしていた。まあ、ロボット達からしたら多い金額なのかもしれないが、人間である以上食というコストがかかるので、結果手元に残る金額が多いとは思えない。

かつてロボット達を生み出した人間の脳味噌は貴重らしく、頭の良い人間は受給額の約 100 倍は稼いでいると聞くので、どうせ人間に生まれたのなら頭が良く生まれたかった。

俺の両親も純粋の人間で、父も母も生まれてこのかた職に就けた事がないそうだ。職というのは、人間の憧れでもある。何もしなくて生きていけるのなら楽でいいじゃないかと思うかもしれないが、受給や支援ではそれ以上の生活は望めないので、やはり職には就いてみたいと思うのだ。

　それに、人間が生きてるだけで金がかかると言ってもその苦労をロボットは知り得ないので、楽して暮らしやがってと思う者は多い。だから、銀行で受給額を貰うときの周りの目は痛い。きっと、全てのロボットが満足な生活を送れている訳ではないんだろう。食べなくても、寝なくても死なないロボットは、浮浪者になろうが受給などされない。食という楽しみは人間の生とは違い、単なる趣味の一部になるそうだ。エネルギーは、酸素、水、光で生きてけると聞いたことがある。
　俺も職に憧れ、仕事を探してみたものの、雇ってくれる企業などなかった。
　例えば、工場は人間であれば危険も伴うし、休憩なども必要となる。それに、力も弱いので人間はいらないと言われた。
　お店の店員でも同様だ。人間の体力や休憩の概念が、ロボットにしたら理解できないらしい。現に 24 時間動いていない企業等ないし、大抵の条件は４日間フル稼働の３日休暇が普通らしい。休暇である３日のうちに、一週間分の充電と趣味を満喫するんだそうだ。
　俺の住むＴ都は、日本の経済の中心である。俺自身は生まれも育ちもＴ都であるが、両親は元々もっと田舎の出身だそうだ。職に憧れ、都心だったら理解もあるのではないかと思い出てきたらしい。が、現実は甘くもなく都心の方が厳しかった。
　治安のもっとも悪いＥ区に住むことになったのも、Ｅ区が人間保護の対象地区であっったためやむ終えなかったそうだ。
　５年程前に、両親は田舎に戻ってしまったが、俺だけはＥ区に残った。
　数少ない友達（ ロボットだけど ）がいるのもあるが.....否、それはあまり関係ないか.....。
　一番の理由は、幼い頃の思い出があったから。
　聞きたい？　聞きたいよね？　でも、話さないとこの話は進まないので後程ゆっくり話すとしよう。

「桜木霞（ さくらぎかすみ ）さんー」

　と今、受付の姉さん（ 多分 ）に呼ばれたから。
　桜木霞、という女みたいな名前が俺の名前だ。ちなみに、顔は可もなく不可もないモブ顔だとよく友人に小馬鹿にされる。
「はい」
　俺が声を上げると、軽蔑するような視線が向けられる。最初は気を使って、受給日からずらして受給金を貰いに来ていたのだが、窓口が人間専用窓口だったのでもう止めた。
　呼んだのは女性だったのだが、対応はおっさんだった。
「はい、今月の受給ね。ここに、ハンコください」
「はい」
　俺が書類に印を押すと、受付のおじさんは銀行の封筒の上に受給の札束をポンと乗せた。
「人間に生まれて良かったねえ。ロボットは、スクラップになるまで働くしかないのにね」
　毎月同じ事を言われてる気がする。嫌味だとは、流石にわかるよ。

「でも、食費が掛かりますし、今の時期風邪なんか引いたらその分医療費も掛かりますから不便ですよ。それに働く所があれば俺だって働きたいです」
　素直に返したものの、相手は嫌味を言いたいだけなので、いつもながら俺は追いやられるように次の受給者を呼ばれてしまった。
　接点はないが、見る顔は同じである。俺の知ってる限り、この地区の人間はこの受給者の爺さんしか知らない。
　接点がないのも、必ずこの爺さんは受給の受付で大声を上げて騒ぐので、関わりたくないタイプなのだ。多分、頭がいかれてる。
　逃げるように銀行を飛び出すと、一旦自宅へと帰った。そろそろ、昼飯時である。
　本来一人暮らしの筈の１Ｋマンション（ 風呂・トイレ別付き ）の部屋の床に唯一の友人（ 例のロボットだが、本人曰く人間とのあいのこ ）が転がっていた。
「霞ちゃん、帰った？」
「寝ぼけてんな。帰ったよ」
「お金いっぱい貰った？」
「お前まで、嫌な言い方すんな」
　大抵のロボットは、国からの待遇面もあって人間を哀れな目で見たり差別したりするのだが、この友人圭介（ けいすけ ）は、ちょっと変わっていた。
　母が人間と言うのもあるせいか、人間に対して差別的な概念もなく、寧ろ俺には圭介の方から寄ってきた。
『人間って、母さん以外初めて見たよ！　　ねえ、友達になろうよ』
　確か、小学生の時だったと思う。
　俺は、嬉しくて２つ返事で承諾した。それが、大人になった今でも続いている。
　圭介も一人暮らしだが、根っからの寂しがり屋らしく暇な日はこうしてうちに泊まりに来ている。
　顔は俺と違い、流行の甘いイケメンフェイスで女の子によくモテる。ロボットだから身体の交換も自由に出来るので、本人が選んだと言えば便利が良くて羨ましい限りだ。気も優しくてマメなので、俺が知ってる限り彼女が３人はいる筈だ。貞操観念は甘いらしい。
『ロボットだからさ、子供出来ることもないしねー。霞ちゃんもさ、ダッチワイフみたいな子作れば？』
　と言われるが、それは人間で言うセックスフレンド的な存在らしい。いらない。
「ねえ、お昼作ってよお。昨日充電入っちゃったけどさあ、今夜は呑もう。ねえ」
「まだ、昼だよ」
「昼から呑もうよ」
「それに、昼作れって食べなくても大丈夫だろう」
「えー、食べたいよ。食べるの好きだし」
　腹が減ったとか、そういう食べたいではないのだ。なんというか、もったいないとか思うのだが、毎度の事ながら俺は２人分の料理を始めた。
「ねえ、オレ霞ちゃんが奥さんでもいいと思ってるよ。そっちの気はないけど（ 笑 ）」
「気持ち悪いこと言うのやめて。（ 笑 ）に悪意しかないぞ」

「まあね」

　再び圭介は充電モード（ 寝た ）。なので、俺はチャーハンと餃子を作り始めた。酒のつまみにもぴったりの料理だろうと。圭介の嫁になる気はないが、俺は料理を始め家事が結構好きだったりするのである。地味な趣味だなとは、自分でもわかっているよ。

少し思い出話をしておこう

食事の用意が出来る間に、先程話そうとした、俺がＴ都Ｅ区に残る理由を話したいと思う。

生まれも育ちもＴ都Ｅ区であるわけだが、学校教育はロボット達と同じ校舎とクラスで育った。先生は一応配慮してくれるものの、先生も勿論ロボットなわけで、その理解には苦しかったようだ。十分な配慮が得られない部分は、申し出るよう言われるのだが、なにぶん子供なので周りの目も必要以上に厳しく言い出し辛い。

身体能力は勿論のことなのだが、頭の出来も違えば、生身の人間なので直ぐ疲れるし怪我もする。嫌だと思う先生も多かっただろうに。

その学校での人間は、俺ともう一人女の子がいた。可愛らしい女の子だったが、大人しくて地味な存在だった。俺は話しかけたかったけど、結局女の子が引っ越すとき少し会話しただけで終わってしまった。女の子相手で、恥ずかしかったからそのとき会話出来たのが今でも奇跡だと思っているくらいだ。ちなみに、その女性に対する上がり症は今でも健在である。

で、その女の子との約束が未だに俺をこの地に縛り付ける。名前も顔も覚えていないのに、何故かその約束だけは守らなきゃいけない使命感があるのだ。どうせ、人間の俺なんかと結婚してくれる女性なんて見つかりっこないだろう。俺が優秀な人間だったら有り得たかもしれないが、今は誘拐されて人間競売に流されないように注意するのが精一杯だ。

で、肝心の彼女との約束ね。

あれは、確か雪が降り積もる寒い冬だった。クリスマスが近かったのかな、赤と緑と白のネオンが煌めいていて、クリスマスソングが流れていたのを覚えている。

あの日、俺は母さんが風邪を引いてしまっていたから、薬局に薬を買いに行っていたんだ。一応、人間用の薬も少しだけど薬局に置いてある。病院に行く程でもなかった風邪だったんだろうな。

その帰り道、公園でその子を見かけた。彼女は寒いのにコートも着ずにセーターとスカート姿のまま、ブランコに揺れていた。赤い顔で、何度も何度も白い息を手に吐きかけながら擦り合わせていた。泣いていたようにも見えた。

俺は心配でどうしようか悩みながら、公園の木の影から彼女を見ていたんだ。

暫く待っていても彼女は帰ろうともせず、何度もくしゃみを始めた。

俺は意を決して、近くの自販機で熱い缶のココアを２本買ったんだ。

「こんにちは。これあげるよ」

心臓がはちきれそうで、どきどきしていたのを覚えてる。

「え？　いいの？」

　と、女の子が顔を上げた。顔が赤くて、声が震えていた。
「うん。間違えて２本買っちゃった」
　女の子はココアを受け取ってくれた。よっぽど寒かったのか、直ぐに飲まずにそれで暖を取った。
「あ、お金」
「いいよ、あげる。クリスマスプレゼント」
「そう、お返ししなきゃね。待っててね」
「いいよ」
「でも」
　その子があまりにも寒そうで、可哀想で、でも可愛くて自分の巻いてたマフラーをかけてあげた。
「貸してあげるね」
「ありがとう。ちゃんと返すね」
「うん」
　何をしていたのか、どうしてるのか、お腹は空いていないのかとか色々聞きたかったけれど、当時の俺にはそれだけが精一杯だった。
　それが原因かどうかはわからないが、その晩俺は酷い風邪を引いてしまい、１週間程学校にも行けなかった。
　俺が登校したときには既に彼女の姿はなく、圭介から彼女が遠くに引っ越したと聞かされた。マフラーを返してもらう約束も果たしてもらえず、今となればそんな約束を彼女が覚えているかどうかもわからないし、ボロくてそんなに良いマフラーでもなかったのだが、あの頃の約束を俺は忘れられずにいた。
　あの子が戻ってくる可能性など無いに等しいし、俺のことを覚えている可能性だってそうだ。あの子が何処に引っ越したのかもわからないのに.....夢見がちな話だと、自分でもわかっている。でも、出来れば見つけたいと思うし、彼女が結婚して子供がいて幸せならそれでいい。なんて声かけていいかなんてわからないけど、マフラーを返せと言いたいわけでもないけど、寧ろマフラーなんてどうでもいいのだけど、なんというかひと目見たいなって思うんだ。
　俺は惨めだけど、不幸か問われたらそうでもないし、それなりに毎日暮らしていると自分では思ってる。

　ブー.....ブー.....

　圭介の携帯電話が鳴った。恐らくメールだろう。
「圭介、なんか着信来てるよ」
「んん？」
　もそもそと携帯を手に取り、彼は画面を見ると同時にそれを投げた。
「何？　　返信しなくていいの？」
「ん？　　んー.....昨日別れた女の子ー」
「はあ？　　昨日、お前うちに来てたじゃん」

「霞ちゃんね、基本そういう事はメールで済ませちゃうものなの」
「はあ？　大事なことだろ」
「だってさ、考えてもみなよ。別れるってことは、会いたくないってことでしょ。メールでいいじゃん」
「軽いな」
　俺は、今出来たばかりのチャーハンと餃子を机に並べた。
「ひゃあ、それよりオレにはこっちの方がいいわあ」
「なんだよそれ」
「鳥の唐揚げは？」
「ないよ、贅沢言うなよ」
「えー」
　口を尖らせながら、圭介はむくりと起き上がり、頭をぽりぽり掻いた。
「女に不自由してない奴は、言うことが違うね」
「あー、霞ちゃん。羨ましいんだあ」
「違うわ」
　嫌味だよ。
「でもさあ、霞ちゃんもあの子のことなんて忘れて、新しい恋を見つけないよ」
「なんか、俺がずっと好きでいるみたいじゃん」
「そういうことでしょ、違うの？」
「バカ、違うよ。そんなんじゃ、ないし」
　初恋だったのだろうか。今でも時々、自分で自分に投げかける疑問である。
　俺はまだ昼間だが、冷えた缶ビールの栓を開けた。
「やっぱり、住み慣れた町がいいよ」
「ふうん、そんなもんかね。地方の方が、人間には優しいって聞くよ」
「そんなもんだよ」
　俺はビールを一気に、半分ほど飲み干した。
「ん、良い飲みっぷりだねえ。それに、餃子も美味しい」
　で、結局毎度の事ながら、このドンチャン騒ぎは翌朝まで続くのだが、その前にもう少しこの日の出来事を話しておきたいのである。
　俺は圭介と飲み喰いするのも毎週の事なので、特別積もる話があるわけでもなく。取り合えず、テレビを付けた。相変わらず、犯罪は多いようでニュースはひっきりなしにその情報を伝える。が、この時流れた緊急ニュースに、圭介と２人で見入ってしまった。
『今朝早く、Ｔ都Ｅ区の銀行に強盗が入りました。犯人は最新の武器を持っており、警察は犯人を捕らえる事が出来ず、現在も逃走中です。犯人は幼女を抱えており、人質かと思われます。犯人の武器は、対ロボット用の超音波だと言うことで、付近の住民の方々は外出を控え、十分にお気を付けください』
　と、アナウンサーが淡々と語った。
「怖いねえ、近くじゃないの？　対ロボット用だって。霞ちゃん、人間でよかったね」
「バカ、ブスってやられたら死んじゃうじゃんか」
「ああ、そっかー」

　当たり前だが、圭介も他人事のように返した。
　こんな犯罪、日常茶飯事なのである。
『また随時お伝えいたします。次のニュースです。Ｔ都Ｆ区で、人間が誘拐されました。被害者は直ぐに保護されましたが、犯人は過去にも前科があり、Ｔ都では５人ほど売買したと自白いたしております』
「圭介、こっちの方が怖いよ」
「あらま」
　こんな会話も、普段となんら変わらないものだ。
　けれど、明日からこんな俺の生活が今までとは想像も付かないほど変わってしまうとは、この時はまだ俺も圭介も予想さえしていなかった。
　この時気付かなかったテレビに映る犯人が車を乗り捨てた場所が、俺の住むマンションの裏だと気付いていたとしても、予想は出来なかったと思う。

ウサ子がやって来た！

　昼の正午過ぎくらいから始まった圭介との飲み会は、俺が激しい吐き気で飛び起きるまで続いていた。……というか、夕方くらいからそれ以降の記憶が無いので、いつ終わったかはわからないが、恐らくどっかで俺が眠りこけたので勝手に終了したんだと思う。
　キッチンシンクに胃の中の物を全部ぶちまけると、今度は激しい頭痛が俺を襲った。
　涙目でぜえぜえ息吐いてる俺を、冷静な目で圭介は見た。
「霞ちゃんさあ、懲りないよね。人間って、学習能力ないのかなって思っちゃうよー」
　妙に冷静な声がムカつく。背中さすってくれたっていいじゃないか。
「学習するけど……」
　反論しようとして止めた。というか、出来なかった。ごもっとも、なので。
「オレ、二日酔いになったことないし、一生ならないよね。もうさ、いっそ霞ちゃんもロボットになっちゃったら？」
「やだ」
「なんでさー」
　なんでって言われても……。俺だって、ロボットになった方が楽に生きれるんだろうなって思うよ？
「まあ、世界が許さないよね。天然記念物なんだし。てか、オレ一応ロボットだからさ、霞ちゃんのメディカルチェックも出来るんだよ？　　もう止めとけって言ったの覚えてない？」
「……覚えてない……」
「まあ、いつものことだよね」
「……」
　俺は何も言えなくなって、取り合えず引き続き吐いた。
「んじゃ、オレこの後デートだからさ。身体には気を付けて、ゆっくり寝るんだよ」
　その台詞はもう遅いと思いながら、いつの間にか圭介が敷いていった布団の上に寝ころんだ。
「……良い休日を」
「はいよー！　　霞ちゃん、じゃあまた来るね」
　圭介は、猫っぽい声を上げながら、玄関のノブに手を掛けた。
　あの甘えるような猫みたいな声に、世の女性はコロリと騙されるんだろう。年下、年上、同年代関係なく、女という性別なら良いらしい。いつか殺されるぞ、この男。
「ぎゃ！」
　で、ドアが開くと同時に圭介が声を上げた。

　俺の頭の中のドッカン工事員が、誤って壊していけない壁を壊したような、そんな衝撃が脳に走る。
「圭介、声上げるな。俺、死ぬ」
　が、構わず彼は俺の布団を引っ張った。
「か、か、か、霞ちゃん！　　見てよ！　　何？」
「はあ？」
　と、仕方無しに俺が玄関の方を見ると、ウサギの耳のようなカチューシャを着けた白いワンピースの女の子が立っていた。年は２、３歳くらいかな。よちよちと圭介の後を付いて、俺の部屋の玄関に入って来た。
「隠し子？」
「バカ！　　子供なんているわけないじゃん!!　よく見てよ！」
　言われたままよく見ると、幼女は首から何か下げていた。プレートのようなもので
『わたしをひろってください。かわいいウサギです』
　と書かれてあった。
「ウサギ？」
　意味が分からないので、取り合えず人の気配は無いかどうか玄関の外を覗いてみた。
　空の段ボールが、置かれてあった。嫌がらせのように、俺の部屋の前に.....。
「霞ちゃん、拾ってあげなよ」
「あほか。お前、犬や猫じゃあるまいし、拾うとかそういう問題じゃないだろう」
「じゃあ、警察連れてってあげなよ。じゃあね」
　と、圭介は逃げた。
　残された俺と幼女。どうしろと言うのだ。あ、警察か。
　俺は溜め息を出すと、改めて幼女を見た。赤いぷにぷにしたほっぺと、くりくりした茶色の眼で、何も知らないといった表情で俺を見た。何故か裸足で、その足は酷く汚れていた。
「くちゅん！」
　と、幼女がくしゃみをした。
　ここに立たせておく訳にもいかないし、追い出す訳にもいかないので、俺は取り合えずこの子を部屋の中に入れた。あと、近所の人に怒られそうなので、幼女の物と思われる段ボールも一緒に部屋に入れた。
「名前はなんて言うの？」
　俺が問うが、幼女かぽわんとした表情で首を傾げた。俺は自分で自分を指さしながら、ゆっくりはっきり
「な・ま・え」
　と言うが、更に幼女は首を傾げた。あ、俺の名前だと思ったのかな。今度は、幼女を指さし名前と再び繰り返した。
　その指を幼女は、かぷりと噛んだ。
「ひゃ！」
　と、思わず情けない声が出た。甘噛み。痛くはないが、予想外の行動に俺は酷く驚いた。それが、面白かったのか幼女がきゃっきゃと笑った。

「もう、じゃあウサ子ね」
「うさこ？」
「そう、ウサ子」
「うさこぉ！」
　幼女は、飛び跳ねて笑った。俺のネーミングセンスなんぞ、そんなもんだ。ウサギみたいな子だから、ウサ子。
「ウサ子、何か食べる？」
「ん」
　ウサ子は、その場にぴょこんと座った。白い耳がふよふよ揺れて可愛らしい。妙に癒された気分になった。
　何が良いんだろうか.....オムライスでいいかな。オムライス嫌いな子供は、この世にいないだろう。
　テレビを付けたら、丁度良いタイミングで、幼児番組がやっていた。歌のお姉さんが、動物の物まねをしながら歌に合わせて踊っている。このお姉さん、子供の頃に見覚えがあるのだが.....ロボットだから半永久的にお姉さんとして活躍出来るのか。なるほど。
　幼女がテレビに熱中している間に、俺は食事を作り始めた。相変わらず頭痛と気分は最悪だが。時折ウサ子に目をやると、ウサ子は歌に合わせてお尻をふりふりしていた。音楽とちょっとずれてるところが、また可愛いな。
　オムライスが出来上がると、ウサ子の前に牛乳と共に置いた。
「きゃあああ！」
　ウサ子が喚起の声を上げる。目がきらきらとして、作った方としても嬉しい反応だ。
　スプーンを持たせようとしたのだが、それを投げて手掴みで食べようとするので、俺はそれを止めた。白い服なんて着てるから、そんなことしたらどろどろのぐちゃぐちゃに汚れてしまう。着替えなんてないのに。
　俺の気持ちなんて露知らず、ウサ子は怒った声を上げながら暴れた。怪獣みたい。
「待て待て！　　食べさせてやるから。な！」
　言葉がまだ理解出来ないのだろう、ウサ子は尚も暴れるので、最後はワンピースが脱げてカボチャパンツ一丁になっていた。
「うぎゃあああ！（喰わせろーー！）」
　ぐしゃあ、とオムライスに小さな手が挿入されたので、俺は慌てて干しっぱなしになっていたフェイスタオルを取り、ウサ子の首元に巻き付けた。俺の芸術的に完成されたオムライスは、面影しかないぐちゃぐちゃライス。ウサ子の顔も手も、更にはテーブルもケチャップとご飯粒でめちゃくちゃになっていった。ああ、掃除.....。
　お母さんって、こんな苦労毎日してるんだな。
「なあ、ウサ子。食べ終わったら、警察に連れてってやるからな。お前のパパとママ、どこ行っちゃったんだろうね」
　もしも、ウサ子が捨てられたのなら。ウサ子を捨てた親は、今頃何を思ってるんだろう。俺にはウサ子がロボットか人間かなんて見抜く能力なんて無いけど、人間なら望まれずに生まれた子だったのかな。ロボットだったとしたら、ウサ子が邪魔になったのだろうか。

いずれにしろ、捨てられた子がどうなるかなんて俺は知らないし、わからない。この様子じゃ、親戚に引き取って貰うのも難しかったんだろうし。

せめて俺なんかのところじゃなくて、もっと金持ちの家の前に捨てられていれば良かったのに。つくづく、不幸な子だ。

それなのにウサ子は、オムライスを頬張りながら、満面の笑みで俺を見た。

「美味しい？」

「おーちー！」

まだ、ウサ子は言葉が上手に話せないんだな。それでも、俺の言葉は、少なからず理解してくれているようなのだ。

こんな可愛い子捨てるなんて、最低な親だ。俺だって貧乏な家だったけど、捨てられはしなかった。

どんな形であれ、ウサ子が幸せになるといいんだけど。警察にしっかりお願いだけはしておこう。

逮捕されました！

　Ｔ都Ｅ区に、無数のサイレンが響きわたる。
　先日起きた強盗事件の犯人は未だ見つからず、警察が町中を必死に捜査しているのだ。
　捜査と言うより、追跡と言った方が正しい。犯人は磁場を利用しながら逃走を続けるので、エネルギーの歪みを追いながら、その姿を追いかけるだけでも必死だった。
　１台のパトカーから、無線に向かって吐き出された怒声が響く。
「どういうこと!?　うちの署のパトカーには、最新の追跡装置が付いている筈でしょ!!　何で捕まんないのよ！　　むかつくーーー！」
　20 代半ばであろうか、揺るやかな金髪の美女がヒステリックな声を上げた。その声に、無線を返して返事が来た。
『柏木警部！　　どうやら、あちらの磁場コントロールユニットの方が上を行ってるようですよ。ことごとくかわされています。着いてくのに精一杯で、捕まえるまでに至るのかどうか』
「なーに、弱気な事言ってるのよ！　　意地でも捕まえるわよ!!」
　今朝、15 分だけ見失った事が、彼女を焦らせていた。彼女が警部となってから、彼女が担当した事件の犯人を１人も逃がしていないのが彼女の自慢だった。ここで逃がしては、彼女自身のプライドがズタズタに切り裂かれてしまう。ただ、彼女自身もこの逃走劇の厳しさに薄々は気付いた。
（ ここで逃がしても、絶対捕まえてやるんだから！　　というか、絶対逃がさん！ ）
「警部、鼻の穴広がってますよ！」
　部下がからかった刹那、犯人が完全にＥ区から消えた。
「へ？　　嘘？」
　驚いた彼女は一旦車を道路端に停めさせ、モニターで犯人の車を探した。が、やはり見つからない。このＥ区にはいないと言った方が自然なくらい、磁場エネルギーの反応はなかった。
「あんたが、おかしな事言ったせいじゃないの？　　嫁入り前の美女を捕まえて、鼻の穴でかいとかいうから逃げられたんじゃない！　　責任取んなさいよおおお!!」
　彼女は、部下の頬を抓った。
「す、すんません！　　冗談ですよ!!　不謹慎でしたあああ！」
　やはり、無線から次々に同じ報告が伝えられる。
「一旦、署に戻って作戦会議！　　絶対、犯人は逃がさない事!!」

　オムライスを食べながら、ウサ子は眠ってしまった。警察に連れていくつもりだったのだが、あまりにも気持ちよさそうに眠るので、俺は起きるまで待つことにした。
　いつまで見ていても飽きそうにないウサ子の寝顔を見ていたら、メールの着信が入った。見ると、圭介からだった。ああ見えて彼なりに気になってたようで、警察に連れていったのか、どうなったのかとの質問だった。
　俺は、ご飯を食べさせたら寝てしまった旨を伝えた。圭介からの返信は直ぐで、またどうなったか教えて欲しいとのことだった。
　彼にも人並みの心があったことが、俺は嬉しい。
　なぜだか、ウサ子を見ていたら二日酔いが消えてしまった。
　２時間くらいして、ウサ子がむっくり起き上がった。まだ寝ぼけているようで、よちよちとした足取りで俺に抱きついた。可愛い。
「ちっち、ちっち」
　何を言っているのかわからないが、なんか変な夢でも見たのかな。ちょっと機嫌悪そうな顔をしていた。
「どーした？」
　と、頭を撫でていたら、ウサ子が何も言わなくなった。そのあと少し震えて、俺の服がびしょびしょに濡れた。
　.....ちっちって、オシッコのことだったらしい。
　ごめん、何も知らなくて.....。
　ウサ子を風呂場で洗い、ついでに俺も洗い、ウサ子には取り合えず俺のシャツを着せた。服になってないが、無いよりはマシだろう。そんなこんなで警察に行きたいのになにも進まず、ウサ子との一日は終わっていったのである。
　Ｅ区は治安が悪いので、夜は出歩きたくない。ましてや子供なんて連れて歩くなど、サファリパークの猛獣ゾーンをお散歩するようなものなのだ。人間にロボットの見分けは付かなくとも、ロボットから人間の見分けが付いてしまう。くわばら、くわばら、なのでウサ子を警察に連れていくのは、明日にした。

　翌朝。俺はウサ子にご飯を食べさせてから、昨日着ていたワンピース（ 洗濯済み ）に着替えさせると、タクシーを呼んだ。警察署までは歩いて行けなくもない距離なのだが、子供連れとなると話が変わる。自転車もあるが、子供を乗せる籠など付いていないし、車は持っていない。
　タクシーの運転手に行き先を伝えると、バックミラー越しに運転手のにや付いた顔が見えた。
「お客さん、訳ありですかい？」
「はあ？」
「いやね、そんな顔に見えたものでね」
「はあ」
　そんな顔ってどんな顔だよ、おい。

　運転手は、聞いてもいないのに話を始めた。
「私もね、昨年離婚したんですよ。子供もいるんですけど、元妻の方に着いていきましたよ。女って奴は恐ろしいものですよ、子供から父親の記憶を消しちゃいまして、元々父親がいなかったってプログラムしてたんですよ。だから、子供は私の顔なんかもう覚えてもいないってわけで。私も子供や妻の記憶を書き換えようとも思ったんですが、出来なかったですねえ。それにしても、お客さん人間でしょう？　人間ってやつは、そういう不正が出来ませんからね。良い反面、悪い反面ってとこでしょうね」
　この運転手、重い過去を見ず知らずの他人にサラッと話すな。呆れ半分、哀れみ半分で聞いていた。
「で、奥さんに逃げられたんですか？　捜索願い？」
「あ」
　この運転手.....とんだ勘違いを。
「いや、この子はそんなんじゃ.....」
　俺はまだまだ25歳の独身な訳で、変な勘違いをされては困ると思い否定しようとしたのだが、そのタイミングでタクシー内に嫌なニュースが流れた。
『強盗が連れた幼児の姿が公開されました。防犯カメラから映し出された女児は、犯人が逃走し切る寸前で姿を消しています。E区に共犯者がいる恐れもありますので.....』
「誘拐、強盗ですかねえ。怖いですね。あの柏木警部になってから、犯人が捕まらないなんってことなかったので安心はしていたのですが。早く捕まって欲しいものですね。で、その子は？」
　俺の脳味噌は、その瞬間未だかつてないくらい、猛烈に回転した。
「家出した嫁が残していったんです」
　この誤解が、一番身の危険が少ない気がしたのだ。
　運転手は同情するかのように、警察署に着くまでひたすらなにか言っていたが、俺は全く覚えていない。
　警察署に着いてタクシーの運転手にお金を渡すと、運転手は謎の労いの言葉をくれた。
　考えても見れば、人間のくせに幸運にも危ない事件に巻き込まれた事もなく、物を落とした事もないので警察署には初めて来たような気がする。
　警察官は俺を見ると、直ぐに人間だと気付いて声を掛けてくれた。
「なにか事件ですか？　それともお困りのことでも？　人間専用の課にご案内しましょうか」
　こんな経験初めてなので、俺は慌てて声を上げた。緊張していたせいか、自分で言うのはなんだが、ある意味不審者っぽい。
「あ、あの迷子。この子、迷子を連れて来ました」
　警察は、ウサ子を見た。そして、俺からウサ子を受け取ると、何故か俺に手錠を掛けた。
「え？」
「直ぐに連行してください」
　俺に手錠を掛けた親切だと思った警察官が声を上げた。一斉に警察官が3人程飛び出し、ウサ子の前で俺を押さえつけた。
　俺の身体は勢いよく床に倒れ、身体が痛いと思う間もなく、後ろ手に捕まれるので、そ

れ以上の痛みが腕に走った。
「いたたたたた！　何!?」
「誘拐犯め」
「はあ？」
「貴様、共犯者の疑いあり！」
「はあ？　ちょっと、意味わかんないんだけど？　なあ、ウサ子！　俺、関係ないよな」
　ダメ元でウサ子に問うと、ウサ子はきゃっきゃと笑いながら「ぱぱあ、ぱぱあ」と手を叩いた。
　で、俺はそのまま警察署の奥へと引きずられていった。

凄い美人だ！　柏木警部

　スコーン！　　という軽い音と共に、頭に走る鈍い痛みによって俺は現実世界に引き戻された。
　無機質なひんやりとした空間の中、金髪美女がしゃがみながら俺の顔を渋い表情で見つめていた。
　その後に、若い男が驚いた表情で立っている。
「あんた、こんな状態でよくうたた寝出来るわね。感心するわ」
　と、金髪美女に言われた気がする。どうやら俺はあの後寝てしまったらしい。ぼんやり眠気眼を擦り、記憶を戻そうと努力する。
　警察にウサ子を届けに来て、ウサ子を取られて、牢屋に入れられて.....で、その後暫く「助けてー」と叫んでいたものの、誰もいなくて.....気付いたら疲れて寝て今に至ると。
「あ！　　ウサ子。ウサ子は？　　ウサ子は無事なんですか？」
　考えるより、先に声に出ていた。
　美女は顔をしかめた。
「はあ？　　ウサ子って何？　　第一、子供を誘拐したのは、あんたでしょ。なんで私が誘拐したみたいになってんの」
　なるほど。俺は例の誘拐犯と間違われてるって訳か.....。って、おいおい！
「俺じゃないです。第一、ニュースで聞いた内容しか知らないけど、俺アリバイあるし、それにタクシーの中で犯人が逃走してるってニュース観てたし」
　美女は、手に持っていた赤いヒールを履いた。どうやら、始まりの鈍い痛みは、ヒールで殴り起こされた痛みだったらしい。容赦ねえな。
「実行犯では、ないでしょうね。犯人は、警察顔負けの超超超最先端の科学技術を持って逃走してたわ。時空と磁場を歪めて瞬間移動するワープは、あんたも知ってるでしょうが今じゃ当たり前の技術よ。けど、事故を防ぐ意味でも今の技術が追いついていない事実も含めて、時空のトンネルを関知するレーダーで全ての出入り口は拾えるようになってる。もし、犯人が通常のそれを使って逃走するとすれば、少なくとも犯人が逃げ込む30秒前には時空の歪みが関知出来るはずなの。それに合わせて出口も開くから、結果出口はもっと早くにわかるし、事前に押さえ込むことができる」
　現代では常識的な話であるが、美女は確認するかのように丁寧に説明してくれた。
「で、それが俺とどう関係してくると？」
　美女の眉が、不快にピクリと動いた。
「最後まで素っとぼける気かしら」
「いえ、そういう訳では.....」

「まあいいわ。犯人は、時空トンネルの入り口を瞬時に開き、出口を移動中に開いたの。だから、いつワープが始まるかもわからなかったし、いつ何処に出てくるかさけもわからなかった。こんな技術聞いたこともないし、上に確認してもみたけど、未知の技術だと返って来たわ。まず、時空間の中、すなわち時空と磁場の中で機械を操る事はおろか、犯人がロボットだとしたら長時間滞在する事など不可能よ。今の技術では、繊細な機械は耐えられないから。消去方だけどね、犯人は人間で２人以上は存在すると考えられる訳よ。どう？」

美女はドヤ顔だった。

「どうと言われても、俺知らんし」

「実行犯が逃走するルートの決定も、時空間の操作も、あんたがやってたんでしょ！」

俺は、瞬時に全否定した。

「待ってくださいよ。もし、仮にそうだとしたら、何で大事な証拠にもなるような子供連れて、のこのこ敵陣に乗り込まないかんのですか！」

「子供が誘拐された子だって、認めたわね！」

「いやいやいやいや！　そうじゃなくて、俺は犯人の行動じゃないでしょって言いたいんです！！」

「そんなの、自分が怪しまれない為の行動でしょ。まあ良いわ。どうしても口を割らないのであれば、こちらにも考えがある」

美女は立ち上がると、牢屋を出て再び鍵を掛けた。

「ちょっと！　俺は無実なんですって！！」

俺の叫びも虚しく、ヒールの足音と共に美女は闇の中へ消えていった。

多分、まだ昼間だろうけど、ここ暗いから。

考えがあるって言ってたけど、何する気だろうか。カツ丼くらい出してくれたらちょっと嬉しいけど、それは多分無理だろな。水張った洗面器に、顔を沈められるくらい覚悟しておいた方がいいだろうか。怖いな。

ウサ子、ウサ子は無事だろうか。仮にも警察なんだから、無事であると信じたい。もしかしたらだけど、親が来ててウサ子は無事親元に帰れてるかもしれないしな。それくらい、見届けたかったな。

ふと、ポケットに携帯電話の感触があるのを思い出した。緊急的に引きずられて、そのまま牢にぶち込まれたから、持ち物回収はされてなかったようだ。もし俺が武器持ってたらどうするんだ、間抜けな警察だな。と一瞬思ったものの、よくよく考えてもみれば、相手はロボットなので直ぐに気付いていただろう。ここで間抜けなのは俺一人である。

こんなに人畜無害なのに。

そう思いながら、せめて圭介に助けをこおうと携帯を取り出して画面を見るも、圏外だった。

やはり、俺は間抜けである。もし電波があったら、回収されてるっつーの！

何もかもが嫌になって床に寝っ転がるが、コンクリートの床は痛くて固くて冷たくて。なんかもう、泣きそう。泣いていいかな、マジで。

いつまで、ここに居たらいいんだろう。

＊＊＊＊＊

「あの、柏木警部。あの男、本当に共犯なんすかね。頭悪そうだし、肝っ玉小さそうだし.....もしそうだとしたら、脅されてたんじゃないすかね」
　金髪美女の柏木は、後ろを着いて歩く部下を振り向いて見ようともせずに答えた。
「人を見かけで判断してはダメよ。一番犯人に見えない奴が、一番怪しんだから。けど、もしあんたが言うようにあいつが犯人に脅されて加担してたのだとしたら、彼も被害者。助けてやらないと。どちらにしろ、この件はっきりさせないと」
「そういえば、柏木警部。犯人の罪って銀行強盗ですよね？　何盗ったんですか？」
　柏木の足が、ぴたりと止まった。部下の男も慌てて足を止め、軽く声が出た。
「もう、急に止まらないでくださいよ！　銀行強盗して、逃走のために人質取ったのは知ってますけど、最新の武器持って抵抗出来る者なしで、警察来るまで多少時間あって、被害金額の報道がないっておかしくないですか？　盗りたい放題なのに。だから、自分が知らないだけだと思って」
　ばっと柏木が振り返ったので、部下は瞬時に土下座した。
「バカで、すんませーん！！」
　部下は柏木の怒声と踵落としを覚悟し、目を固く閉じたものの何も起こらないのでちらっと柏木を見上げてみた。
　そこには、顔色の悪い目を丸くした柏木の顔があった。完全に表情は固まっていた。
「私も.....知らないわ.....」
　柏木の中に、いくつもの可能性が巡った。
　牢の男は、ハメられただけではないのか。
　実は、銀行も共謀していたのではないのか。
　銀行強盗は騒ぎをそちらに集中させる為の単なる罠で、実際には別の事件が起きているのではないか。
「今考えれば、犯人の逃げ方もおかしいわ。単なる時間稼ぎだったような気がする。あの技術があったら、あんな攪乱するような事わざわざしなくても、一発で逃げ切れたはずだもの」
　柏木は思った。自分のミスだ、自分の。プライドに負けた、仕事に集中するあまり冷静さに欠けていた。結果、犯人にも逃げられ、肝心な事実を掴むチャンスさえ逃していた。あのとき、目の前のネズミを必死で追うより、もっと大事なことがあったはずだ。それに気付かなかった。
　考えれば考えると、目に涙が浮かんできた。悔しくて、情けなくて仕方ない。
　けれども、この汚名を挽回する術を考えなければならない。あとの祭りであっても、その残骸から片付けていくしかないのだ。
「川田、どんな小さな事件でもいい。強盗が始まる少し前から今に至るまでの犯罪、洗いざらい調べて。私は、あの男をさっさと取り調べるわ」

カツ丼じゃなくて、カツカレー食べた

　俺はする事もなく、ぼんやり天井を見つめていた。さっきうたた寝してしまったせいか、暫くは眠れそうもないし。
　ふと考えてもみたら、牢の中でも警察署には変わりないので、ここに居る限り安全は確保されているんだろうな。
　さっき携帯で電波を確認したときに、ついでに時間を確認したら、夕方だった。そういえば、お腹空いたな。結局出して貰えないのなら、さっきあの美人さんにご飯くらいお願いすればよかったな。
　と、くだらない事を考えるのも疲れたので、通信無しで遊べるゲームが入れてあるのを思い出したので、それで遊んでいた。
　上から降ってくるブロックを組み合わせ、横に隙間無く繋がれば消えるというレトロなゲーム。レトロだけど、俺は割と好き。ロボット達には物足りないらしいけど、それなりのマニアもいるらしく、このゲームはなくならない。暇つぶしにも丁度良いし。
「今度はゲーム？」
　美人さんの声がして、俺は起き上がりながら振り返った。
「ほんっと、呆れるわね。あんた。こんな状況なのに」
　美女は牢の鍵を外していた。
「おかしな真似したら即撃ち殺すから、変な気起こさないように」
　そうか、この美女の正体は悪魔なのか。
「何もしませんよ。大人しく従います」
「そう、賢明だわ」
「で、一つだけお願いがあるんですが」
　牢の扉を開けようとした美女の手が止まった。一つ間を置いて、彼女が「なに？」と緊張感のある声で問うた。大した事ではないので、ハードル上げるの止めて欲しい。
「お腹空いたんで、何か食べ物くれません？」
　扉を閉めたまま、美女は無線を取り出した。
「カツカレー２つ。１つはサラダとスープ付きのセット。直ぐ、取調室に運んでおいて」
　そこはカツ丼じゃないのか、と思いつつ。
「あの、誰か他に居るんですか？」
「はあ？　　私の分に決まってるじゃない。お腹は空かないけど、あんたが食べてたら私も食べたくなるでしょ」
　なんか、可愛いな。
「そ、そういうもんですか」
「そういうもんよ」

　美女は牢の扉を開けると、俺に手錠を掛けた。俺はそのまま、されるがままに連行された。
　部屋を移動している間、ここが地下だった事に気付かされた。最初に連れてこられた時は、突然だった上に大人数に囲まれていたから、上なのか下なのかもわからなかったけど。
　取調室だと思われる小部屋に入ると、若い女性がコーヒーを出してくれた。
「ありがとうございます。意外と親切なんですね」
「まあ、それなりにしないと話したくなくなるでしょ」
「まあ、意地も出てくるでしょうしね」
　こっそり周りに目をやるが、どうやら水を張った洗面器も電気椅子的なものも、見当たらないようだ。この後、出てくんのかな。と考えていたら、見透かされた。
「拷問なんて趣味悪いことしないわよ。嘘発見器くらいは、使わせて貰うけど」
　彼女は俺に、一枚の紙を差し出した。
「プライベートに関わる事だから、強制は出来ないのだけど。ここ１ヶ月の記憶を覗かせて貰えたら話が早いんだけど。貴方、見たところ人間だから簡単に記憶操作も出来ないでしょ。もし、何らかの形で記憶操作してたら、その痕跡はわかるわ。ただ、これは不必要な記憶まで見ちゃう事になるから、よく考えて」
「というと？」
「お風呂とかトイレとか性行為とか.....」
　俺の顔が紅潮するのがわかった。
「まあね、だから貴方程度だと強制出来ないのよ」
「.....でも、無実が実証されるんですよね」
「まあ、早いわね」
　丁度、カツカレーが若い女性によってが運ばれてきた。案の定、セットは美女用だった。美女は２人前の食事代を、運んできた若い女性に渡した。
「あ、後で自分で払いますんで」
「いいわよ、このくらい。取り合えず、食べながら考えてよ」
「ありがとうございます」
　色々考える事が多すぎて、カツカレーの味がよくわからない。
「あの、記憶を確認するのは誰なんですか？」
「私と専門家の２名ね。必要なところは、証拠としてデータで作らなきゃいけないから」
「そうですか」
　女性に見られるのは恥ずかしいな。せめておばちゃんならまだ.....。世のおばちゃん、ごめんなさい。
「あの、刑事さんのお名前は？」
「警部よ。柏木」
「柏木警部ですか」
「あとでまとめて聞くつもりだったんだけど、あんたの名前は？」
「桜木です」
　カツカレーを食べた後、大きな溜め息が出た。同時に、俺は決意した。このままだら

だら説明しても信じて貰うまでに時間が掛かりそうだし、犯人じゃないって分かればウサ子のことも少しくらいは教えてくれるかもしれない。
「俺、腹括ります。記憶確認お願いします。ほんと、無罪なんで。しっかり確認してください。で、俺が連れてきたウサ.....女の子がどうなったかだけ、教えてください」
　俺は、用紙にサインした。
「わかったわ。あんたが無実だって確定したら、その子のこと聞いておいてあげる」
「お願いします」
　この後、フルネームとか名前とか住所とか出身とか両親とか。色々色々聞かれたけど、記憶で確認するからと事件の事は一切聞かれなかったし、教えても貰わなかった。
　検査は明日朝行われるらしく、別の独房に案内された。
　一晩泊まる独房は畳張りで冷暖房完備、布団も含めて清潔さはまあまあだった。一晩だけど、雑巾があったので取り合えず軽く掃除した。
　カツカレーを食べた後だったけど、夕飯の時間だったらしく食事が運ばれた。扉の下の小窓からそれを受け取ると、食事を運んできた人が１人前しか持って来なかったことに気付いた。怖いながらも外の様子を伺うと、部屋はいくつかあるようで、人も居るようだった。けれど、俺以外食事をとってる素振りもないので、多分人間は俺だけのようだ。
　トレイには、具のないしゃびしゃびしたカレーとキャベツの千切りとお茶が乗っていた。お茶はお代わり出来るのかな。
　お腹はそんなに空いてはいなかったが、折角なので頂いた。よくよく思い出してみれば、カツカレーは美味しかったな。
　食事を済ませると、することも無いので俺はさっさと布団に入った。
　入ったものの、夜中に声を出す奴がいたり、見回りの足音がうるさかったりで結局ぐっすりは眠れず、俺ってこんなに繊細だったっけ、と思いながら起床の時間を迎えた。
　朝方になって眠気がピークになったせいかぐっすり眠ったと思ったのだけれど、朝食が運ばれて完全に起こされた。
　トレイには、焼いてない食パンとミニトマトと牛乳が乗っていた。
　朝だけど、朝だけど.....ラーメン食べたいな。温かいご飯と味噌汁が恋しいな。
　携帯で時間を確認すると、朝８時だった。相変わらず圏外だった。それから２時間程して、柏木警部が現れた。
「おはよ。ぐっすりは、眠れる訳ないか。クマがスゴいわね」
「はい、全然寝てないんですけど、大丈夫でしょうか」
「記憶確認は眠ってる間にするんだけど、これなら軽い薬で済みそうね」
「薬なんてなくても、ぐっすり眠れますよ」
「途中で起きられると困るから」
「そうですか」
　記憶確認は警察署で簡単に行われるものだと思っていたのだけれど、実際には警察病院で行われるとかで、パトカーでの移動となった。
　30 分程して、綺麗な病院ビルに到着した。柏木警部は、パトカーの中で俺の手錠を外してくれた。
「いいんですか？」

「変な気起こしたら、射殺するけどね」
　信頼されてるのかされてないのか全く分からないが、見えない手錠がされているのはよくわかった。
　パトカーを降りて、柏木警部に案内されながら病院の中へと進んでいった。こんな大きくて綺麗な病院は初めてだ。両親と離れてから、病院に行ったことなどなかった事を思い出した。両親と住んでいた時は、近くに人間専用の小さな病院があったので、そこに行っていた気がする。

内緒のあだ名はカモノハシ

　柏木警部は無言のまま、俺を地下の白い個室に案内した。子供の頃行った病院独特の消毒の臭いなどしなかった。ここに、人間はいないのだと実感する。
　部屋には大きな窓があり、外の様子が見れるようになっているが、そこもまた事務所のような部屋になっていて機材がいっぱい見える。
「あの服に着替えて、ベッドに座って待ってて。あ、下着はつけないでね」
　柏木警部の指さす方を見ると、ベッドの上に薄いガウンのような服が畳んで置いてあった。
　俺が返事をすると、柏木警部は隣の部屋に移った。俺が気にせず着替えを始めると、彼女はカーテンを閉めた。
　着替えを終えて少しすると、室内に柏木警部の声がした。
『私の声は聞こえるかしら。着替えは終えた？』
「聞こえます。終わりました」
　音は聞こえないが、しゃーっとカーテンが開けられ、柏木警部と白衣のおじさんが一人居た。
『隣に居るオッサンは、脳の専門医よ。人間の脳の研究もしてる、一応偉い先生なの』
　なんだか言葉にトゲがあるのだが.....。偉い先生にオッサンとか言って大丈夫なのだろうか。
　と思い先生に目配せすると、ちょっと嬉しそうだった。そうか、美人は何しても許されるのか。
『今から記憶確認の作業準備を始めるわよ。先生がそっちに行くから』
　先生が部屋に来た。手には注射器を持っている。注射はあんまり得意ではない。
『いい年の男が、注射器にビビってるんじゃないわよ』
　どきっとした。恥ずかしさで顔が紅潮する。
　柏木警部はドＳだと確信した。けど、悪く思えない俺はドMかもしれない。
　小さな磁気シールのような物を頭に幾つか貼られ、ベッドに寝かされると注射を打たれた。
　すぐに耐えがたい眠気が襲い、寝不足もあってか、深い眠りに落ちるまで時間は掛からなかった。

＊＊＊＊＊

　目が覚めた時、意識がぼんやりしすぎて自分が何処にいて、何があったのか直ぐに理解が出来なかった。

　暫くぼんやりとして、自分が病院にいるのだと把握した。最初に点滴が入れられているのが目に入り、意識が徐々に回復すると、カテーテルとおしめがあてがわれているのに気がついた。いい年してオムツとか、まじもう恥ずかしくて死にたくなった。
　もう大丈夫だから下半身の物を撤去して貰おうと思ったのだけど、身体が全く動かない。何これ、マジで。
　で、手元のナースコールに気付いたので、なんとかそれを押すのが精一杯だった。
　可愛らしいナースが来てくれるのかと期待したのだが、来てくれたのは年輩のおばさんだった。
「身体が動かないんですが.....」
　と言ったら、声が殆ど出なかった。
「記憶確認で、脳が疲れきってるんです。疲れで、３日程仮死状態だったのですから、もう暫く休んでリハビリしてから社会復帰してください。それと、桜木さんの無実は証明されました。よかったですね」
「はい」
　無実を証明されたのはいいが、ここまで酷い目に遭うとは思っていなかったから、何か複雑な。
　で、ふと疑問が浮かんだ。
「あの.....あれから、どのくらい経ってますか」
　この様子だと丸１日は寝てたように思う。
「２週間くらいですね」
　あまりの衝撃に、意識がなくなりそうになった。

＊＊＊＊＊

「柏木警部ぅ～。病院から、霞ちゃんが起きたって連絡ありましたよん」
　彼女は若くてぽわんとしているが、れっきとした刑事である。柏木の後輩で、友達である優秀な部下の最上刑事だ。
「その愛称やめてよ、霞ちゃんって顔してないじゃない」
「じゃあ、柏木警部はどう思うんですか？」
　柏木は暫く考えて
「そうね、カモノハシかしら」
　と答えた。最上、大爆笑。
「柏木警部にしては、珍しいですよね。冤罪だったって分かったのに、まだ気にかけてやるなんて。そのカモノハシに、惚れちゃいました？」
　柏木は履いている自分の赤いハイヒールを掴むと、それを今発言した部下の川田に投げつけた。川田の額にスコーン！　　と命中した。
「天誅くだすわよ！」
　いつもの事だと言わんばかりに、最上がぽわんと質問した。
「でも本当、珍しいってアタシも思います。柏木警部、どうした風の吹き回しなんですか」
「ちょっとね、引っかかる事があるだけよ。ちょっと、カモノハシの記憶の中でね」

「今回の事件の事ですか？」
「そうでもないんだけど……」
　最上も倒された川田も、頭を傾げた。
「まあ、たいした事じゃないんだけどさ。気にしないでよ。個人的な興味よ」
　あ！　と最上が声を上げた。
「柏木警部って昔、人間だったって言ってたじゃないですか。人間ってのに、何か共感みたいな物感じたりしちゃったんですか」
「……そうね……そんな感じかな」
　人間とか、そこまで心地よいものなのだろうか。面倒そうな気もするのだけど、と最上は思った。

＊＊＊＊＊

　身体は満足に動かせないながらも、意識がはっきりしてから目がちゃんと見えるようになった。きょろきょろしてたら、時計を発見した。
「入るわよ」
　柏木警部の声がして、同時に彼女が姿を見せた。１人だった。時間は 20 時前だった。多分、もう少しで面会も終わる。もう会うこともないと思っていたので、予想外のお見舞いで嬉しかった。手には小さいながらも花束があった。柏木警部の顔も、少し照れてるように見える。
「元気そうね」
「そう見えますか？」
　花瓶の要らない花束らしく、彼女はそのままサイドテーブルにそれを置いた。
「ぴんぴんしてんじゃない」
　俺は笑えなかった。
「疑って悪かったわね。でも、これが私の仕事なのよ」
「わかってます」
「恨まないでよね」
「恨まないです」
「そう」
　面会の時間が終わった。病院内に放送が流れた。
「あの、また来てくれます？」
　失礼ながら、俺はそう言っていた。
「ええ。あの子供の事も話さないといけないしね。今日は仕事で遅くなったけど、次はもう少し早い時間に来るわ」
　と、柏木警部は帰ってしまった。明日も会えたらいいなあと、淡い期待が混み上がるものの、恋人でもない彼女が現れる筈もなく。次にお見舞いに来てくれたのは、リハビリが始ってからの１週間後だった。
　人間の記憶確認は、脳に相当なプレッシャーを与えるらしい。それに伴って、相当な体力も奪われるとか。出来ればやらない方がいいくらい、下手したら死ぬこともあるく

らい、負担が掛かるものだと後から知った。生きてって良かった。
　なので、元の状態に戻るまで時間が掛かるのは当たり前だそうだ。ただ、俺がもしロボットだったら、目が覚めた時点で問題なく帰宅出来たらしい。
「少し痩せたみたいね、良いダイエットになったんじゃない」
「あの、窶れたって言って貰えます？」
　一応、俺も言葉を返せるまでには回復した。
「腹出てたし、丁度良かったんじゃない。気にしてたでしょ」
　俺は叫んだ。
「もう、忘れてください！！」
　そう、柏木警部は俺の記憶をしっかり見ている。少し前に、ビールで付いて来た腹の肉をぷにぷにしてるとこまでも！
　でもまだ 165 センチの 57 キロだし、ましじゃね？（ 泣 ）
「今日は、あの子供について調べてきた事を話そうと思ってね。記憶の話で悪いんだけど、あの子の事気にするほど一緒に居てないんでしょ。それでも知りたいのは、何故かしら」
　なんて説明すればいいのかな。本能的に心配なんだけど。
「幼児が１人で現れて.....訳分からないまま手から離れて.....心配しちゃおかしいですかね？　　うまく言えないけど」
　柏木警部は、何も言わなかった。表情も変わらないから、分かってくれたんだかくれてないんだかも分からないけれど、彼女は鞄から電子メモを取り出した。

お前は、お母さんか

　柏木警部は、立ち上げた電子手帳の内容を読み上げた。
「人間で言う推定年齢３歳の幼女型ロボット。記録データが 85 %欠落。製造から半年は経過していると思われる。未確認最新型ロボットのため、詳細は不明。記憶や機密データに高度なセキュリティロック確認。現在、身元確認のため、欠落データの復旧作業と、セキュリティロック解除作業中。これが、現在の状況よ」
　柏木警部は、電子手帳を鞄に戻した。
「で、私なりにも調べてみたわ。誘拐の届け出もなければ、捜索願いも出ていない。製造記録も見つからなかった。そこで、町中の事件も調べてる。今のところ幼女が関わっていそうな事件の一つもないわ」
　俺は、ぽかんとした。
「でも、あの子は誘拐されたのですよね？」
「私も不思議に思ったの。誘拐されたのなら、その確認ができるはずって。確認もしないのに、誘拐やら共犯やらって言えないでしょ。何らかの形で、敵か味方の区別は必要。けどね、その誘拐の事実ですら、あやしいものだったの。幼女は誘拐されてないのかもしれない」
「え？　犯人が.....子連れで強盗ってするもんですか？」
　柏木警部は笑った。
「そりゃ傑作だわ！　コメディだわ」
「柏木警部.....」
「でも、それも強ち否定出来ないのよ。で、誘拐だって最初に言い出した奴がわからない。私は部下から聞いて、部下は情報部から聞いて、情報部の誰が確認して、そう報告したのかがわからなかった」
　俺の頭はいっぱいだった。
「すみません、そろそろリハビリに.....」
　ナースが気まずそうに声を掛けて来たのを合図に、柏木警部は立ち上がった。
「これは、私自身も引っかかるのよね。私も動いてみるつもりでいるの」
「あの、ウサ.....幼女は、今どうしてるんですか？」
　柏木警部が、顔を傾げた。
「だから、作業中だって」
　俺の頭に、配線で繋がれて無理矢理眠らされ、数人の男に囲まれているウサ子の姿が浮かんだ。
「そんな！　モルモットじゃあるまいし」
　柏木警部が、顔を不快に歪めた。

「何想像してんの？」
「だって、作業中って！　ロボットで幼児だって.....人権ぐらいあるでしょう」
　彼女の口から生まれたのは失笑。
「ウサ子、だっけ。この病院で元気に生活してるわよ。あんたの何倍も楽しそうにね」
　きょとんとする俺を置いて、柏木警部は去っていった。小気味良く、赤いハイヒールを鳴らしながら。

　リハビリの軽い運動を終わらせて、柏木警部にこちらから連絡を取りたいとナースに頼んだ。
　ロボットナースは、それを拒否した。
「柏木警部に、桜木さんからご連絡を取ることは許可されていません」
「何故ですか？」
「プライバシーの侵害に当たるからです」
　なるほど。この情報＆電子世界での、お願いの仕方を間違えたようだ。
「あの、個人的ではなくて、会社を通してで構わないのですが」
　今度は、ナースも承諾してくれた。
「どのようなご用件でしょうか？　柏木警部の勤務先である警察署に問い合わせてみます」
「ウサ.....幼女に会いたいんです。そう伝えて貰えれば分かります」
　ナースは、間も空けずに答えた。
「保護幼女について、柏木警部から伺っております。もし、桜木さんが幼女についてご質問された場合、場合によっては面会させるようにと」
　俺は嬉しくなった。
「本当ですか！」
「ええ、嘘は言いません。夕方、面会の準備をいたします。お部屋までお迎えに参りますので、それまでお待ちください」
　俺はうきうきしながら部屋に戻った。
　戻ると、部屋に圭介が来ていた。俺を見るなり、彼は涙目になりながらタックルのようなハグをかましてきた、
「霞ちゃん！　心配したよ!!　オレ、100 回くらい電話したし家にも行ったのに行方不明だし。まじ心配したんだよ！　人間だから孤独死してるか、誘拐されて遠くの国に売られちゃったか、とか色々考えてさ！」
　だいの男の慰め方などよくわからないが、取り合えず俺に抱きついたままの圭介の頭をなでなでしてあげた。
「まあ、落ち着いてよ。圭介からの連絡みたの昨日だったし、病院だからか電波飛ばなくて」
「もう、そんな古典的なもん使ってるからだよ！」
「通信機器内蔵出来ないからね、俺。人間だもの」
　有名な格言は、こんな時に使うものらしい。
「で、どうやってここだって知ったの」

「警察に捜索願い出したんじゃん！　警察もなかなか教えてくれなくてぇ。やっと今朝連絡来たんだって。それで、デートすっぽかして飛んできたんだからね！」
「愛されてるんですね」
「そら、使い捨ての女より一生の友人でしょう！」
　さらっと酷いことを言ったぞ、この男。
「霞ちゃん、痩せたね。いっぱい食べなきゃね。退院したら、なんか作ってね」
　退院祝いにごちそうしてくれるんじゃないのか.....俺が作るのか。
　俺は複雑な気分になった。
「酷い病気だったのかな。体力が 25 %も落ちてる、脂肪も筋力も。まだ暫くは退院できなさそ？」
「うん、まだ聞いてないね。ある程度体力が回復しないと、生活に支障をきたすといけないからって」
　半泣きの圭介はようやく俺から離れると、今度は圭介が俺の頭を撫でた。
「待ってるからね、がんばるんだよ」
　なんだろう、こいつはお母さんかね。
「なんか必要なものがあったら、オレに言うんだよ」
「うん、ありがとう。売店にもあるし、なんとか大丈夫。また連絡するわ」
「また、来るわ」
　と、圭介は早々帰っていった。すっぽかしたと言っても、流石にすっぽかしきれなかったんだろう。
　部屋で１人になって落ち着くと、改めて圭介の優しさが心に響いた。一人暮らしで恋人もいない、仕事すら就けない男。考えてもみれば、圭介の言う通り、孤独死して白骨化しても気付かれない、なんて事もありえるんだよな。圭介がよく遊びにくるのも、少なからずそういう心配もあるのかもしれない。
　退院したら、料理をいっぱい作って心配させたお詫びというかお礼をしてあげるのも、ありだよな。うん。
　あと、もし可能だったら柏木警部にもお礼にご馳走したいな。まず不可能だけど。
　昼食を食べてから、テレビを見ていた。その間も、ウサ子と会えるのが楽しみでしかたなく、ずっとそわそわていた。そんな様子を見て、事情をしらないナースが圭介の事を俺の恋人かどうか聞いてきたのだが、そこは全力で否定させてもらった。いくらモテなくても、俺は女性が好きである。マジで。
　暫くして、リハビリの時とは違うナースが現れた。リハビリの時のナースに頼まれたとのことで、案内してくれるという。
「あの、すっかり忘れてたんですが、服は着替えた方がいいですか？」
　俺は病院着のままだった事を、忘れていた。
　ナースは無表情だった。
「そのままで結構です」
「ウサ子は、元気ですか？　どんな生活してるんですか？」
「私は、詳しく知りませんが、彼女担当のナースと教育カウンセリンセラーもいます。そちらのお二人もご紹介いたしますので、その方々から聞いてください」

　病室内を歩いて移動するのだが、確かに広いがしれてる広さでありながら、俺は息が切れてきた。なんというか、著しい体力の減少具合に、我ながら情けなく思う。
「ウサ子には、また会いに来てもいいんですかね？」
「それも、あちらにご確認ください。それより、桜木さん。大丈夫でしょうか？　車いすをご用意いたしましょうか？」
　車いすに乗ってウサ子の前に現れるとか、情けなくて嫌すぎる。
「いえ、結構です」
「そうですか。ご無理なさらぬように」
　ナースなのだから、もう少し愛想良くてもいいと思うんだけどな。すれ違うナースを見れば愛想を振りまいてる人も多いので、きっとナースによるのだろうと思った。

パパと呼んでくる

　ウサ子が居るらしい病棟は、俺が入院している病棟から少し遠かった。
　途中オートウォークがいくつもあり、ベルトコンベアのように運ばれている時は楽だったのだが、歩いて移動しなければならない部分もあり、今の俺には体力的にきついながらも、運動としては良いのかもしれない。
　病棟は５つ程あって、一番端同士が俺とウサ子の病棟だった。で、俺は地下だけどウサ子は最上階。
　ナースの案内が、奥の病棟の最上階の自動ドアの前で止まった。
「この向こうに居ます。このフロアは、児童の遊び場兼学び場所となっていて、寝るときと検査の時以外は、大抵ここに居ると思います」
　ナースが扉横のボタンを押すと、扉が開いた。暗証番号を入力したらしい。
　フロアにはウサ子と同じくらいの子供が何十人も居て、想像以上に広かった。
　床には玩具も転がっているし、奥は擦りガラスになっているものの、その向こうが勉強部屋のようになっているのがわかる。
「ウサ子は、今ここに？」
「はい、私はそう聞いています。先程、検査が終わったと聞いていますから。専属のナースとカウンセラーを呼んで来ますので、今暫くお待ちください」
　ナースは１人、フロアを出て行った。
　ウサ子がここにいるなら、待っている間に探せばいいと思い、俺はフロアをうろうろした。
　５分くらい探したところで、ウサ子を見つけた。彼女は大きなウサギのぬいぐるみを抱きしめていて、相変わらず耳にはあの白いウサ耳のような髪飾りを付けていた。あの頃より小綺麗になっているような気がした。
「ウサ子」
　俺が呼ぶと、彼女はきょとんとした目でこちらを見て、直ぐに満面の笑みでウサギのぬいぐるみと共に抱きついてきた。
「ぱぅぱぁー！」
　まだ上手く言葉が話せないから、知った男は皆パパなんだろう。結婚もしてないし、まだ若いんだけど.....ウサ子になら、悪くない。寧ろ、ちょっと嬉しい。
「ウサ子、ちゃんと覚えてくれてたんだね。心配したぞ、元気してた？」
「ぱぅぱぁ！　ぱぅぱぁ！」
　よっぽど嬉しいのか、俺の服に顔をすりすりして離れない。可愛すぎる。俺も離れたくない。
　と、感動の再会を楽しんでいると、先程のナースに連れられて、専属ナースらしき女性とカウンセラーらしき女性が俺に声を掛けた。

「はじめまして、桜木さん。彼女の専属ナースのサライです」
「はじめまして、こんにちは」
「はじめまして。私は教育カウンセラーのマリラーです」
「どうも、はじめまして」
「こちらにどうぞ」
　２人から自己紹介され、場所を変えるように言われたのでウサ子を離そうとしたのだが、ウサ子は嫌がって俺から離れない。いやいやと泣きそうになった。
「あ、桜木さん。彼女を抱いたままで結構ですよ」
「あ、そうですか」
　俺は、べそかくウサ子を抱いたまま、案内されるがまま、フロアを出た。
　フロアの外に出て、右に曲がった奥の部屋に案内された。そこにはソファとテーブルがあって、ちょっとした応接室のようになっていた。ソファに腰掛けると、タイミング良く別のナースがコーヒーとウサ子用のオレンジジュースも持ってきた。
「桜木さんには、色々お話せねばならない事が多かったので、こちらに移動して頂きました。どうぞ、ご遠慮なくお飲みくださいね」
「あ、はい。ありがとうございます」
　俺は、ウサ子に一目会いたかっただけなんだけどな。なんだろうか。ウサ子の親が見つかったとか、かな。良いことなんだけど.....なんかなぁ.....俺としては複雑だ。
　ウサ子を抱きしめる俺の手に、無意識に力が入った。
「そう、緊張しないでくださいね。ですが、少々困った事がありまして」
「はい」
「その前に、桜木さんは彼女をなんと呼んでいらっしゃるのですか？」
「え？　　ウサ子、ですけど。名前、わかんなかったんで。とりあえず」
「そう、ウサ子ちゃん。ウサ子ちゃんが、ロボットなのはご存知ですか？　　それも、最新の」
　会話を中心で進めているのは、専属ナースのサライさんだった。俺をこの病棟まで案内したナースは、いつの間にかいなくなっていた。
「ええ、柏木警部から聞いています。と言っても、ざっくり。本当に少しだけですけど」
「そうですか。では、その情報と重複する部分もありますが、お話いたしますね」
「はあ」
　って、なぜ俺なのだろう。よくわからんが、取り合えず俺は黙って聞くことにした。もしかしたら、これも柏木警部の心遣いかもしれないと思ったから。
「ウサ子ちゃんのプログラムには、高度なセキュリティが掛かっていて、正直私達には手が追えません。そのプログラムに、どうやら桜木さんが父親だとインプットされているようなのですが.....何か思い当たる部分はございませんか？」
　俺は、思わず噎せてしまった。は？　　どういうこと？　　みたいな。
「み、身に覚えはないのですが.....」
　なんだろう。俺の頭が真っ白になる。ウサ子のパパは、リアルパパだった。
「ウサ子ちゃんのお名前も、ウサ子みたいです」
「え？　　どういう事なのか、俺には理解できないのですが」

「恐らくですが、ウサ子ちゃんに組み込まれていたプログラムに、桜木さんを狙ったのか狙っていないのかわかりませんが、父親として認識するようなものがあったみたいです。あと、桜木さんが呼んだ名前が名前として決定するようになっていたようなんです。そこで、そのプログラムの内容や仕掛けた者の痕跡を調べようとしたのですが.....全てロックされて手の出しようがないという状況です」
「じゃあ、ウサ子の親は探せないと」
「はい。名乗り出て貰わない限り、こちらから見つけようがないんです」
　俺は、ウサ子を見た。俺の膝の上で、楽しそうに笑っていた。ウサ子が可哀想過ぎて、俺は泣きたくなった。こんな可愛い子を手放すなんて、その親を見つけたら、ボコボコに殴ってやりたい。
　と思ったところで、サライさんはウサ子にとって残酷な言葉を続けた。
「ウサ子ちゃんが最新のロボットだというところを見れば、もしかしたら彼女は製造されたばかりなのかもしれません。制作者が親だと言えばそれまでですが、ウサ子ちゃんがオーダーメイドなのか量産タイプなのかまではわかりませんが、人間でいう親というものは存在しない可能性があります。桜木さんは、ご存知でしょうか。幼児タイプのロボットは量産され、プログラムだけ引き継いでボディだけ使い回されたりリサイクルされたり、時には思い出の人形としてコレクションされることもあります。量産的に製造されるのは主に幼児タイプのみ。倒産する企業が、無い訳ではないのです。最新のタイプを研究し製造するのもお金が掛かる。採算が合わなければ、倒産する企業だって出てきます。近頃は特に、そういった傾向が目立つのです」
「表だってニュースになってないって事ですか？」
「ええ。ロボットがロボットを産み出すのは、高度なボディを手に入れなければ難しい。まだ、子を購入する方が一般的なのです。それ故に、最新児童ロボットメーカー企業の特に小規模なメーカーはどうしても立場が弱くなるのです」
「それじゃあ、何処知れず倒産した児童ロボットのメーカーが、ウサ子を処分したと」
「そうも考えられます。その関係者が思いあまって強盗した、そういう考えも出来ると今警察では動いているようですが。ただ、はっきりした証拠もないので。全てはまだ憶測です」
「だとしたら、ウサ子以外にも何体か処分されたロボットが見つかるんじゃないですか？」
「そうですね。今のところ、確認が取れているのはウサ子ちゃんだけですが」

パパになる

　ウサ子が処分された児童ロボットの１体だとしたら.....。
「この子は、どうなるんですか？」
　先程から話しているサライさんは、俺を病棟まで案内してくれたナースと違って表情が豊かだ。あのナースは、何故あそこまで無表情だったのだろうと思えるくらいにサライさんの表情が、痛々しく見える。
「ここからは桜木さんの判断になりますが、桜木さんはウサ子ちゃんの父親になるつもりはありますか？」
「もし、俺がそれを拒否したら、ウサ子はどうなるんでしょうか？」
「暫くしたら、里親を捜す事になるでしょうが、それまでは施設で生活して、里親が見つからない場合は廃棄処分になります」
「なります！　　父親になります!!」
　廃棄処分.....何じゃそりゃ!!　考えるより先に、俺は叫んでいた。ウサ子がびっくりして、息を飲んだ。
「わかりました。では、柏木警部には、私の方から伝えておきます。後程手続きがあり、正式に父親として認定されます」
　ここで初めて、マリラーさんが口を開いた。
「子育ては初めてですよね。退院までに、今後の事について私が指導いたしますし、退院後もご相談に乗ります。桜木さんは幸いな事に純人間ですから、助成金も優遇されます。子育てするにも生活するにも、不自由はないでしょう」
「そうですか、それはよかったです」
　俺の生活はいいのだ。惨めだけど、俺だけなら我慢は出来るから。
「あの、じゃあまたこの病棟に来てもいいんですね」
　サライさんが、答えた。
「ええ、後程ＩＤカードをお渡しいたします。寧ろ、毎日会いに来てあげてください。桜木さんが父親としてインプットされているのもありますが、ここに来た時のウサ子ちゃん、大変だったですよ。桜木さんを求めて泣き止まないし、夜だってやっと寝たと思っても夜泣きで起きて。今朝、桜木さんに会えるって聞いて初めて泣き止んでくれた」
　そういえば、フロアで見つけたときウサ子は独りぼっちだったっけな。泣いてばっかりで、友達も出来なかったんだろうな。
「父親として何処まで出来るかはわからないですが、精一杯この子の側に居てやりたいと思います」
「そう気を張らないでくださいね」
　サライさんは、優しく笑ってくれた。

　気付けば、そろそろ夕飯の時間だ。
「ウサ子ちゃん、パパと一緒にお部屋に戻りましょう。パパもご飯のお時間ですからね、パパとはまた明日」
「いーやー！」
　相変わらずウサ子は離れないが、取り合えず俺はウサ子を抱えて部屋に運んだ。
　部屋は個室だった。酷く泣くので、防音の個室に移したそうだ。
　ぬいぐるみや玩具がある可愛らしい部屋ではあるが、がらんとしてどこか無機質に感じる。大きな窓があったので外を覗くと、流石最上階と息が漏れるくらい綺麗な夜景が広がっていた。
「ウサ子、めちゃくちゃ綺麗だよ」
　ウサ子は理解しているのか、渋顔で俺のシャツを離さない。俺がいない間、この部屋で独りぼっち。どんなに寂しかっただろうか。
「なあ、ウサ子。よく我慢したな。偉いな。俺なんかダメ人間が親父になっちゃって、ごめんな。ウサ子は可愛いから、もっと立派な奴が直ぐに貰ってくれたかもしんないのに.....。けどさ、廃棄処分って聞いて、どうしても許せなくってさ。こんな俺だけど、娘としてよろしくな」
　俺はちょっと泣きそうだった。見たらウサ子は、安心したのかいつの間にか眠っていたので、今の俺の話なんか聞いてなかったと思う。ぷっと俺から笑いが漏れた。
「失礼します。お夕食お持ちしました」
　ナースが夕食を運んでたので、それをサイドテーブルに置いた。もしかしたら起きて、お腹が空いているのに何もなかったら可哀想だから。と思ったけど、ロボットだから食べなくても平気なのかな。そういえば、ロボットの空腹感を知らない事に気付いた。今度、圭介に聞いてみよう。
　俺はベッドにウサ子を寝かすと、暫くその可愛らしい寝顔を見てから、自分の部屋に戻った。
　翌朝、マリラーさんがＩＤカードを持って来てくれた。ウサ子の部屋とフロアの中に入れるセキュリティキーだそうだ。
「ウサ子ちゃん、待ってますよ。時間が出来たら、会いに行ってあげてくださいね」
「はい、今直ぐにでも会いに行きたいのですがリハビリの時間があるのがもどかしいです」
「そうですか」
　マリラーさんは笑った。
「あと、柏木警部に昨日の話を伝えましたら、本日にでも桜木さんの会いに行くと言っておられました。昼頃だと言っていましたので、柏木警部と話された後に来てください」
「とすると、昨日と同じくらいの時間にしか行けませんね。直ぐにでも会いに行きたいのに」
　するとマリラーさんが、意外な提案をした。
「私の方から話してみますので、今夜ウサ子ちゃんと過ごしてはどうでしょう？」
「そんな事出来るんですか？」
「ええ、多分大丈夫でしょう」

「是非、お願いします！」
　恋人に会いに行くのとは違うけど、それに近いどきどきがある。まだまだ一日が始まったばかりだけれど、もう既に夜が待ち遠しい。
「では、夕方お泊まりセットを持って来てくださいね」
　俺は再び頭を下げた。先日まで酷い目に遭ったと思っていたけど、今はそうは思わないから。神様はちゃんと見ていてくれるのかもしれない。今の俺にとっては女神様のような柏木警部に、あとでちゃんとお礼しよう。カツカレーでも御馳走したいけど、今の俺の状態ではどうしようもないから、後日警察署に何か持っていこうと思う。あ、甘い物は好きかな。クッキーとかケーキとか.....会ったときにでも聞いてみよう。
　その柏木警部が現れたのは、昼食後直ぐでリハビリが始まる２時間程前だった。
「あらま、今日は顔色がいいのね。例の子には会えたの？　　聞いたわよ、父親になるのに決めたってね」
「はい、もう可愛くて。あと、名前はウサ子です」
「へえ。もっと可愛い名前付けてやんなさいよ」
「それが、取り合えず付けた名前がインプットされちゃったみたいで。俺としては、悔いが残る部分なんですが」
「そうなんだ」
「柏木警部、ふと疑問に思ったんですけどね。もし、突然ウサ子の両親が現れた場合、ウサ子はどうなるんでしょうか？」
　柏木警部は、鞄から書類の束を取り出した。
「今から、あんたが正式な父親だっていう手続きをするわ。それが承認されれば、っていうかされると思うから、そうなれば法律的にもあんたが父親。もし、その後本当の両親が現れたところで、その事実は変わらない。けれど、あんたがその事を了承し、親権を譲渡すれば、あの子は元の親の元に戻る事になるわね」
「じゃあ、その後は俺次第ってことですか」
「まあ、そうなるわね。けど、相変わらず届け出も捜索願いもないから。きっと、親は現れないと思うわ。あ、あんたは捜索願い出てたけど」
　圭介の言ってたやつだな、と俺は思った。
「あんたの恋人？」
「そこは否定します。友人です。俺もあいつも、好きなのは女」
「あらそう」
　柏木警部は笑った。そして、大量の資料を俺に渡した。
「じゃあ、それ一通り読んで。サインして。拇印押して」
「あ、はい」
　時間はあるようで、この資料の量を見ると無いように思えた。俺は急いで資料を広げ、読み、サインと拇印を押していった。それを無事終えたのは、リハビリが始まる 15 分前だった。また、柏木警部とゆっくり話す時間が取れなかった。
「よし、じゃあ確かに」
　彼女は確認するかのように資料を手に取ると、それを鞄に戻した。資料というか、契約書だったのだけど。

「あの、また会えますか？」
「なに、ナンパ？」
　立ち上がる柏木警部を、俺は引き留めた。
「いえ、一度ちゃんとお礼も言いたいなって。あの、勘違いしないでくださいね。本当変な意味ではなくて、お礼というか、ちゃんと話がしたいので」
　柏木警部は少し間を置いてから、にっこり笑った。
「まあ、また用もあるし。良いわよ。またくるわ」

柏木警部へのお礼を考えよう

　柏木警部が帰ってから、いつも通りにリハビリを終わらすと、俺はマリラーさんに言われた通りお泊まり用の荷物をまとめた。と言っても、たいして持ち物もなければ、最悪取りにも戻れるのだけれど。
　リハビリを終え、軽くシャワーを浴びてから部屋を出た。何となく順路は覚えているし、ウサ子と一緒に居られる嬉しさで今日は道中疲れも感じられなかった。もしかしたら、少しスキップしてたかもしれない。そのくらい、嬉しかった。
　先にフロアを覗いた。借りたＩＤカードで中に入ると、ウサ子の方が先に俺を見つけて飛びついてきた。
「ウサ子、良い子にしてた？」
　ウサ子は俺の胸で怒ったように、顔をぐりぐりしてきた。
「あら、ウサ子ちゃん。良かったね、パパ来てくれて」
　サライさんが現れてウサ子に声を掛けたが、ウサ子は何故か、ぶすっとして俺の胸に顔を埋めたままだった。
「サライさん、何があったんですか？」
　サライさんは、俺に苦笑いを見せた。
「桜木さんが、ウサ子ちゃんが寝てる間に帰っちゃったから拗ねてるんですよ。さっきまで、ずっと泣いてて……もうすぐ来てくれるから、良い子で待ってようねって話して、ようやく落ち着いたんです。今夜は一緒に居てあげてくださいね。ウサ子ちゃんに限らず、まだまだ甘えたいから」
「俺もウサ子と一緒に居れるって聞いて、この時間が楽しみで仕方なかったんです。まだまだ父親って柄じゃないけど、精一杯父親になってあげたいって思います」
　拗ねるウサ子をぎゅっとした。ウサ子の小さな呼吸が感じられる。
「ウサ子ちゃん、パパにいっぱい遊んで貰ってね」
「ぱぅぱあ、あーうー」
　言葉がわからないのだが、ウサ子は俺の服をぎゅっと握りながら、後ろ向きに手を振った。何かを訴えたいような素振りに、サライさんが気付いた。
「ああ、ウサ子ちゃん。絵本を読んで欲しいのね。沢山絵本を読んであげれば、そこから言葉を覚えていくの。早く言葉が話せるようになるから。ウサ子ちゃん、きっと早く言葉を覚えて、パパとお話したいんだわ」
「へえ、そうなんですか。じゃあ、沢山読んであげたいと思います」
「ウサ子ちゃん、パパにご本がある場所、教えてあげてね」
　サライさんが言うと、ウサ子は俺の腕からぴょんと飛び降りた。俺のズボンの裾を引っ張る。

「ウサ子、行くよ」
「じゃあ、桜木さん。何かありましたら、ご遠慮なく呼んでくださいね」
　サライさんもマリラーさんも、親切で本当に良かったと思う。新米パパはこれからなのだ。
　この日、フロアが閉まるまで、俺はウサ子に沢山絵本を読んでやった。部屋に戻る時間もまだ読むようにせがむので、サライさんにお願いして数冊の絵本を部屋に持ち込む許可を貰った。
　夕飯を食べ終えて、一緒にお風呂（ と言っても、時間交代制の共同浴場 ）に入り、ベッドの中でウサ子が寝るまで絵本を読んだ。ウサ子の寝顔は、天使そのものだった。もし、天使と言うのがこの世にいるのであれば、ウサ子は天使界のスーパーアイドルだろう。そのくらい可愛い、可愛過ぎるのだ。
　そういえば、俺の父親ってどんなんだったろう。ちゃんと仕事をしていたイメージは無いのだけど、かといって沢山遊んで貰った覚えも無い。なんというか、印象というか存在感の薄い親父だった。俺の顔はどちらかというと母親似なのだが、父親はほっそりした薄い顔立ちの大人しい人だった。だからと言って、悪い父親ではなかった。遊んで貰った覚えはなくても、一日に一冊必ず本を読んでくれた。じゃあ、父親は普段何していたのかと記憶を掘り起こして考えてみたら、そういえば家事をよくやっていた。そうか、俺の家事好きは父親譲りなのかと納得した。
　反面、母親はよく俺と遊んでくれた。冗談を言うようなお茶目で、子供と一緒に走り回るような活発な母親だった。そこは俺に遺伝しなかったのが、残念なくらい。
　そういえば、ウサ子にも母親が要るだろう。俺は独り身だし、当分恋人も出来そうにないし.....まあ、明日サライさんかマリラーさんにでも相談してみよう。
　ウサ子に続いて俺も寝た。あっと言う間の一日だった。
　翌朝一番に、意外な来客があった。意外の意味が少し違うのだが、その相手は柏木警部。
「おはようございます」
「あ、驚いてるわね」
「意外だったので」
「そうでしょ、たまにはね。というか、あんたがちゃんとパパやってるのか見に来たって言いたいのだけど、私もここまで関わった幼女をちょっと見てみたくてね。サライさんから聞いて、親子の姿を見てやろうって」
「そうだったんですか。まだ、実感ないんですけど。でも、なんとかパパになりたいって思ってるんです」
　柏木警部は、にっと笑った。
「柏木警部、本当にありがとうございます。でも、何で俺にこんなによくしてくれるんですか？」
　柏木警部の表情が、少しばかり戸惑ったように見えた。彼女はちょっとの間考えるような素振りを見せ、その後軽く咳払いをした。
「そうね、警察だからかな。私も、犯人逮捕だけが警察の仕事じゃないって思ってるの」
「そうですか。それで、犯人は捕まったんですか？」

　柏木警部の顔が、今度は渋い表情に変わった。
「捕まらない。痕跡すらもないの。犯人の目的すら、わからなくなっちゃって」
「おかしな事件ですね」
　よくわからないけど自分から振っただけに、何か答えなくてはと思ったのだが、そんなつまらない事しか言えなかった。
「まあね。でも、犯罪者は犯罪者だから。逮捕しなきゃならないのは事実よ。ところで、話したいことってなに？」
「あ」
　もしかしたら、柏木警部は昨日俺が引き留めた事を気にしてくれたのかもしれない。
「俺、本当にお世話になったんで、何かお礼したいなって思って」
　柏木警部が笑った。
「なあんだ。そんなこと、気にすることじゃないわよ。私は警察なんだから。それに、冤罪を立証して貰うのに、恥かかせたんだしね」
「それは.....。けど、ウサ子とまた会えたのも、父親になれたのも柏木警部のお陰ですから。俺、金もないし、そんな大層なお礼も出来ないんですけど、家事だけは得意なんです。よかったら、何か御馳走したいなって」
「なにそれ、家に連れ込む気？」
　俺は、全力で首を左右に振った。
「警察署にお持ちします。クッキーとかケーキとか、好きなものないですか？」
「そんなに全力で否定しなくてもね。甘い物はまあまあ好きよ。任せるわ」
　柏木警部が、少し照れたように笑っていた。なんとか、お礼の方法が聞き出せてよかった。
「これから、お仕事ですか？」
「そうよ。今日は朝少し時間あったからね。もう行かなきゃ」
　俺の目には後光が射しているように見える柏木警部に深々と頭を下げ、彼女の姿が見えなくなるまで見送った。
　その後サライさんが部屋に現れ、俺は一旦部屋に戻るように言われた。ただ、退院までウサ子と一緒に生活するようにとの事だった。そのため、俺のリハビリ時間とウサ子の検査時間は極力被るようになるらしい。

＊＊＊＊＊

「柏木警部ぅ。珍しいですね」
　部下の最上が、柏木に声を掛けた。
「いつもなら、アフターケアなんて面倒臭いって部下に丸投げするのに」
　柏木は、複雑な表情を見せた。
「事件、まだ終わってないから」
「おかしな事件ですよね。手がかりが子供とカモノハシだけとか。この事件は、柏木警部が解決する気なんです？」
「なによ、それ？」

「だってぇ、時間掛かりそうな事件だし、柏木警部を必要とする事件って他にもいっぱいあるって上の人が言ってました」
「え？　そんなん無視よ。あそこまでバカにされて、他の人に任せるとか、負け犬みたいでイヤ。あり得ないわ、マジで。それに、あの子供。なんか引っかかるのよね」

空き巣が入ったっぽい

「柏木警部、頼まれてた資料集めきりましたよ」
　部下の川田が、紙束を手にフロアに飛び込んできた。
「ああ、ありがとう。何か見つかったかしら？」
「なーんにも。あの事件に関係しそうなものは見つかりませんでしたね。あと、近日中に倒産とまでも行かなくても潰れかけたような幼児ロボットメーカーなんかも、なかったですね」
　柏木は、困った顔をした。
「そうっかー」
「困った顔も可愛らしいですね」
　川田は笑いながら、自分のデスクに座った。
「僕も思うんですけど、もうこの事件他に回しちゃったらどうです？　　そんな大きな被害があった訳でもないし、柏木警部にふさわしい事件は他にも日々起きてるんですよ。第一、今までそうしてきたじゃないですか。なんで、今回に限って、こんなにこだわるんです？」
　柏木は、タバコを取り出して口元に運んだ。
「あのねえ、事件に小さい、大きいもないの。それに、この事件気になることが多すぎるのよ。私が、やらなきゃいけない」
「それは、柏木警部の勘ですか？」
　柏木は、少しだけ間を置いた。
「そうね、そんな感じかな」
　ぼんやりと、柏木は川田の用意した資料を見つめた。無駄になったかもしれない、資料を。

＊＊＊＊＊

　リハビリに１ヶ月程掛かったが、ウサ子と俺は無事退院した。
　入院前は独り身だったのに、退院したときには子持ちになっているという、なかなかエキセントリックな状況である。知らない人が聞いたら、驚いてヘッドスライディングでもしそうな内容だが、事情を知っているサライさんとマリラーさんは笑顔で見送りの手を振ってくれた。
　迎えに来てくれたタクシーへウサ子と乗り込む。バックミラー越しに運転手の顔を確認すると、ウサ子を警察署に連れてきた時の運転手とは違う人だった。その事に、何故か妙に安心した。なんとなく、あの運転手には会いたくない。なんとなく。

タクシーの運転手に自宅への住所を伝えようと思ったのだが、ウサ子の着替えやらなんやらといった生活用品や、長らく家を空けていたので食べ物が無いことに気がついた。……冷蔵庫を開けるのが怖すぎる……。

なので、色々買い揃えてから帰ろうと思い、大型スーパーへと頼んだ。

ウサ子は機嫌良く、俺の膝の上で跳ねている。

スーパーに到着すると、ウサ子を動物型のカートに乗せて移動した。カートが気に入ったらしく、きゃっきゃと声を上げながら嬉しそう。

「ウサ子、楽しい？」

きゃっきゃと返事する。

で、ウサ子の服を数着購入して、その後食糧を買った。

早めに買い物を済ませ、タクシーを呼ぶと今度こそ自宅へと向かった。

住み慣れた場所の筈なのに、カビ臭いエントランスも薄暗く冷たい階段も妙に懐かしく感じた。

鍵を開けて中に入る。

「え？」

気にせずに、靴を脱ぎ捨てるウサ子を後ろから抱き上げた。

「あう？」

ウサ子が、不思議そうに頭を傾げて見せた。頭の髪飾りが、俺の頬に当たる。

「ウサ子、ちょっと待って」

俺は２ヶ月程前、ウサ子を警察署に連れていくために急いで家を出た。だけど、普段から掃除や片付けはしているし、あの日だって散らかした覚えはない。なのに、何故かリビングに繋がる短い廊下にタオルや服が落ちている。

警戒しながらも、もしかしたら圭介が俺に生活用品を持ってきてくれたときに散らかしたのかなと考えた。が。よくよく思い出してみれば、彼が持ってきてくれた物は全て新品だった。じゃあ、大家さんが？　柏木警部が言っていた、俺の捜索願いが出てたって話を思い出した。俺の捜索願いを出したのは、圭介だけじゃなかったとか。けど、俺の行方は警察が知っているのだから、家宅捜査する必要はない筈だろう。

俺の頭の中で、恐怖と疑問が色々な考えとなってぐるぐる渦巻いていた。

ウサ子を抱きしめながら、恐る恐る部屋の中を進んだ。

俺の部屋の間取りを説明すると、玄関を開けて直ぐに短い廊下があり、その突き当たりにバスルームとトイレがある。その横に扉が付いていて、その奥が１Ｋの部屋となっている。その扉が開いてて、そこから服やタオルが落ちているのだ。それだけじゃない、俺はその扉はいつも必ず閉めている。

壁に隠れながら、そっとリビングの中を覗いた。不審人物は見当たらなかったが、目も当てられないような状況に俺の口から悲鳴にも似た情けない声が漏れた。

「くっそぉ～ふざけんな」

冷蔵庫は開けっ放しで床に腐った食材が転がっているし、変な液体まで広がってる。備え付けのクローゼットも開けられていて、めちゃくちゃに服が散らばっている。

腐敗した食べ物のせいだろう。悪臭が酷い。

腹が立つやら、謎のくやしさやらで、気付けばウサ子を抱いたまま床にへたり込んで

いた。
　ウサ子が心配そうに俺の顔を覗き込んだ。
「ウサ子、心配はないよ。盗まれて困るようなものなんてないからさ」
　それより、片付けが辛い。
　警察に電話しようとポケットから携帯電話を取り出し、その手が震えていることに気付いた。泥棒に遭遇したのも初めてだからね。震える声で、柏木警部に繋いで貰った。
　柏木警部は出先だったようだが、対応してくれた警察官は、柏木警部の携帯用通信機器と俺の電話を繋いでくれた。電話の向こうで、柏木警部の高慢な声が聞こえた。
『なーに、泣きそうな声じゃない』
「忙しいところ、すみません」
『大丈夫よ。今、一息吐いたから今からランチに行こうと思ってたの』
　ロボットらしいのに、相変わらず食べることが好きなようだ。
「警部の声を聞いて、少し安心しました。あの、うちに泥棒が入ったっぽいんですけど、どうすればいいですか？」
『はあ？　　あんたっちって、盗られるもの置いてあるの？』
「いや、ないですけど……部屋がめちゃくちゃになってて」
『荒らされてんのね』
「はい。怖いんで」
『乙女チックね』
「俺だけならまだしも、ウサ子が居るんで。あの、マジでどうしたらいいんでしょうか？」
　俺は、電話しながら半泣きになっていた。
『住所何処？　　今から行くわ。現場、触らないでね』
　柏木警部の口調も声のトーンも変わらないが、それが逆に安心した。
　電話を切って、15 分もしないうちに柏木警部は俺のアパートに来てくれた。１人だった。
「柏木警部、１人ですか？」
　彼女は、顔色一つ変えずに現場を見渡しながら言った。
「一旦ね。だって、ランチに行くつもりだったもの。もう少ししたら部下も到着する筈だけど……派手にやられたわね。あの転がる食べ物の腐敗具合からすると、結構前から荒らされてたんじゃないの」
「そうかも。俺が部屋を空けてたのが２ヶ月くらいなんですけど」
「じゃあ、あんたが部屋を出た直ぐ後だったのかもしれないわね。何か盗られたものは？」
「現場を触らないように言われたので、しっかり見てはいませんけど、盗られた物はなさそうです。寧ろ、盗られて困るようなものなんて最初からないし……」
　といって、一つだけ思い出した。
「あ、人間証明パス」
「それじゃない？」
　ウサ子を部屋の隅に置いて、パスがしまってあった引き出しの側に寄って、パスを踏んずけた。
「パス。盗られてなかった」

　俺は、踏んだパスを拾い上げた。
「パスは、一番最初に盗まれるものなんだけどね。にしても、犯人はパスを見つけといて盗まずに逃げたってことか。パス以上に価値があるものなんて、この家になさそうだけど」
「俺からもハッキリ言いますが、無いですよ。マジで」
「犯人の目的はなにかしら。まあ、部下が到着次第検証に入るから。あんたも、無くなってるものがないかどうかチェックして。で、今日はホテルにでも泊まりなさいな」
　また、お泊まりか。狭くてボロい部屋でも、やっぱり自宅が落ち着くんだけどなあ。

美女と食べるラーメン定食

　柏木警部が到着してから30分もしないうちに、彼女の部下が到着した。全員ロボットなのだろうか。
「人間久しぶりに見たわ」
と言う声が聞こえた。
「悪気はないのよ」
　柏木警部が気を使うように、俺だけに聞こえる声でぼそっと呟いた。俺は、ご厚意を無視しないように小さく頷いた。
　少し不安で、手を繋いだまま立たせているウサ子を抱き上げた。
「ここの捜査はあんた達に任せるわ。私は、食べ損ねたランチ行ってくるから」
　部下達が、気持ち良い程揃った敬礼を見せた。
「じゃあ、行くわよ」
　柏木警部の顔が、当然のように俺に向けられたので、俺は頷きながら後を追うしかなかった。
「柏木警部も物好きだね。あんな人間に、何を執着する事があるんだか」
「人間だからでしょ。警部人間だったって噂、本当みたいだし」

　聞こえてるってーの。

　と、俺は毒づいてふと思う。

　人間だった？？？

＊＊＊＊＊

　柏木警部は、徒歩ですたすたと俺の前を歩く。
　相変わらず赤いハイヒールの癖に、歩調は早い。
　俺はウサ子を抱いているせいか、足が短いせいか。その歩調に合わせるに必死だった。柏木警部に話したら「は？　　両方でしょ」と言われそうなのだが。
　しかしながら、柏木警部の後ろ姿は美しい。歩く度に揺れる光を纏う艶やかなブロンドと、レザーの上からでもはっきりわかる肩胛骨に、丸みのある張ったお尻はなかなかにエロい。
　と、考えていたら、彼女がぴたりと歩みを止めた。思わずぶつかりそうになって、間抜けにも慌ててしまった。

「ああ、何食べたい？」
　かれこれ 10 分は歩いたように思うのだが、今更ですか。
「俺は、何でもいいですよ。嫌いなものとか、特にないし」
「そ」
　と彼女は答えると、またすたすた歩きだした。
　一応、気を使ってくれたのかな。

　で、到着したのはオシャンティーなカフェでも乙女モード全開なイタリアンでもなく、汚いオヤジが１人でやってる汚い中華料理屋だった。
　意外すぎる。こういう店、嫌いそうなのに意外に入るんだ.....。というか、こういう時でないと入れないので、寧ろオシャンティーなカフェとか乙女モード全開のイタリアンに入って欲しかった。
「よお、満嗣ちゃん。今日は、お連れさんも一緒かい？　　見慣れないけど、彼氏？」
「はあ？　　んな訳ないじゃん。バカなこと言うと、名誉毀損で逮捕するわよ。いつもの２つね」
「あいよ」
　オヤジは笑っていた。ってか、さりげに酷くない？　　名誉毀損って.....。
　俺は、気にしない振りをした。
「ここ、よく来るんですか？」
「まあね。殆ど毎回」
「毎回.....」
　そう、ロボットだから毎日食べる必要はないのだ。だから、食べたいときに食べるから毎回。
「もっと、おしゃれなお店に通っているんだと思ってました」
　柏木警部は笑った。
「残念だったわね。イメージ崩壊で」
　俺は、何も言わずに近くの水を人数分入れて配った。セルフなのだ。
「ここの、ラーメン定食すっごく美味しいの」
　そういえば、最初会った時もカツカレーとか食べてた気がする。案外庶民派なのかな。
　俺は思い切って、聞いてみることにした。
「柏木警部、さっき警部の部下？　　の方からの会話で聞こえたんですけど、昔人間だったって本当ですか？」
　柏木警部の顔が、少し曇ったように見えた。
「すみません.....失礼でしたね。忘れてください」
　女性に年齢を聞くくらいシビアな問題なのかもしれない。そう思って、すぐさま謝った。けれど、警部は答えてくれた。
「そうよ。純粋な人間だったわ。それも遠い昔話」
「そうですか」
　その先を、聞きたかった。聞けずにいたのだけれど、柏木警部は自分のブロンドの先を少しだけ弄びながらぽつんと呟いた。

「あんたも人間だもんね……。少しだけ、聞いてくれる？」
　俺は頷いた。
「別に隠す事でもないんだけどさ。偏見ってのもあるじゃない。差別とか。私は、人間っていいなって思うわ。ロボットになってつくづくそう思う。全てに限りがあって、必要性があって。ね。そのために頑張れる」
「そうですか」
　柏木警部は、俺にちらりと目をやった。
「私はね、事故で家族と身体を失ったの。両親も妹も弟も即死だったのだけれど、私だけが奇跡的に助かった。私だけというか、私の脳だけが。助け出された時、首から上しかなかったんですって。けれど、脳だけはまだ死にきっていなかった。それで、助かったのよ。ただ、そのせいか昔の記憶は殆どない。家族の顔も声も温もりも、思い出という思い出が消えてなくなった。唯一思い出せるのは、１人の男の子。ぼんやりだけど、その子がきっと何か知っていると思うのよね」
「その子、探しましょう！」
「は？」
　俺が思わず叫んで、柏木警部が呆れた声を出したところで、例のラーメン定食が運ばれてきた。
　シンプルな中華そばに小鉢とチャーハンと揚げ物が少し乗っていた。
「まあ、おバカなこと言ってないで、とりあえず食べなさいな。美味しいから」
　オヤジの奥さんだろうか。ふくよかな割烹着のおばさんが、ウサ子用のプラスチックの取り皿を持ってきてくれた。
　それに中華そばを入れると、ウサ子はテンションＭＡＸにきゃっきゃと笑いながらラーメンを手掴みで食べ始めた。
「私ね、最初はそう思ったよ。そう思って警察になった。それでいろんな人や事件に関わった。それで、忘れようとしているのかな。もしその男の子を見つけてもさ、その子がただの通りすがりで、何も私の事を知らなかったら寂しいじゃない。希望が見えなくなっちゃうわ」
「……」
　唯一記憶に残った、残るような人物が柏木警部の事を何も知らない。なんて事があるんだろうか。残るくらいの思いで深い人だったんじゃないのかな。
　そう思ったけれど、それは彼女も当たり前のことながら考えていたようなのだ。
「結局さ、打ち所……だったんだよね。きっと。印象深いから、とかそんなんじゃなかった。だって、私からしたら家族以上に印象深いものなんてなかったように思うのよね」
　そこまで聞いてふと思った。
「でも、自分の名前とか素性というか、基本的な事は覚えていたんですよね？」
　そこから、調べられそうなのだけれど。
　彼女は答えた。
「わからないわ。何もわからなかった。私の名前も、その後私を引き取ってくれた養母が付けてくれたもの。年齢と性別。それだけは残った私の欠片からわかったみたいなのだけれど」

　ウサ子がおかわりを欲しがったので、俺は取り皿に追加してやった。
「こうしてさ、純粋に必要な食事だって思って楽しんでると人間に戻れたような錯覚があって。なんかこう、ずっと前から私は私で、いつかそれが現実になるような気がするの。もう、今の私は人間になりたいわけでも、思い出を取り戻したい訳でもないんだ。養母や養父から沢山の幸せや温もりは貰ったから、ただ今は家族だった人達を忘れたくないだけ」
　衝動的であれ、探そう！　等と、無責任な発言をしとさえ思った。
「すみません」
　考えるより先に謝っていた。それを見て、ウサ子が心配そうに首を傾げながら俺を見た。
「あんたって、本当にお人好しよね。ウサ子ちゃんの事にしろ、私の事にしろ」
「ひ、暇なんで」
　柏木警部は笑った。
「でも、ありがと。嬉しかったわ。あんたの両親は、きっと良い人達だったのね」
　確かに、お人好しなのは両親譲りなのかもしれない。
「人間もロボットも関係ないですよ。出来ることはずっとロボットの方が多いし、不自由な事を考えれば人間の方が不利です。人間もロボットも同じように心はあるし、そう考えていったら人間って辛いことばかりな気がします。でも、俺の両親は言ってました。食べること、寝ること、そのセックスする事の楽しさは人間の特権だって。俺も両親もロボットになったこと無いけど、きっとそうだっていってました。だから、俺は人間で良かったって思うようにしてます。どんなに惨めだって思っても」

お前は、奥さんか

「所詮、人が作ったものよ。ロボットなんて。皆、もう忘れちゃってるけどね」
　柏木警部の言葉は、ずしりとしていた。俺自身の持つ劣等感とか、そういうものをかき消すように.....なんというか、もっと威張ってもいいんだよ、と言われているような気さえした。
　人間から望まぬロボットになった者にしかわからないんだろう。人間に産まれながら、わざわざロボットになる者もいると聞く。けれど、少なくとも柏木警部は人間が好きだったように感じた。
　食事を終えると、柏木警部が訪ねてきた。美人なのに、最初に感じた取っつきにくさは既になくなっていた。
「今夜、というか暫く泊まる場所のアテはあるの？」
「友人に泊めて貰おうかとも思ったんですけど、子供連れですからね。迷惑になるといけないのでホテルを考えていますけど、人間だってことで嫌がる店もあるみたいだし.....俺外泊とかしたことないんでよくわかんないんですけど。なんで、これから色々あたってみようかなってところです」
　ロボットに比べて繊細な人間の身体は、何かと面倒だとかで嫌がられる。宿泊中の事故とか病気とかその他もろもろ責任を負うのが嫌だとかなんとか。中には人間に対する差別的な考えを持ったロボットもいるので、そういったもめ事の原因でも嫌がられる。だから、飲食店や小売店ならまだしも、娯楽や宿泊施設の利用には注意が必要だ。と、親から聞いた。自分では殆ど利用したことがないので、本当か嘘かは知らないけれど。
　すると、柏木警部が携帯電話を取り出した。
「だと思ったのよ。私の知ってる人で、人間を受け入れてくれるホテルがあるからそこの予約入れてあげるわ。私もね、この仕事長いから色んなツテってやつはそれなりにあるのよ」
　俺は、その場から立ち上がると深々と頭を下げた。
「ありがとうございます！」
「２、３日もすれば戻れると思うから。戻ったら掃除が大変だわね。それまでゆっくりしたらいいわ」
　柏木警部は笑っていたけど、今の今まで忘れていたあの大惨事を思い出すと正直ぞっとした。
「さて、私もそろそろ行かなきゃだし。ホテルまで送るわ」
「あ、もう大丈夫なんでしょうか？」
「うん。大丈夫」

俺の気付かないうちに電話は終わっていたようだ。そりゃそうか、ロボットなんだから。そう考えると、寂しくなった。少なからず、俺はこの柏木警部に憧れているんだろうな。

しかし、柏木警部の記憶に残る男の子ってどんな人なんだろう。警部の話からして、事故自体随分昔の事のようだし、その男の子も今ではさぞ立派な青年になっているんだろうな。

俺のアパートまで一旦戻ると、柏木警部は部下に署の車で俺をホテルまで送るように指示した。警部は、仕事に行かねばならないらしい。寂しいが、やり手の警部なので暇なはずもなく、忙しい中わざわざこんな俺に付き合ってくれたことを感謝するしかない。

俺のアパートから 30 分程車を走らせたビジネス街の路地裏に、そのホテルはあった。小さいが汚くはなく、それなりの普通のビジネスホテルのようだ。見渡したところ、コンビニもあったので不自由はなさそうだ。

受付に入ると、話は聞いていますと女性スタッフが部屋まで案内してくれた。

部屋は狭からず広からず、セミダブルのベッドが一つとユニットバス。柏木警部が配慮してくれたようだ。

「では、ごゆっくり」

「あ、何日ほど利用出来ますか？」

女性はやんわりと笑って答えた。

「３日ほどと聞いていますが、必要であれば何日でも。帰りにパスをご提示ください。無料でご宿泊いただけますので」

「ありがとうございます」

そんな待遇があったとは、初めて知った。

これは後々知った事なのだが、子連れの人間は無料らしいが、子連れじゃなかったら半額らしい。

「ウサ子、疲れたろ。休もうか。眠くない？」

少し元気がなさそうだったから、心配だった。病院でもゆっくり出来たとは思えないし、家に帰ったと思ったらあんなんだったし、なんだかんだでいっぱい移動して疲れない訳がない。俺だって疲れた。

ウサ子は俺の服を掴んで抱っこをせがむと、暫くしたらすやすや眠ってしまった。小さいながら、色々我慢してたんだろう。

俺はウサ子をベッドに寝かした。

丁度そのタイミングで、圭介からの電話があった。

『霞ちゃん、今日退院じゃなかったっけ？　　ごめんね、お迎えに行けなかったよ〜』

こいつは奥さんかね。

「いいよ、デートだろ」

『違うよ。真面目に仕事してんだよ。最近急に忙しくなっちゃってさ、デートも全然してないし.....まじストレス溜まるわ』

「ロボットでもストレス溜まるの？」

素朴な疑問である。

『溜まるよ。ロボットだって繊細なんだ。ってか、オレあいのこだし』

「わかったよ。てか、用事なに？」
　受話器の向こうで、圭介が膨れたようだった。
『オレ、超心配したのにさ。なんか冷たくない？　久しぶりに飲もうかと思って。あ、あの子どうなった？』
　そういえば、圭介に話してなかったっけ。あいつに随分心配されて、少なからず世話された覚えもある。
「そうだなあ、ちゃんとお礼言わなきゃな。ありがとう」
『いえいえ』
「で、言ってなかったっけ？　俺子持ちになったって」
『.....は？』
　少しの間を置いてからの絶妙な疑問符が響く。
『いやいやいやいや。誰と？　聞いてないし。結婚したってこと？』
「うんにゃ。里子に貰ったんだよ。新米シンパパ。よろしくね」
　受話器の向こうで、圭介が絶叫していた。
『と、と、と、とりあえず、行っていい？　まじ、話聞きたいし』
「いいよ、今度で。仕事忙しいんだろ」
『いやいやいやいや。それどころじゃないっしょ。マジ行くわ。今夜』
「でもさ、俺今家にいないし。今朝帰ったら家ん中荒らされてて.....で、警察の捜査入ってて、数日間ホテル暮らし」
『はあああああ？　まあいいや、何処のホテル？』
　とりあえず、俺は圭介に今宿泊中のホテルの名前と住所と連絡先を伝えた。
　心配してくれるのはありがたいが、何故にあいつがあれほどまでに焦るのだろう。謎である。
　そしてふと思ったのだけど、これは俺の両親にも報告すべきだろう。いきなり孫が出来た、なんて伝えたらどうなるだろ。嫁もいないのに。
　電話を切って、ウサ子を見た。幸せそうな顔で、すやすやと眠っている。癒される。

＊＊＊＊＊

「柏木警部、ちょっと気になる情報が入りまして」
　部下の川田が真剣な声で、柏木警部の元に寄った。
「例の幼女の件なんですけど。いやね、確実に関係するかといったら確信はないんですけど」
　デスクワークを一旦止め、柏木警部は立ち上がると川田を端のミーティングルームへ来るように促した。通りざま、最上にコーヒーを２つ頼んだ。
「で、なに？」
「はい、今回の事件から約５年前になります。当時、テレビで騒がれていた篠山という大学生、覚えていますか？　天才頭脳を持つ人間って」
「なんとなくだけど」
「ある日を境に、あれだけメディアから騒がれていたのに突然姿を消した」

　川田は、テーブルに自ら作成したであろう報告書の束を置いた。
「珍しいわね、あんたがこんなの真面目に作るって」
「それだけ、情報が複雑だったんですよ。もっと誉めてください」
「調子に乗んな。で、続けて」
　柏木は報告書をめくり、眺めながら川田の話を聞き始めた。誉めたものの、そこに書かれていたのは箇条書きで報告書と呼べるほどの完成度はなかった。が、わかりやすく、柏木に伝えるには十分の書類であった。川田なりに、柏木を理解してのものであった。

ちょっとミステリーっぽくなってきた

篠山誠太（ ささやませいた ）。性別、男性。推定年齢 26 歳。世界でもトップレベルの大学を飛び級で進級、コンピューターを越えた頭脳を持つと言われた超天才である。大学院卒業後は、ロボットの更なる研究へと進み、世界が彼に投資までした。メディアで最後に彼を観たのは、今後彼が力を入れるという研究発表の会見だった。

篠山が目指したのは、ロボットの完全な人間としての進化。自らの体内で卵子と精子を作り出し、子を作り出すこと。そして、進化するナノロボット細胞。ロボットも生命を作り出し、進化し、成長する。その研究が完成されれば、人間とロボットの違いなどほぼ皆無と化してしまう。

篠山が目指したものは、差別のない世界だった。

そして、一年程前に篠山は姿を消した。久しぶりにメディアに登場した彼は、意外な形であった。世界を揺るがした人間が対象となれば、意外と言うほどではないのかもしれないが。

「行方不明、だったっけ」

記憶に古くはない。柏木が直接関わった事件ではなかったが、気にはなっていた。

「そうです。あの時空移動装置でふと思ったんですよね。もし、あの装置を開発出来る人間がいたとしたら、篠山が堅いんじゃないかと」

いい線いってるじゃないの、と柏木は思った。ふと上がった口角を、川田は見落とさなかった。

「見直しました？　俺だってやるときはやるんですよ」

「調子に乗るな。いい線行ってると思うけど、世界に天才は篠山だけじゃないでしょ。たまたま篠山がメディアで有名になったってだけで、隠れてる天才だってごろごろいるはずよ。例えば、日陰になった天才とか.....。自分だって支援してもらえるほどの天才だ。けど、注目してもらえない。だから、事件を起こした。とかね」

「へー」

川田は、感心したような声をもらした。

「けど、そんな日陰の存在をゼロから探すのは不可能に近いわ。だから、篠山から追うのもありよね」

川田の顔が明るくなった。「でしょ、でしょ！」

わんこのような奴だな、と柏木は顔を歪めた。

「で、篠山の失踪に関する情報を教えなさい」

川田は待ってましたと言わんばかりに、手元の資料のページを数枚めくった。

「ここに、大凡記載してあります。説明しますね」

　要約すると、こうだ。
　篠山は普段から、他の研究員と関わらずに一人ラボで研究する事が多かったという。研究内容は誰にも話さず、見せなかった。途中経過をメディアで発表するのが、全てだったという。そして、それが研究の条件だったそうだ。それだけ、世界は篠山に期待していた。
　研究発表の当日だった。篠山が研究内容と共に、忽然と姿を消した。世界が騒然とした。
　警察が血眼になって探したが、事件の痕跡すら掴めず全ては迷宮入り。誘拐を疑われた。偉大な人物だったことで、今でも捜査本部は動いてはいるものの、なんの手がかりすら掴めてはいないのである。
「捜査本部に働きかけてみたんですけど、その調査内容は教えてもらえませんでしたね。ただ、なにも進展がなくわからないってことだけは教えてもらいえましたけど」
「そう。じゃあ、私達は私達の方向でこの事件を追いましょう。但し、篠山失踪事件としてではなく本来の目的としてね。篠山の通っていた大学から大学院、勤めていた研究所で彼の同期となる人物からあらって行きましょうか。直接関わりのない人物かもしれないし、もし劣等感を持つ人物だとしたら天才の中でも凡人と言われる人物かもしれない」
「気が遠くなりますね」
「そうね、それでも見つからないかもしれないしね。範囲が広すぎるから、もう少し絞りましょう。先ずは、純粋に人間である人物から調査しましょう。それならたいして多くもないはずだし、そこからなにかしら情報が得られるかもしれないわ」
「承知ですっ」
　川田は気持ちのよい返事をした。
「私も出来る限りの協力はするから、なんでもバンバン言いなさいよ。期待してるわ」
　川田は、少しだけ違和感を感じたが、それは柏木がいくつも事件を抱えているせいで忙しいからだと納得した。
「ありがとうございます」
　いつの間にか最上が淹れてくれたコーヒーを飲み干すと、川田は立ち上がった。
「柏木警部も無理しないでくださいね。ロボットって言っても、たまにはクールダウンしないとオーバーヒートしちゃいますよ」
「……そういえば、そうね」
「ま、人間ほど繊細でもないし、修復すればいいんですけどね。ただ、メモリ飛んだら終わりっすから」
　柏木なのだから、わかっているだろうと思いつつ、川田が口にしたのは元人間だという噂を知っていたから。彼にしたらおさらいのつもりだった。
　柏木は誰を思って言ったのだろうか。もしくは、自分自身に向けたのだろうか。何かとてつもなく寂しそうな顔に見える、と彼は感じた。少しだけ心配だった。厳しくもいつも元気な柏木だけに。
「そうね、そうなんだよね。ロボットと人間の違いってさ」
「じゃあ、ちゃんと休んでくださいよ」
　川田は後ろ髪引かれる思いながら、その場を後にした。

「川田さん、柏木先輩なんか元気なくないですか？」
　最上が川田の腕を掴んで、小声で問うた。
「うん。なんかねぇ、警部っぽくないよね」
「カモノハシが、なんか関係してるんですかね。だって、珍しく度々会ってるみたいですし。あ、恋いしちゃったとか。先輩趣味悪いー」
　川田が呆れて最上の腕を振り払った。
「バカ言ってんじゃありません。そんな感じじゃないよ。なんか行き詰まってるっていうか.....柏木警部が警部として関わってから、難航する事件なんてなかったじゃん。だから、本人もどうしていいかわかんないんじゃないの」
　最上が、腑に落ちないといった顔で柏木のいる方へと目配せした。
「そうなのかなあ、つまんないな」
「面白がる話じゃないよ。てか、自分で聞いてみれば？　女同士なんだしさ。あと、ちょっと休ませた方がいいと思うよ。今後の捜査の為にも。あと、頼むわ」
「え？　マジで」
「じゃ」
　最上はフグのように頬を膨らませた。休ませるのは彼女も大賛成である。賛成ではあるが、休めと言って休むような柏木ではない。が、最上からしても放っておくわけにもいかないので、とりあえず説得まではいかないにしろ休暇を進めてみることにした。一日くらいなら休むかもしれないな、と。
　柏木に近づくと、相変わらず彼女は真剣に資料を眺めて仕事モード。
「柏木先輩」
　あ、と柏木の顔が上がったので、すかざず真向かいに座った。
「先輩、疲れてますよ」
「ロボットなんだから顔色なんてわかんないでしょ」
「でも、電流でわかりますよ。熱の上がり方とか。10％電流が弱くなってるのに、温度が５度高い」
「そう？」
「自分でも気付かないとか、重症ですよ」
　重症、の言葉に柏木は思わず笑った。
「もう、真剣に。明日くらい休んだらどうです？　今後の捜査にも関わりますよ。で、一日考えた方がいいと思うんですよ。なんなら２、３日休んだ方がいいとは私は思いますけど」
　柏木は、資料から目を離した。
「最上ちゃんからそんなこと言われたら、私も重症だと思うわ。明日くらい休もうかな」
「そーですよ！」
　案外素直に応じてくれたことに、若干戸惑いながらも最上は甲高い声を上げた。きっと本当に疲れているんだと、最上は納得した。
「んじゃ、後のことは私のお任せくださいー。誰からの連絡も、私が全力を掛けて繋ぎませんので！」
　そこまでしなくても.....と、柏木は苦笑いを浮かべた。

「んじゃ、お願いするわね」
「はい、ごゆっくりお休みください」
「今日は仕事するわよ」
「はい」
　そして、ふと思いついたよいうに最上に言付けた。
「カモノハシからの連絡だけは繋いで頂戴ね」

ロボットじゃないかもしれん

　その日の夜、圭介がホテルを訪ねてきた。彼にしては少し遅めだったので、本当に忙しかったんだろうと思う。

　丁度夕飯を食べ終わって、ホテルに帰宅したところだった。

　ホテルの近くに小さなファミレスがあったのは、ありがたかった。子供向けのプレートもあったし、人間向けの料理もあった。料理の種類で何となくわかるのだけど、この辺りは人間が割と多い方なのかもしれない。自分以外の人間はあんまり見たことがないし、いたとしても気付いてないだけかもしれないけど、近くにいるんだろうなと思うだけでちょっとだけ嬉しく思う。

「霞ちゃん、ごめんね。急ぎすぎて手ぶらで来ちゃったよ」

「気にすんなよ。入院中世話になってたしさ」

「もう、積もる話多すぎなんだけどさ。マジで」

「色々ありすぎて、通り越して、なんかもう落ち着き始めたと思ったらまた事件に逢って。もう俺からは話すことがないわ」

　圭介が俺の方を鷲掴んで、前後に揺すった。

「めんどくさいだけだよね？　てか、みほとけみたいな顔すんのやめてくれる？　本当にあの世にいってそうだから」

　圭介の目は笑ってなかった。珍しく。

「圭介ってさ、お母さんみたいだよね」

「もう、お母さんでいいよ」

「なんで、そんなに俺に親身なの？　友達だってのはわかるけど」

「だって霞ちゃん儚いし。オレ、霞ちゃんといるの居心地いいんだよね」

「そっか」

「というわけで」

　圭介は、鞄からビール缶を２つ取り出した。

「完全な手ぶらって訳でもないんだけどさ、さっきコンビニで買ってきたのよ。ウサ子ちゃんは、もういいでしょ。あと飲み過ぎはまずいでしょうから、これで終わり」

　俺は、圭介の差し出すビール缶を１つ受け取った。まだキンキンに冷えている。

　食事の帰り、ウサ子にジュースを買ってきていた。

　圭介をホテル部屋の鏡面台の椅子に座らせると、俺とウサ子はベッドに腰掛けた。昼間ベビー用品売場で買ってきた子供用のコップにリンゴジュースを入れるとウサ子に渡した。

　最初は大人しく座っていたウサ子だったが、座っている体勢が安定しないのか、俺の膝の上によじ登った。

　ウサ子が落ち着いたところを見て、口火を切ったのは圭介の方だった。

「もうすっかりパパじゃないの。病院の時は面会時間も短かったし、霞ちゃんげっそりしちゃっててさ。オレも詳しく話が聞けなかった訳だけど、どういう事なのか説明してよ。最初からね」

　俺は、圭介にこれまでの経緯を説明した。

　強盗犯人に間違えられたこと、証明するために記憶を見られたこと、その副作用で入院していたこと。その後で、ウサ子のことも話した。何故パパになったのか。圭介は、冷静に呆れていた。

「あんねぇ、どんだけお人好しなわけ？　　子連れってだけで、彼女だって今まで以上にできなくなるよ」

「もう、そんなこといいよ。どうせ出来るかどうかもわかんないしさ」

　説明後の圭介の指摘がそれだったので、それかよ！　　と思わず突っ込んでからのこの返しであるのはご理解頂きたい。

「まあ、それはさておき。まあ、霞ちゃんは主夫やれる立場でもあるわけだし、シンパパも出来ないことはないわけだ。でも、子供にはママが必要でしょ。ママはどうするの？」

「聞くなよ」

「そんなことだと思った。考えてないでしょ」

「考えたよ。でも、ママはしょうがないじゃん」

　モテないし、彼女いないし。

　圭介の態度に、俺は納得出来なかった。ので、ドストレートに聞いてみる事にした。

「お前さ。ごちゃごちゃうるさいけど、何か隠してるだろ？」

　少しの間を置いて、圭介が言いにくそうに答えた。

「霞ちゃんは、その子のこと何処まで知ってるの？　　これから、この子に対してどうしろって言われてる？」

「は？」

「例えば、毎日病院に来いとか、病院の人間が訪問にくるとかさ」

「何が言いたいんだ？」

「その子、ロボットなんだよね？」

「そうだって聞いてるけど」

「オレも初めてなんだけど……半分ロボットじゃないんじゃない？」

「は？」

「だから、半分人間なんじゃないのかってこと」

　と、そこまで言って、圭介は違うなーとぶつぶつ言っていた。俺には彼が何を言いたいのかさっぱりわからない。

「正直、圭介の言いたい事がさっぱりわからないんだけど」

「オレもそう思うよ。自分の事ながらね」

「順をおって説明してくれる？」

　圭介は、缶ビールをぐいっと飲んだ。

「オレが身体をスキャン出来るってのはいつも話してるよね。細胞の動きから、内蔵の動きから。ロボットなら、電流とか温度とかそういうのになるけど、オレだけじゃないよ。ロボットなら誰でも出来る、機能ってやつだ。霞ちゃんも知ってると思うけど、人間は当たり前だけど細胞が働いて成長する。傷も病気も自然に治癒するでしょ。逆にロボットはまだそこまでの進化はない訳よ。それなのに、その子の細胞は動いてる」

　俺にはよくからなかった。

「ウサ子細胞が動くって言うのがよくわからんのだけど、ウサ子も人間同様成長して治癒するってこと？」

　圭介は、濁した。

「さあ。細胞のように体中のそれは活発に動いてる。霞ちゃん以上に活発にね。だけど、それが成長や治癒とつながるかどうかまでわからないよ。だから、聞いたの。病院から何か言われてないかって」

「……定期的に必ず診断に来るようには言われてるけど」

「そうでしょ。きっとその子が成長するかどうか視るんだよ。だって、ロボットに定期診断なんて必要ないもの。親は子を視れるし、様子が悪ければ病院に行く。ある程度時期がこれば役所からの通達があって、ボディを換えに行く」

「ちょっと待てよ。俺は人間だから、ウサ子を視ることなんて出来ないだろ。だから、定期診断が必要だってことじゃないか」

「なるほどね、でもそれでも必要ないよ。そのための装置が存在するのは知ってる？」

「は？」

　圭介が呆れた声を出した。

「だって、興味なかったし……」

　俺が罰が悪そうに言うと、圭介は空中に映像を表示させた。映像は圭介の脳内コンピューターから拾い出され、目からプロジェクター状態で映し出される。つくづく、便利だな。

「3000 円もあれば買えるんだし、霞ちゃんも買ったらどう？」

　それは一般的な眼鏡と同様だった。圭介曰く、コンタクトレンズ型のものもあるらしい。ロボットにはあって人間にない機能を補う道具は、これに限らず意外と多いらしい。人間の間だけでなく一般常識として当たり前らしいんだが、知らなかった。

「か、買ってみよかな」

「病院でこれ勧められなかったんだ。持ってるかどうかも、聞かれなかったんだ？」

「うん」

　やっぱりな、と圭介が呟いた。

「ウサ子ちゃんさ、霞ちゃんが親だって刷り込みプログラムされてなかったら、霞ちゃんがパパになるって決意しなかったら、きっと研究材料になってたんだろうね。もしそうじゃないなら、霞ちゃんにこの眼鏡勧めて、調子悪いときに来てください。ボディ換えが必要になったら通達するんできてください。それでいいと思わない？　それに、担当のナースとカウンセラーが退院後もケアするって言ったんだよね。普通退院したら、元担当にはなるかもしれないけどいらなくない？　だって、必ずその病院に通わなきゃいけない義務もなければ霞ちゃんが通う保証もないじゃん」

　まあ、言われてみればそうなんだが。妙に疑う圭介を前に、俺は何も言えなくなった。ところで.....

「圭介は、何を疑ってる？」

　圭介は真顔で言った。

「霞ちゃん、強盗事件に完全に巻き込まれてるよね。被害者の１人として、この先解決するまで、この事件から解放されないよね。だから柏木警部が、霞ちゃんの側にいてくれるんじゃないの。柏木警部は霞ちゃんに同情したんじゃなくて、仕事だよ。その心拍数、気を付けた方がいいと思うよ。色々とね」

恋って美味しいの？

　心拍数。

「恋って言いたいわけ？」

　俺は笑いながら言った。

「わかってるじゃん」

　図星だった。

「って、んなわけあるかよ！　　高嶺の花もいいとこだろ。そりゃ憧れはあるけどさ、それだけだし」

「なら、いいけど。傷つくの霞ちゃんだよ。オレも辛いからさ」

　圭介は何故か、どやっと笑った。何故ドヤ顔？

「で、ホテル暮らしになった理由だけど、その様子だと連絡はないんだね」

「そう、空き巣か強盗かなにかも.....っていうか空き巣だろうけど。盗むもんなくて逃げたんだろ」

「パス盗むでしょ」

「そんなに価値あるのかな」

　という俺の疑問に、圭介はビールを吹き出した。

「そのパスの為に、日々どんだけ犯罪が起きてると思ってんのさ。全く」

「そうなの？」

「もういいわ。本当、自分の価値わかった方がいいよ。マジで」

　俺は首を傾げることしか出来なかった。

「なんか、ごめん」

「ドンマイ」

　圭介と暫く久しぶりの世間話をしていた。ウサ子はその途中で眠ってしまい、日が変わって暫くしてから圭介も帰っていった。

　怒られただけでなく、余計なお世話も多い奴だけど、肉親でもないのに心配してくれるのはありがたい。そして、ウサ子がいても事件に巻き込まれていても、根本的には変わらない日常に少しだけほっとした。

　翌朝になり、ホテルでウサ子と過ごしていた。昼前になって、警察から連絡があった。

　犯人の手掛かりはなく、近くの監視カメラには犯人らしき人物は映っていなかったという。一度、アパートに来てくれとの事で、昼過ぎに帰った。

　警察の捜査のお陰で、荒らされてヒドい有様だった部屋は更にヒドいことになっていた。散乱する割れた食器の破片や割れた瓶のせいで、捜査員達が土足で踏み荒らしていたのには正直むっとした。が、柏木警部の部下であろう刑事から掃除業者が入ってくれる事を教えて貰った。完全無料ではないらしいが、格安だったのでウサ子もいることだしとお願いした。その兼ね合いもあり、ホテル暮らしが少々延びることになった。俺が事件前と同様独り身だったら、自分で掃除しただろう。三日は掛かったかな。

　部屋の私物チェックをするように言われたが、貯金箱から通帳から印鑑まで、何一つ盗まれずにそのままだった。

「何も盗まれてないですね」

「捜査して思ったんですが、何か探しているような荒らし方だったんですが、何か思い当たる物はありませんか？　　殺人でも起きていれば、それでも納得出来る部分はあるんですが、それはないですし」

「ええ、誰か死んでたらそれこそたまりませんよ。ちなみに思い当たる物は、ないですね。自分が思う価値がありそうなものは、全部残されてましたし」

「そうですか。もしかしたら、人違いでこの部屋に入ったのかもしれませんね」

「あ、俺もそう思います。人違いですよ、きっと」

刑事さんは、人違いの空き巣扱いとして報告していたようだった。

業者の掃除が完了したら、連絡してくれるとのこと。せっかくなので、あと少しの間ホテルでの旅行気分を味わおうと思う。

タクシーでホテルに到着すると、部屋に戻らず、ウサ子と少し散歩した。

昨日は行かなかったホテルの裏側を歩いてみることにした。

意外な事にアパートが幾つも並んでいた。ファミレスでの人間向けメニューの豊富さを考えれば、このアパートに人間が何人も住んでいるのかもしれない。

俺が育った家を思い出した。俺の他にも、周辺には人間が住んでいた。人間向けの施設も多かったので、特に不自由のない生活環境ではあった。人間が多ければ人間向け施設が多くなるので、自然とそこに住む人間も多くなるわけで、人間の密集地が出来る訳だ。

けれど、その中で住んでいるロボットもいるわけだから、全員が人間とは言い切れない。なぜなら、人間と恋に落ちるロボットだっているし、圭介みたいに友達になるロボットだっている。職場が近いという理由だってあるだろうし、理由は様々だ。

で、その住宅街を抜けた先に、俺の目的の場所が見つかった。

小さな公園だ。

小さいながらも、ブランコと砂場と滑り台とジャングルジムが設置されている。

そこには、昼間でありながら誰の姿もなかった。近くに植えられた人工の木が日陰を作り、その間から光がゆらゆら揺れている。

「ウサ子、公園で遊ぼうか」

ウサ子は満面の笑みを俺に向けて、公園に着くと俺の手を離してブランコに駆け寄った。

公園に来たのは初めてなのだろう。ブランコに駆け寄ったものの、どう遊ぶのか分からないようで、椅子の部分に手をかけてそれを揺らしていた。

「ウサ子、そこに座って揺れて遊ぶんだよ」

こくりと頷いた幼女はブランコによじ登ろうとするが、ゆらゆら揺れるブランコは不

安定で危うい。

　俺は慌てて駆け寄り、転がる前にウサ子を抱き上げた。

　ウサ子をブランコに座らせ、両サイドの椅子を釣っている鎖をしっかり握らせた。

「ウサ子、絶対に離すなよ」

「あい」

　ウサ子は小さく返事をすると、鎖をぎゅっと握った。

　俺はゆっくりウサ子の背中を押した。ウサ子が驚いて手を離しても捕まえられるように、ゆっくりと少しだけ。

　案の定、ウサ子の髪飾りがふんわり揺れながら彼女のバランスが崩れる。が、直ぐにバランスを立て直した。

「ひゃあ」

　気の抜ける声がした。

「ひゃあ」

「ウサ子、怖い？」

「ひゃああ」

　気の抜ける声に思えたが、どうやら驚きながら笑っていたようで俺は思わず笑ってしまった。

　ウサ子が慣れたところで、ブランコの揺れを大きくした。

　ブランコが揺れる度「ひゃあ」と声がする。ウサ子、笑い方変だよ。可愛いけど。

　ウサ子はブランコが気に入ったようで、俺が止めると怒る。仕方ないので俺は続けた。

　夕方、日がオレンジ色に染まる頃。俺の説得に渋々ウサ子は納得したのか、なんとかブランコを下りてくれた。その分、俺はヘロヘロで汗くさい。そんな俺の体力は露知らず、ウサ子は俺に抱っこをねだるとすやすや寝てしまった。

公園自体、ホテルの裏の住宅街の少し奥だったからそんなに離れていない筈なのだけれど、疲れきった身体でウサ子を抱いて帰るのは結構しんどかったのは言うまでもなく。

部屋に着くとウサ子をベッドに寝かせると同時に、俺もベッドの大の字になって転がった。

「も、もうだめ.....」

情けない声がもれた。知らず知らずに息だって切れている。子供と遊ぶのも、なかなか大変である。

ぼんやり天井を見上げながら今日の出来事を思い出していたのだが、今日は柏木警部に会えなかったな、とがっかりした気持ちになっただけであった。報告と私物チェックくらいだけだったから居る必要もなかったのだろうけど、俺的に寂しかったなあと思うわけで。あの時、刑事さんに聞こうと思ったのだけど、特別彼女に用事があったわけでもなかったので、聞くに聞けなかった。ふと、昨晩圭介に言われた心拍数の話を思い出して、急にこっ恥ずかしくなってしまった。

あの時は衝動的に否定していたが、後から考えれば好きな人を当てられたという恥ずかしい状況この上なかった訳で。そう思うと、とんでもない人物に片思いしてるんだなと落ち込んだ。叶うはずないのにな。

この事件が解決したら、柏木警部と会うこともなくなるんだろう。そう思うと、事件なんて解決しなくてもいいんじゃないかと思う。

ふと身体を起こし、腹が減っているのに気付いた。ウサ子は眠っているし、かといって１人で残して食事に行くわけにもいかないし。

俺は出前を取ることにした。なんとなく、悩んだ挙げ句にカツカレーを注文していた。

天才

天才と言われた存在ではあったが、その才は天からの授かり物だけではなかった。

執念と嫉妬と恨みと.....きらきら光るような前向きな思いとは逆に、どす黒く渦巻く後ろ向きな感情がの方が強かったのだ。

両親は、恵まれない環境でありながらも、いつも人のために、良い行いをと言い聞かせていた。

それが逆に彼の怒りの炎に油を注いでいたのだ。

ぼっと大きく燃え上がるものではない。炭火のような炎は、小さく熱くしぶとく燃える。

血反吐を吐くような努力の末、手に入れた天才の称号と彼に期待された多くのお金は、彼を満足させる目的には使わせてはもらえなかった。

彼が求めたのは、ロボットを終わらせ人間を取り戻す世界である。

しかし、世界が求めるのは人間を終わらしロボットを迎え入れる世界だった。

世界はロボットに支配されていた。

篠山誠太。彼は人間の両親の元に産まれた。開発された人間街で育った桜木霞とは違い、篠山が産まれた場所は遙か昔から人間の住む場所だった。

ロボットの侵略が進み、開発が進み、彼の住む場所も強制立ち退きを求められた。

そこにある家は先祖代々受け継がれた物が殆どだったから、墓も存在していた。太古から、人が人である限り大切にしてきたことである。

しかし、ロボット達にそのような儀式は不要である。よって、古くさいと切り捨てられた。

住民達の決死の反対も押し切られ、土地は没収され建物も墓も全てが破壊された。破壊され、コンクリートで固められていった。

代わりに与えられた高級マンション。ロボットは、それで満足以上の感情を与えられると思っていた。人の心はもっと繊細だ。

少年だった篠山は、ロボットが支配する世界ではやがてこの世界が終わりを告げると強く思った。

両親を守る、同じ種族を守る、自分を守る。自分以外、やれるものなどいないと感じた。

並々ならぬ努力の末、学費免除という待遇まで手に入れ、そこでロボットの研究を始めた。

正しくは、ロボットを消滅させる研究である。それも、一度に。

そのため、空間移動装置をも極秘に開発した。誰にも邪魔させない、人間が一番素晴らしいのだと見せつけるため、今回の事件を考えた。

ただし、これらは全て余興である。

本当の計画は、これからだ。

ロボットをより人間らしくする細胞のようなナノマシーン、というのは表向きである。細胞のように進化をし、ロボットに流れる電流に反応して時限爆弾のごとくに爆発する。

寝る間も惜しんで研究した結果、ナノマシーンは 80 %完成した。

用意された研究発表で、それを発表するには躊躇われた。世界が注目してきた研究である。あと少しを急かすため、他の手が研究に加わると厄介なのである。かといって、それを拒否する権限は篠山にはなかった。

だから、失踪を計画した。篠山誠太は、研究発表を前にして、研究内容と共に誘拐されたという筋書きだ。

研究に必要な金は十分に用意した。空間移動装置も完成している。あと少し、あと少しで、自分の夢は完成する。

そして篠山は失踪し、人知れず残りの研究を続けた。

残りの研究を完成させるまでに、それほど時間は要しなかった。ただ、それをどう隠すか.....。

考えた挙げ句、篠山はナノマシーンで幼女を作った。ナノマシーンを守るためのプログラムや安全装置、護身の為の機能まで備え付けた。

そして、計画は実行される。

思った以上に、空間移動装置は活躍してくれた。世に出ていない、篠山オリジナルの最新機器のため、警察はおろか誰にも篠山を追うことは不可能だった。

目的は強盗ではないから、警察を翻弄し、逃げ回るだけ回り、挙げ句完璧な逃走を見せつけマスコミを騒がせてやった。

そして、幼女型ナノマシーンの集合体は一旦迷子として適当なマンションに残してきた。最初に出会った人型を、親と思い込むように。同時に、そのロボットを実験台にするつもりだった。

幼女と生活を共にする課程で、ナノマシーンを摂取させる。それは、幼女と別の人格として組み込んだプログラムが実行してくれる。

親と認識されたロボットは、幼女に組み込んだ超音波で幼女を我が子として溺愛する筋書きとなる。

そして、ナノマシーンは親となったロボットの体内で増殖を続け、電流の熱をため込み、一年後には跡形もなく爆発する。それが合図となり、幼女のプログラムはリセットされる。

この実験が成功すれば、篠山はナノマシーンを医療とし、ロボットの発展として普及させるつもりであった。研究の為に失踪していた。研究を狙う悪者が、自分の命を狙っていたから。筋書きなんて適当で構わない。そして、人間のようなロボットの子供を、普及させること。

一年の期限を作ったのも、ロボットを全滅させるため必要だと感じたから。

そして、幼女型ロボットの様子を遠隔で監視して気になったことがあった。

幼女が渡った先は、人間じゃないのか、と。それを確認するため、部屋中を物色し、見

つけた人間パスを床に叩き付けた。

　失敗だ、と怒りが溢れた。まさか、数少ない人間の手に渡るとは思っていなかったから仕方ない。爪の甘い自分を恥じた。人間には何の害もなく、意味もない。

　仕方なく、一旦幼女ナノマシーンを回収しようと思ってあることに気付く。人間の男の側に現れる女型ロボットの存在と人間の男の心拍数。間違いなく男に好意はあるし、女型ロボットを利用する価値はあると。ターゲットは女型ロボット、柏木満嗣に変更された。

　自分が関与すれば、二人をくっつけることなどたやすい。そして、もしかしたらこの人間の男、柏木霞も自分に協力するのではないかと考えた。同じ人間として、ロボットに対して何の負の感情も抱かない筈がないと。

　篠山は、桜木に接触する事を決めた。

　どう接触しようか。幼女との関係性は.....。。

＊＊＊＊＊

　捜査も掃除も終わり、無事アパートに戻り、ウサ子との生活も１週間過ぎた頃である。早朝、見知らぬ男性が俺の元を訪ねてきた。

　どこかで見た顔のようにも思うが、恐らく他人のそら似であろう。いっちゃ悪いが、人間には至って普通のどこにでもいるような顔だったから。

「どちら様でしょうか？」

　ウサ子を奥で遊ばせながら、俺は玄関の扉を開けた。Ｔシャツに短パンとボサボサヘアの、部屋着でくつろいでいますよ全快の俺とは違って、男はラフでも小綺麗な服装だった。眼鏡の奥で笑う。年は、多分俺と変わらない。

「先日、近くに引っ越して来たんですが、私も人間でして。人間の方がこちらにいるからと教えて頂いたもので、ご挨拶に」

「はあ」

　同じマンションの住人ではなさそうだが、同じ人間として心細いことは分かる。

　男の差し出した紙袋を受け取り、俺は深々と頭を下げた。

「お気遣いなさらずに。困った時はお互い様ですから、いつでも訪ねてきてください」

「ありがとうございます。この辺りの事とかよくわからないんで、人間に有効な施設とか有意義な情報があれば是非教えてください」

「そうですよね。ロボットに尋ねても知りませんもんね」

　彼は笑った。

「お時間はありますか？　　子連れですが、立ち話もなんですし、中でどうぞ」

　彼が少し躊躇ったようにも見えたが、気のせいかと思うほど案外すんなりと入ってくれた。

「あ、遅くなりましたが私、篠山と申します」

「桜木です。俺.....うちには、どなたかからの紹介で？」

「ええ、柏木警部です。近所で人間の方を紹介して欲しいと警察の相談窓口で相談したら、彼女が教えてくださいました」

　柏木警部。その名前を聞いて急に切なくなった。そういえば、随分と会っていない。

人間の友達が出来た！

「柏木警部とは、どのようなご関係で？」

　篠山さんの問いかけに、俺ははっとした。

「ええ、ちょっとした事件に運悪く巻き込まれましてね。それで随分とお世話になったんですよ」

　リビングに入ると、篠山さんにはクッション型ソファに座って貰った。

「コーヒーで構いませんか」

「すみません、ご親切に」

　ふとウサ子に目配せすると、最近ずっとお気に入りの音と映像の出る絵本に夢中だった。

「可愛いお子さんですね」

「実は、その子が柏木警部とのご縁の要因だったりするんです」

　なんとなく俺は苦笑いをこぼしながら言った。

「そうですか。もし差し支えなければ、お聞かせくださいませんか？」

　何故、とも思ったが純粋に単なる好奇心だろう。少し躊躇ったが、篠山さんの不思議な雰囲気に呑まれ、同じ人間と言うこともあってつい話初めてしまった。

　ウサ子のこと、事件のこと、現在の生活など。篠山さんは、真剣な顔で時々相づちを打ちながら聞いてくれていた。

「そうですか、それはお気の毒でしたね」

「ええ、でもこの子と巡り会えたから、今ではこれで良かったと思います」

篠山さんは、そうですか、と笑っていた。

その後、人間メニューの揃っているファミレスや薬局など直ぐにでも必要になりそうな情報を教えてあげた。

篠山さんは帰りにウサ子にまたねと笑いかけて、帰って行った。

「また、訪ねてもよろしいでしょうか？」

「はい、是非に」

「では」

篠山さんが帰ってから、ふと思い出した。聞こうと思って自分の話を初めたせいですっかり忘れてしまっていたのだが、篠山さんはどうしてこんな不便な場所にわざわざ引っ越してきたのだろうか。仕事とかしてるのかな、賢そうな人だったけど。

＊＊＊＊＊

案外ちょろそうな人間だった。自分の話を聞かれてないことまでベラベラ喋り、人のことは聞かなかった。頭が悪いというより、人が良すぎるのかもしれない。突然訪ねたにも関わらず、コーヒーの他にお菓子まで出してくれて、周辺施設を丁寧に教えてくれた。

今日はただの様子見のつもりだったから何のアクションも起こさなかったけれど、次回からはプライベートの事まで踏み込んで聞いていきたいと思う。そして、柏木との間を取り持つ方向で行こうと思った。簡単そうな仕事だと認識する。

ウサ子と名付けられた幼女型ナノマシーンの事は、ぎりぎりまで伏せておこうと思った。

あくまで、大人しい弱い近所の青年を演じるのに徹するのだ。

翌日、再び桜木の元を訪れようと思った。

＊＊＊＊＊

「こんにちは。今日も、来ちゃいました」

　篠山さんが、遠慮がちに笑いながら立っていた。

　俺は、思い出したように言った。

「篠山さんって、少し前に天才だって言われた篠山誠太って人に似てますね」

「ええ、よく言われますよ。でも、私の名前は篠山太一なんです。同じ篠山で顔も似てるなんて言われますけど、全く別人で。まあ、もし本人でしたらこんなとこでこんなことしてませんよねえ」

　俺は、篠山さんを部屋に入れた。俺的には冗談のつもりだったんだけど、少し気にしてる素振りに見えて、なんだか悪いことを言った気分になった。

「すみません、冗談のつもりだったんで」

「あ、気にしないでください。ほんと。当時、よく言われたんで慣れっこですし。しかし、篠山さん。どこに行っちゃったんでしょうね。あんなに世界から注目されてたっていうのに」

「誘拐ですかね、やっぱり」

「そうかもしれませんよね。あれだけ頭の良い方ですから、狙われてもおかしくないですし。どこかで、こっそり研究してる。とかだったらいいですのにね。未来のために。桜木さんはどう思います？　　篠山さんの研究について。ロボットがより人間らしくなるっていうあれです」

　急に振られて、頭の悪い俺は少し動揺したけど正直述べた。

「正直、当時としてはあんまり興味なかったですけどね。ただ、人間であることの特別性がなくなるのは悲しいかなって一瞬思いもしたんですが.....考えてみれば誰に見せる訳でもないですしね」

「ロボット達の差別とかは、今までなかったですか？」

「なかったと言えば嘘になりますよ。学生時代の差別は酷かったし、それが元でいじめられた事もありますけどね。でも、庇ってくれたのも友達でいてくれる奴もロボットだったりするんで。全員がダメとは言えないんですよねえ。人間だって人間だけの世界だった時代、いじめや差別だけじゃなくて戦争ってやつもしてたっていうじゃないですか。

結局は、個人の問題なんでしょうね」

「桜木さんは、そんな人間が作ったロボットだから、差別もいじめも戦争もなくならないって思いますか？　もし、そうだとしたら、遙か昔の人間達がそれらを阻止するプログラムを組み込まなければならなかった。けれど、あえてそれをしなかった。本当に必要なものを残し、不要な物を消さなかった。私は、ロボット達に全てを奪われてしまったんですよ。それでここに流れ着くしかなかった。ここはロボットが多いにしろ、人間を受け入れる体制が他よりほんの少しだけあるから」

　怒りにも似た声で話してくれた篠山さんではあったが、とても寂しそうだった。

「奪われた、とは？　聞いてもいいですか？」

「すみません、愚痴になりますけど。私の住んでいた場所は、先祖代々人間達が守ってきた場所だったんですけど、この度の都市開発の為だとかで、強制立ち退きされてしまったんですよ。世界に沢山ある、珍しくもない話なんですけどね。それで、慣れ親しんだ家も壊されてしまいましたし、何より祖母より昔から眠っている墓まで没収されてしまったのは辛かったですね。ロボットには故人を敬うという風習は、理解されなかったようです」

　ふと思い出した。子供の頃、母から聞かされた話。墓が無くなったと、母が言っていた。だから死んだら、自分は宇宙葬がいいとか言っていた。まだ死んでないけど。

「俺の家も、俺が子供の頃に墓が無くなったって言ってました」

「そうなんですか。なんでも、ロボット達が墓や神社、寺と言ったものを不要と考えて取り壊しているようなんですよ。古くさい文化だ、時代遅れの風習だ。そういったものに土地を使うのなら、もっと現実的なものに投資するべきだと。ただ、古代から存在する文化価値のある物は残す。それは人間が大切にしてきた信仰心や魂レベルの話でなく、単なる文化財としてだけの存在なんです」

「改めてそう言われると、寂しいですね」

「私は、怒りさえ覚えます」

　篠山さんの行き場のない思いは、俺にも伝わるほどだった。やりきれないといった方がいいだろうか。今まで特に何も考えずに生きてきた自分が恥ずかしく思う。

「すみません。桜木さんが同じ人間だったもので、つい。単なる私の愚痴ですから、気にしないで」

「いえ。そういえば、篠山さんはお仕事されてらっしゃるんですか？」

　篠山さんは、申し訳なさそうに笑ってみせた。

「作家をやっています。売れてないんですが。電子雑誌や電子新聞に小説を時々載せてもらったり、あとはライターですかね。何もしなくても生きてはいけるんですが、それも悔しくて」

　立派な人だな、と俺は感心した。

「桜木さんは、何かお仕事を？」

　聞いたのだから、聞き返されるに決まっている。特に何もしていません、という答えが聞きたかった俺からすれば後の祭りでトホホである。

「主夫ですね。シングルパパですけど」

「なるほど。恋人はいらっしゃるんでしょう。桜木さん、優しそうですし」

　俺は、泣きそうになるのを堪えた。

「.....それがモテないんですよね。一生独り身かも」

　篠山さんが困ったように、まあまあと慰めてくれた。

これって、お家デートってやつですか？

「見る目がないんですね、桜木さんの周りの女性は」

「お世辞はいいですよ。まあ、女性と出会う機会もないんで」

　篠山さんが笑ったのだけど、その笑いが妙に不気味に思え、一瞬ぞくっと背筋が寒くなった。

　その後いつもと変わらない柔らかな笑みを浮かべていたので、多分俺の勘違いだと思う。

「好意を寄せてる方はいらっしゃるんでしょうか？」

　俺の心臓が痛んだのだが、俺が何か言おうとするのを遮るようにさ篠山さんが声を上げた。

「ああ、もしかして柏木警部とか？　　美人ですしねえ」

「は？　　え？　　なんでそうなるんですか？」

「ああ、図星ですね」

　何故、柏木警部だと思ったんだろう。女の人に関わる機会がないと言ったから、最近までよく会ってたのが柏木警部だから当てずっぽ？

　いや、それならコンビニの店員さんもよく会ってる訳だし。

　どう返して良いか分からず悩んでいたら、篠山さんが気まずそうに頭を下げた。

「すみません。桜木さんのお話から頻繁に出くる方でしたから……私の冗談でしたのに。もしかして、当てちゃいました？」

　篠山さんは、やっぱり頭がいいんだろう。隠しても無駄かもしれないと観念した。小さな溜め息と共に、俺の頭がうなだれた。

「好きなのかどうかはわかりませんけど、事件に巻き込まれてからずっとお世話になってた人なんで気になるのは気になるんですよ。なんかちゃんと一回お礼したいんですけど、向こうはただ仕事で俺のこと気にかけてくれたのはわかってますし.....なんていうか、高嶺の花すぎてそれもしづらいっていうか」

「そうなんですか。では、桜木さんは人間でしょう。柏木警部も人間なのでしょうか？」

「いえ、以前は人間だったようですけど、今はロボットだって聞いてます」

「でしたら、高嶺の花なんて言わなくてもいいじゃないですか。柏木警部から見た桜木さんの方が、私からしたら高嶺の花ですよ」

　それは、言い過ぎだろう。あっちはスーパーモデル並みの超美女だ。

「それは失礼ですよ、柏木警部に」

　俺は篠山さんに、苦笑いを向けた。

「そうでしょうか。ロボットなんて、所詮作られた美しさです。欲しいと思えば誰でも金で買える。けど、人間はそうもいきません。神からのみ与えられる賜物です。桜木さんだって、人間であることを放棄すればスーパーモデルにだってなれるんですから」

　言われてみればそうなあのだけれど。

「少しは勇気出ました？」

　篠山さんが笑う。

「なんか、俺が柏木警部を好きだ、みたいな話になってますけど。本当わかんないんですって。好きなのか、どうかまで」

「すみません、私には恋いこがれているように見えたので」

　女子会ってやつで行われる恋バナってやつも、こういう感じなのだろうか。しかしながら、篠山さんはやたらこの話に絡んでくるな。

「もう、俺の女話はいいですよ。今はウサ子のことだけで、恋とかそんな余裕ないですから」

「そうですか、失礼しました。桜木さん、ウサ子ちゃんのために母親の事も考えてるのか

なって思ったので」

「ああ、うちの母は元気ですから大丈夫ですよ」

「ウサ子ちゃんの母のことです」

　篠山さんが少し呆れた声を出した。

「桜木さん、今のままだともったいないですよ。まだ、貴方とそこまで関わりはないですが、私から見た桜木さんはとっても魅力的な男性です。是非幸せになって頂きたいですし、どこかで気持ちを整理してください」

「ありがとうございます。けど、接点がなにもなくて。何か理由にして連絡取りたいにしても、その理由すら見つけらえないんですよ」

　篠山さんが、少し考える風をした。俺の出したコーヒーを飲み干したので、俺はおかわりを進めた。

「ありがとうございます。桜木さんは、柏木警部の連絡先を知らないのですか？」

「はい。いつも署から、事情説明して繋いで貰ってます」

「じゃあ、ウサ子ちゃんの件でって繋いで貰ったらどうですか？」

「それだと、病院のカウンセラーに相談するように言われそうです」

「では、空き巣の件では？」

「担当が途中から変わったみたいなんですよね。事件性が無いからってことで」

「では、もうストレートに柏木警部に用事があるって言ったらどうです？　　いちいち事情を説明せずに」

「.....そう言われると。けど、聞かれたらどうしましょう」

「その時は、自分をダシにしてください。紹介頂いた篠山って人間の件でって」

「じゃあ、最初からそれでいいですか？」

「でも、それだとこれからも毎回理由説明しないと繋がらないじゃないですか。理由説明

しなくても繋がるかどうかの確認なんですから」

「で、その後どうしましょう？」

「食事にでも誘ったらどうです？　その時に直接連絡先を聞いた方がいいですよ」

「なんでって言われたら」

「何かあった時にって」

「それなら署に.....」

　篠山さんが、イライラし始めたのを感じた。当たり前か。俺、どんだけ奥手なの。

「すみません。自信なくて」

「桜木さん、気持ちは分かりますが自信持ってくださいよ。柏木警部もそこまで桜木さんのこと嫌ってないと思いますよ」

「そうですかね」

「そうです。でももし拒否られるのなら、諦めてください」

「はあ、そうですね。当たって砕けてみます」

　ありがとう、篠山さん。少し勇気出た。

　で、その後は篠山さんと適当な世間話をして終わった。

　また、篠山さんの要件がなんなのか聞きそびれてしまった。また来ると言ってたから、その時に聞こう。

　本当に疲れたと思って横になっていたら、不意に電話が鳴った。誰かと思って見たら、まさかの警察署で。俺は何事かと思って電話に出た。

「はい、桜木です」

『柏木よ、元気してる？』

　まさかの相手で、思わず声が裏が返った。

「え？　は、はい。元気です！」

『何、驚いてるの？　いやあねえ』

　柏木警部の笑い声が響く。心臓がはちきれそうに高鳴るのだけど、多分篠山さんのせいだ。

「どうされたんですか？」

『どうってほどじゃないけど。事件があって、自宅に戻ってから音沙汰もなかったからね。生活も落ち着いたのかなって思って。まだ事件が解決した訳じゃないし、心のケアっていうの？　そういうのも仕事のうちだからね。何か変化はなかった？』

　仕事のうち。

「仕事でもうれしいです」

『は？』

「いえ、変わったことは特にないです。けど、柏木警部にお礼したくて俺なりに色々考えてるんでけど」

『気にしなくていいわよ。仕事なんだし』

「だめですかね。食事でも。男の家に誘うのも悪いので、お弁当とか差し入れていいですか？」

『.....』

　柏木警部の声が止まった。お弁当とかつい言ってしまったが、言ってしまったと思った。絶対どん引きしてる。俺の恋？　多分終わった。

「すみません、調子に乗りました」

『いいわよ、行っても』

「そうですよね、引きますよね」

『行っても良いわよ』

「……」

　今度は俺が止まった。何というか、信じられない返答に固まった。

『やめとく？』

「いやいやいやいや！　　是非に!!」

『今度の日曜の夜なら空いてるわ。18時くらいに行くから。あ、遅くなるときや仕事入ったら連絡するけど。急な呼び出しもあるから、確実には約束できないけどそれでもいいならね』

「構わないです。待ってます！」

『じゃあ、その時に近況も教えて貰うわ』

　電話は切れた。

　俺は、部屋中嬉しすぎて飛び跳ねた。それをきょとんと見ていたウサ子だったが、途中から訳も分からずウサ子も飛び跳ねだした。

　暫くして、下の住人が苦情を言いに来たのだが、謝りながらもニヤケる俺の顔が不気味だったらしく、住人はさっさと帰って行った。

　日曜日が楽しみ過ぎる。そうだ！　　その前に篠山さんに色々相談しよう。連絡先は、聞いていた。

お母さんの気持ち

　俺は早速、篠山さんに電話をした。

　ウサ子が俺の服を寂しそうに引っ張ったが、俺は気持ちを抑えきれなかったので、電話を肩で挟みながらウサ子を抱き上げた。

　５コールほどで、篠山さんが出た。

『こんばんは。どうされました？　　あ、もしかして忘れ物でもしましたかね』

「いえ、すみません。あの、柏木警部の件なんですが。思い切ってお弁当の差し入れか、食事に誘ってみたんですよ。そしたら、食事にオッケーしてくれました」

『ええ、よかったじゃないですか！』

　篠山さんは、心底良い人だ。付き合いもたいして長くない俺のために、喜んでくれているのが受話器の向こうからも伝わってくる。

『で、いつなんですか？　　どこへ行かれるのです？』

　篠山さんは、デートと思っているのだろう。俺は少し罰が悪そうに答えた。

「えっと、うちで食事なんです。俺が手料理作って、ごちそうする予定なんですけど」

『そうなんですか。柏木警部も大胆ですね』

　篠山さんが笑う。

「そんなんじゃ、ないですって！」

『私は何も言ってませんけど』

「あ」

『ところで、桜木さんはお料理が得意なんでしょうか？』

「はい。割と家事は得意でして。特に料理と掃除は特に好きなんです」

『へえ。私はそれほど好きではないので、羨ましいです。確かに、桜木さんのお宅は綺麗ですよね。私の家なんてとてもじゃないけど、人を呼べませんから』

「え？　そんなに汚いのですか？」

『いえ、最低限しかしてないってとこです。あと、食事はいつも外食ですし』

　篠山さんの見た目から想像出来るイメージからすると、なんだか意外だった。潔癖というか、綺麗好きそうな雰囲気があるし、自炊もそれなりにしてそうだった。

『どうされました？』

　思わず作ってしまった沈黙に、篠山さんが首を傾げた（ ような感じがした ）。

「あ、いや。意外だなって思って。なんとなく、篠山さんの見た目から.....綺麗好きで、炊事もそれなりにこなしていそうな気がしたもので」

　篠山さんが、爆笑した。

『桜木さん、独り身の男ですよ。そんなワケないでしょ。ただ、綺麗好きってのは合ってるかもしれませんね。片づけたいガラクタが溢れてるんですが、これがなかなか片づかなくてですね。少々手こずっているのですよ』

「そうなんですか。あの、言ってくだされば お手伝いいたしますので」

『ありがとうございます。その時は、是非お願いしますよ』

「あの、柏木警部にお会いする前にまた色々相談してもいいですか？　メニューとか、用意した方がいいものとか。俺、そう言うの経験もなくて全然わかんないんで.....」

　ふと、圭介の顔が思い浮かんだ。ダメだ、あいつは。違う方向に話が行ってしまいそうだから。

『そうですね。では、明後日にでもお邪魔しましょうか』

「ありがとうございます。ところで、先ほど篠山さん外食が多いって言ってましたでしょ。その日は、夕飯作りますんで、是非食べてってください」

『では、楽しみにしています』

　篠山さんとの電話を終えると、妙に心が落ち着いた。ウサ子に思わず頬ずりしてしまった。ウサ子は、きゃっきゃと笑っていた。

　で、ようやく時計を見上げるといつの間にか夜。というか、夕飯まだだった。ウサ子が寂しそうに俺の服を引っ張っていたのは、寂しいんじゃなくて腹が減っていたからだったんだろうと。篠山さんと少しお菓子を食べていたにしては、悪いことをしたとパパとして反省。

「ごめんな、ウサ子。すぐご飯にするからな」

　ウサ子は俺の腕から飛び降りると、大人しくテレビを観ていた。

　俺は冷蔵庫から鶏肉やら野菜やらを取り出し、なるべく手早く作れるもの.....で、唐揚げを作り始めた。

　簡単に下拵えを済ましてから揚げ始めてふと気づく。

　ウサ子って、ロボットだったよな。

　つまり、食べなくても平気だったわ。

　夕飯の準備が出来て、さあ食べるぞ！　とウサ子と両手を合わせていただきまーす！
　したところで、ドアチャイムが鳴った。

「ウサ子、見てくるから食べてていいよ」

　俺が立ち上がると、ウサ子は鶏唐をめいっぱい頬張っていた。

　再びチャイムが鳴る。

「はいはい、今出ますよ」

　そっと扉を開けると、圭介が笑顔で立っていた。

「霞ちゃん、どお？　元気にパパやってる？」

「おお、なんともタイミングのいいやつ。どっかで見てた？」

「はあ？　テンション低く、何その台詞」

　とりあえず、圭介を部屋へ入れた。

　ウサ子は、鶏唐をがっついてばかりだ。

「ウサ子、野菜やご飯もちゃんと食べなさい」

「うー！」

　ウサ子は、鶏肉を頬張ったまま不機嫌な声を上げた。

「ははっ！　しっかりパパやってるじゃん。いいねえ、オレも所帯持っちゃおうかな」

「まじかっ！」

「でも、どの子にしようか迷っちゃうねー。一生添い遂げたいなんて思える子いないんだよね」

「……なんかそれも寂しいな」

　圭介は何となく、俺の呟きを聞かない振りしたように思えた。

「これで、霞ちゃんの奥さん。ウサ子ちゃんのママがいれば完璧なんだけどね」

「いらんこと言うな。こればっかはどうしょもない」

　圭介が鼻で笑った。

「で、今日はどうした？」

　圭介は、桜木家の晩ご飯の唐揚げをひとつつまみ食いした。

「霞ちゃんが思ってる以上に、オレは霞ちゃんに事心配してるんだよ。子供の時からね」

「ありがと」

「男一人で経験のない子育てとか大変じゃないかな、って思って。オレも手伝いに来たワケよ。料理も掃除も洗濯もできないけど、なんか手伝えることあれば手伝およ」

　満面の笑みを俺に向けるのはいいが、それじゃ何も出来ないじゃないか。役立たずっっっ!!

「じゃあ、逆になにしてくれるの」

「そだね、霞ちゃんがお風呂入ってる間にウサ子ちゃん見てるとか、オ〇ニーしてる間にウサ子ちゃん見て.....」

　俺は圭介が言い終わる前に、脳天に思いっきりげんこつを落とした。さすが、ロボット。俺の手が痛いわ！

「ウサ子の前で、下品な事言うのはやめろ！　マジで！　出入り禁止にするぞ」

「もお、冗談じゃん。わかったって、ごめんね」

「今度言ったら、追い出すからな。出入り禁止だからな。マジで！」

　こいつのチャラい存在だけでも、十分害だと思えるのに！

「わかった、わかったから。落ち着いて。マジで、まじめにやるから。期限直してよ」

「今回だけ、だかんな！」

　圭介は、心を入れ替えたのかチャラい雰囲気を抑えていた。

「じゃあさ、食事終わったらオレがウサ子ちゃんの相手してるから、その間に霞ちゃんは家事とお風呂済ませちゃいなよ。その方が楽でしょ。さっきちらっと見えたけど、案の定洗濯も溜まってるみたいじゃん」

　圭介にたいして、散々迷惑だとか害だとか言ってきた俺だが、いざそうして貰えるとなると本当に助かるのは事実なのである。

　洗濯もだが、食事の後片づけも含めて、掃除なんか全然出来ていないし。お風呂だって、ここんとこのこと考えればゆっくりまともに入れていない気がする。

「.....じゃあ、頼もうかな。そうしてくれたら、なんだかんだで助かるよ。ほんと」

　その日は、圭介のお陰で溜まっていた家事が片付いただけでなく、ゆっくりお風呂にも入ることが出来た。ウサ子には悪いが、何週間か振りの一人でゆっくり入るお風呂は本当に気持ちよかった。

「母さんも、こんな時があったんかな」

　ずっと帰っていない家と、長いこと会ってない両親。俺の両親のことだから、夫婦で楽しくやってんだろうけど。今更かもしれないけど、母親っていうものを尊敬した。ついでに、ちょっとだけ恋しくなった。

　久しぶりに、連絡してみようかな。

　どうせなら、ちょっとだけ帰ってみようかな。

　いずれはウサ子のことも、話さないといけないワケだし。

出禁な

部下に知られたら、きっとからかわれるだろうな。いや、待てよ。驚かれるのが先かもしれない。

異性とか恋愛とかに興味がなかった訳ではないけれど、特にこれと言って関わるきっかけがなかっただけ。

.....きっかけなら作ろうと思えば作れたんだろうけど、なんでだろう。考えて、仕事の忙しさに甘えていたんだろうなと思った。

思わず、溜め息がこぼれた。

子供はあまり好きじゃない。だから、結婚なんてしなくて良いと思う。でも、恋人は欲しいと思うこともある。

美人の容姿を与えてくれたのは、養父母だ。事故で記憶と共に身体を失い、脳味噌だけで生きていたときに引き取りたいと申し出てくれた養父母もまた、過去に事故で人間の身体と実の子を失ったのだという。

事故で身体と家族を失った私に、気持ちがシンクロしたのだろう。

養父母は裕福だったから、私に最高の身体を与えてくれた。

幼少の頃から、私は最高ランクの身体を持っている。

ただ、ロボットの身体なんて高級車を乗り回すこととなんら変わらないように思う。

それでも、養父母には感謝している。最高の身体をもらって、損どころか得したことしかない。そしてなんの不自由もなく、育ててくれた。

学生時代は、学校一のアイドルだった。いつもリーダー位置にいて、生徒会長もしていた。事故前、まだ人間だった時も、自分がリーダーシップを取るような前向きな性格だったかどうかまで覚えてはいない。

けれど、養父母のお陰で私がそうなったのは事実だ。

恵まれた人生だったから、以前の自分がどうだったかなんて考えることなどなかった。

亡くなった両親考えることはあったけど、記憶ではそれすら夢のような感覚で。悲しみたくても悲しめない自分に、胸が痛くなるばかりなので考えないようにしていた。

今までそうやって生きてきたのに.....。

そう滅多に会うこともない人間と出会った。あいつ、桜木霞だ。女みたいな名前の、なよなよした優男。

災難な人間の被害者の男。でいてくれればよかったのに、あいつの顔が事故前のうっすら浮かぶ記憶の中の男の子の顔によく似ていたから気になった。

記憶の中の男の子が私とどこまでの関係があったかなんてわからないし、あいつと男の子が関係しているかどうかなんてもちろんわからない。けれど、似ていたから気になってしかたない。自分の過去も気になり始めた。

もちろん仕事は忙しいのだけれど、それでもまだ時間は確保できる。その時間を、自分を捜す時間に使うことにした。

私がわかる限りの事故を調べた。自分の名前であろう候補はいくつか出てきた。何故なら、脳味噌しかなかったので、身元確認が出来なかったのだ。その時、旅客機に搭乗していた子供の女の子の中の誰かだと思う。

その子供のことを全て調べた。身元が確認出来なかったので、全員行方不明扱いになっていた。事故被害状況を確認すると、乗客全てばらばらの黒こげになってしまったようで身元の確認がほぼ取れなかったようだ。私はというと、身体がばらばらになった際、脳味噌が吹き飛び瓦礫の隙間に入り込んで助かったようなのだけれど、詳しい状況まではわからなかった。

それだけでも、悲惨な事故だったことがわかる。

で、その行方不明の女の子達をそれぞれ調べてみたけれど、私自信はいたのだろうけど、その中で記憶に引っかかるものはなかった。

絶望したというより、虚無に近い。ぽっかりと空いた記憶が、急に怖いと思えた。

そんな時、あいつから食事に誘われた。

人畜無害そうな奴だし、やり合ったら勝てそうな気もするので、家に行ってやろうと

思った。気分転換というか、記憶の中の一つにすがりたかったのかもしれない。

　結局のところはよくわからないけれど、電話を切った後、少しだけほっとしたのは嘘じゃない。

　それにしても、桜木霞とはおもしろい男だと思う。私の容姿のせいで格好付けるような男は多かったけど、こいつはそんな感じではない。どちらかというと、情けない方だ。普通の女性なら、愛想尽かすだろう。そんなところが、新鮮に思えた。私も随分な物好きだろうか。

＊＊＊＊＊

　神は、自分に味方しているようだ。人間を作り出した神が、人間の生み出したロボットを許さないのだろう。電話越しに、口元が緩んだ。

　電話を終えてから、またおもしろいことがわかった。

　幼女ナノマシーンから配信されるデータを確認していると、桜木霞にはロボットの友人、それも頻繁に会いに来るロボットがいるらしい。

　そのロボットが幼女ナノマシーンの世話までしているというから、更に好都合だ。警察のロボットと友人のロボット、２体で実験が出来る。

　幼女ナノマシーンには、次回追加プログラムを取り付けようと思う。当初は時限爆弾的な発動プログラムとしていたが、こちらで操作出来た方が便利だ。

　微弱電波でプログラムを書き換えられる子機を作り始めた。

＊＊＊＊＊

　風呂から上がると、圭介がウサ子を寝かしつけてくれていた。布団ですやすや眠るウサ子を、ぼんやり見つめながら圭介が呟く。

「オレさあ、別に子供って好きじゃなかったんだよね。ちっちゃくて可愛いとは思うけど、それはペットとか人形とかと変わらない感情でさ。実際親になるとか実感ないし、それどころかずっといるってなると面倒に思うんだよね。だから、結婚とかって考えら

んないし。オレがさ、女の子何人とも付き合ったりすぐ別れたりするのもそれなんだよ。結婚しようとか、相手がそんな目で見始めると.....引いちゃうんだよね。軽いノリで付き合いたいっていうかさ、一人だと寂しいからね」

「ウサ子見ながら、そんなこと言うなよ」

　圭介が鼻で笑った。

「続きがあるんだよ。オレがイメージしてたのと違うなって思ってさ。子供って、そんなんじゃないんだなって。ウサ子ちゃんさ、ちっちゃい手でオレのこと掴むんだよ。なんでもないのに。その手がさ、いちいち必死で目一杯で。守らなきゃって思うよな」

　ウサ子の存在は、圭介の心にも響いたようだ。俺の心を動かしたように、圭介の心も動かした。

「ねえ、霞ちゃん。オレがお母さんになろうかな」

「イヤです！」

　冗談でもイヤだわ、男同士とかぞっとするし。

「てか、お前.....バイか？」

「なワケあるか！　　冗談に決まってるだろ。でも、子供欲しくなったかな。少しだけど」

「ウサ子はやらんぞ」

「霞ちゃんから、ウサ子ちゃんは取れないでしょ。ぞっこんじゃん」

「そうだよ」

　ウサ子が動いたので、掛け布団がずれてしまった。それは俺は直した。

「そういえばさ、霞ちゃんはあれから柏木警部に会ってるの？」

「なんで？」

「いや、なんかすっごい気にかけてくれてたじゃん」

「あ、うん。あれからは全然会ってなかったんだよ。なんか担当も変わったみたいで。け

ど今度食事に.....」

　しまったと思ったが、遅かった。つい、圭介にポロリと言ってしまった。

「なに、柏木警部と食事に行くの？　　やるじゃん！　　お洒落な店とか教えようか？」

「どこにも行かないよ。家で夕飯ご馳走するだけ.....」

　あ。また、いらんことをつい.....。

「益々やるじゃん！」

「だから、そんなんじゃないって。子連れだから、仕方ないんだって」

　なにが仕方ないのかよくわからないけれど、主婦みたいな理由を付けた。

「まあ、いいよ。上手く行くといいけどねえ。美人警部の彼女なんて、羨ましいね。あ、いきなり先走らないようにね。がつがつしたら嫌われるから。当日はちゃんと家に帰して」

　俺は、圭介をどついた。

「いい加減にしなさい！」

　なにかと不安は多い。

篠山さん、めっちゃ良い人

篠山さんが、家に訪ねてきてくれたのは、昼過ぎだった。

ウサ子との昼食を終えて、ひと段落すると、ウサ子がうとうととし始めた。

篠山さんにコーヒーをお出しして、少しの間待っていてもらった。篠山さんはにっこりと快諾してくれたので、俺はウサ子を寝かしつけた。お昼寝してくれていれば、篠山さんとゆっくり話も出来るので丁度良い。

すやすや寝たところを確認して、俺は篠山さんの元に戻った。

「すみません。こんな時間にうとうとするのも珍しいんですけどね。いつもなら、もうちょっと後だから。でも、寝てくれていたらゆっくり話が出来るんで、丁度良かったです」

「そうですか。ベストタイミングだったんですね。あ、そうそう」

言うと、篠山さんは自分の鞄の中から小さなウサギのぬいぐるみを取り出した。

「これね、たまたま見つけたんですがウサ子ちゃんに。可愛くて、ウサ子ちゃんの髪飾りを思い出してしまってつい。独り身で子供もいませんから、楽しかったんですよ」

俺は、頭を何度も下げながら受け取った。

「なんか、すみません。相談まで聞いてもらって、お土産まで」

「いえ。私も予定より早く来てしまってすみません。これを買ってから、ウサ子ちゃんに早く渡したくて。と言っても、寝ちゃってますけど」

「起きたら渡しておきます。喜びますよ。絶対に」

篠山さんの気持ちは良くわかる。俺もそうだ。そのせいか、ウサ子のオモチャはあっと言う間に増えてしまって、今ではオモチャ箱が３つもある。

「また、オモチャ増えました？」

「俺も、つい。なんか、楽しいですよね」

　俺はせっかくなので、ウサギのぬいぐるみをウサ子の布団にそっと入れた。

「で、柏木警部には何をご馳走するつもりなんですか？」

「そうなんですよ。俺、いまいち女性ウケする食べ物とかわからなくて、何がいいですかね？　本人に聞くのも聞きづらくって。聞いてもきっと、気にしなくていいとか、なんでもいいとかいいそうだし」

「そうですか。桜木さんは、柏木さんとの食事は初めてなんですよね？」

「いえ、それがちょっとした機会があって初めてではないんですよ」

「へえ、驚きました。私が思っていたより、親しいのではないですか？」

　俺は首を全力で左右に振った。

「そんなんじゃないんですよ、ホント。最初は、初めて会った時が事情聴取だったんですが、その時でして。で、その後が空き巣に入られて警察に捜査してもらってるときでした。タイミング的に、食事でもって」

　篠山さんが、首を傾げた。

「私が思うのにロボットである柏木警部が、親しくもない、もしくは興味もない男性と食事なんかしますかね」

「食事のタイミングで、俺が人間だから気を使っててくれて。で、人が食べてるの見てると自分も食べたくなるからって言ってましたから」

「そうですか」

　と言いつつも、篠山さんは納得してない感じだった。

「桜木さん、その時柏木警部は何食べてました？　何が好きとか嫌いとか聞いてませんでした？　あと、食事に対してどう思ってるのかとか」

　俺は、篠山さんに正直に話した。

「最初の時は事情聴取でしたし、テーブルで簡単に食べられる出前と言うことで、カツカ

レーでしたね。その後は、柏木警部が行き着けだという定食屋のラーメン定食。思えば、割とがっつりしたものが多かったかも。あと、食事をするのは人間の特権だから、人間らしさって意味で庶民的なものを食べるんだと言ってました」

「そうなんですね。でしたら、庶民的でがっつりしたものの方がいいでしょうね。トンカツ、ハンバーグ、グラタン、シチュー、カレー.....ですかねえ。今、ぱっと思い浮かぶものですけど」

「篠山さんなら、今何が食べたいですか？」

「私ですか？」

　俺は頷いた。篠山さんへのお礼もあるから。

「そうですねえ。私は、がっつりしたものより普通の和食が好きなので、今の気分でしたら肉じゃがですかね」

「じゃあ、肉じゃが作りましょう。今晩ですけど。肉じゃがの材料ならありますし」

「あ」

　篠山さんは、きつねに摘まれたような顔をした。

「約束ですよ。俺ので申し訳ないんですけど、たまには手料理でも食べてってください。ずっとロボット相手にしか作ってないんで、なんだかんだ言っても物足りなくて、俺としても人間の方に食べて貰えるのが嬉しいんですよ」

　篠山さんは笑った。

「そうですか。では、いただきます」

「じゃあ、今晩は決定ってことで。にしても、女性のがっつりって難しいですよねえ」

　２人して暫く考え込んだ。

　最初に口火を切ったのは、篠山さんだった。

「Ｂ級グルメってやつですけど、トルコライスってご存じですか？　　大きなお皿に、揚げ物、肉類いろいろ乗ってる料理です。少々見た目も豪快なんですけど」

「トルコライスですか。ちょっと調べてみます。ありがとうございます」

「それから、この部屋を見回したところ、桜木さんが綺麗好きなのはわかりますけど、もう少し遊び心を加えてお迎えしたらどうでしょうか？　例えば、観葉植物とまではいかないにしろ、花ぐらいは飾ってみるとか。バラは高いし、少々気持ちが重たいと思いますので、百合なんかおすすめですよ。匂いも良いですしねえ」

花を飾る、なんて考えてなかった。それだけで、女性をお迎えするのに少しは印象の良い部屋になるかな。

「花、飾ってみます。綺麗な花瓶とか買ってみます。観葉植物なら、これから先もずっとあってもいいかもしれませんよね」

「ええ。緑があるだけで、随分気持ちも落ち着くものですよ。私も、実は観葉植物が好きでしてね。家に幾つかありますし」

「そうなんですね。なんか、おすすめの植物とかありますか？」

「パキラ、ポトス、ウンベラータなんかが一般的かと。予算もありますし、お花屋さんでご相談するのがいいかと思いますよ」

「そうですね。明日にでも、買い物がてら行きたいと思います。本当にありがとうございました」

「いえいえ」

それからは、篠山さんと軽い世間話をしていた。

夕方になって、夕飯を作り始めた頃、ウサ子が起きてきた。

「うさたん」

ウサ子は寝ぼけ眼をこすりながら、ぼんやりと篠山さんのくれたウサギのぬいぐるみをさしだしてきた。

「そうだよ、篠山さんがウサ子にくれたうさちゃんだよ」

ウサ子はうさぎのぬいぐるみをぎゅっと抱きしめた。

「ちゃんと、篠山さんにありがとうして」

　ウサ子は頷くと、篠山さんの側に寄り、ぺこぺこと頭を下げた。

「桜木さん、ウサ子ちゃん見てますから。夕飯、作っててください。私も楽しみにしていましので」

「すみません、急いで作りますので！」

　俺が夕飯を作ってる間、篠山さんはウサ子と遊んでくれていた。ウサ子は早速、篠山さんのくれたうさぎのぬいぐるみでごっこ遊びのようなことを始めていた。

　夕飯が出来て、篠山さんに振る舞う。ウサ子は篠山さんがすっかり気に入ったようで、彼の膝に座ったままだった。俺としては、少し悔しく思った。

「ウサ子、篠山さん迷惑だろ。ちゃんとイスに座りなさい」

　ウサ子専用の、子供用イスがあるのだがなかなか座らない。

「桜木さん、気にしないでください。私はこのままで構いませんから。ウサ子ちゃんがしっかり懐いてくれたみたいで、私としても嬉しいんですよ」

「篠山さんがそう言われるのなら.....」

　客人用の茶碗にご飯を盛りつけながら、俺は少し複雑な気持ちになっていた。それを見透かしたかのように、篠山さんが言う。

「ウサ子ちゃん、取ったりしませんから大丈夫ですよ」

　俺の顔が赤くなった。

「そんなこと、気にしてませんから」

「そうですか。桜木さん、ウサ子ちゃんにメロメロですからてっきり」

　篠山さんは笑っていた。

　それ、圭介にも言われたけど.....俺って、親バカなんだろうな.....。

大人のお子様ランチ

　篠山さんは、俺の料理を大げさなくらいベタ誉めしてくれた。

　俺も嬉かったので、また是非食べに来て貰いたくて、お誘いしてもいいか訪ねると、篠山さんはもちろんと快諾してくれた。

　ロボットの圭介も俺の料理を誉めてはくれるものの、俺の偏見なのだけれど、ロボットと言うだけでやっぱりどこか味気なく感じてしまうのだ。

　人間の食事友達ができたことは、俺としても大きな喜びである。

　この日、圭介は仕事で来れなかったのだけれど、篠山さんがついでにと俺の時間を作るために少しだけウサ子の面倒を見てくれたから助かった。

　まだ知り合って間もないと言うのに、心底良い人過ぎる。

　翌日、俺は柏木警部に作るトルコライスの材料と観葉植物や花を買いに出かけた。

　実はトルコライスとやらを、俺はよく知らない。なんでも、日本の遙か昔に長崎と呼ばれる地区でご当地Ｂ級グルメと人気だった料理のことらしい。大きな皿にライスの他におかず的な色々な物を並べたらいいみたい。色々なおかずがあるからボリュームもあるが、何より色々楽しめるので欲張りな食いしん坊にはぴったりのメニューなようだ。

　で、さて俺は何を乗っけようかな。

　ナポリタンは定番なようだから外せないし、あとはハンバーグとかコロッケとか、エビフライにカツ……。

「なあ、ウサ子は何が食べたい？」

　わかるはずもないウサ子に問うてみたら、彼女はにんまり笑った。

「パンケエキ、しょれからプリン」

　そういえば、ウサ子はパンケーキとかプリントかの甘いおやつ類が好きだったな。俺は、ウサ子の頭を撫でた。

「それはおやつとデザートだな」

「ウサ、おやつ食べゆ」

「帰りに、レストランでも寄ろうか」

　ウサ子は俺の腕にしがみついた。

「パパの！」

　作れと言うことらしい。

「わかった。時間かかるけど、ちゃんと待てる？」

「待てゆ」

　考えても見れば、ウサ子も最初の時に比べれば随分喋れるようになったと思う。絵本やテレビを沢山見せたからだろうけど、たまによろしくない言動も覚えてしまうので、俺も気を付けている。

　最初に花屋に行った。幹が編み込まれたのが可愛い、パキラという木があった。小さめのしか買えなかったのだけれど、可愛くて俺も気に入ったし、特にウサ子が気に入っていたのでこれに決めた。それと手のひらサイズのサボテンも購入。窓辺とか玄関に置いても可愛いし、そんなに水やりをしなくてもいいので、ウサ子の教育にもいいんじゃないかと思ったから。

「サボテンにお水あげるのは、ウサ子の仕事にしようか」

　初めての仕事に、ウサ子は胸を叩いて「まかせて！」と答えた。一体どこで覚えたんだろうか。可愛いけど。

　買った植物は、お店から自宅に配送して貰える事となった。

　それからスーパーに寄って、食材の買い出し。

　ウサ子が指を加えてきょろきょろする。興味をそそる物が多いらしい。どこかに行ってしまうと怖いので、カートのイスに座らせた。

「パパ、おかち」

　きょろきょろしてたのは、お菓子売場を探してたのか。

「お菓子あとで一個だけ買ってあげるよ。少し待ってて」

　ちょっと不満そうな顔をするウサ子。

「お金払わないと食べちゃいけないんだよ。今選んだら食べたくなっちゃうだろ」

　ウサ子が更にむすっとするので、さっさと買い物を済ませる事にした。

　内容は完全に決まっていないので、とりあえず思い付く限り適当に買って、後から決めて残りは別の日に食べればいいと。買い物かごへ適当に放り込んでいく。

　野菜、お肉、魚介.....。デザートは、ウサ子リクエストのプリンにしよう。果物を乗っけてアラモードでもいいな。せっかくだから、がんばっちゃおう。なんか、楽しい。

　ウサ子の機嫌が限界にならないうちに、お菓子売り場に入った。

　ウサ子をカートから降ろした。

「好きなお菓子、一つだけ選んでおいで」

　ウサ子は目を輝かせながら、お菓子売場をうろうろしていた。

　暫く見守っていると、子供用ビスケットとチョコレートの箱を手に取り、俺に差し出してきた。

「ウサ子、一つって言ったろ。どっちか一つにしなさい」

　ウサ子は首を左右に振った。

「パパは、どっち？」

　俺に決めろと言いたいのかな。

「パパはね、チョコレートの方が好きかな」

　言うとウサ子はビスケットの箱を棚に戻した。

　チョコレートの箱をカゴに入れて言う。

「パパといっちょにたべえゆね」

　パパと一緒に食べれるね！

　ウサ子が可愛すぎて、すりすりしたくなった。けど、公衆の面前なのでぐっと我慢。

　買い物を終えて家に帰ると、昼を過ぎていた。もう少し早く買えるつもりだったので、うっかりした誤算。ウサ子のお弁当持って出れば良かったなと後悔した。

　急いで冷蔵庫に食材を片づけると、昼ご飯の支度に取りかかった。簡単にパスタでもと思い、タマネギとハムとピーマンを持ってキッチンに立ったところで声を出す。

「ウサ子、すぐご飯にするからね。パスタにしようか」

　するとウサ子が、返事する。

「ぱんけえき」

　あ、と思った。パンケーキに卵とハムを添えるのも.....ありかもしれない。

　俺は手に持った食材を冷蔵庫に戻した。

　ウサ子と落ち着かない時間を過ごしたものの、落ち着かないのは俺だけで。

　柏木警部が来るかどうか決定ではなかったのもあるけれど、柏木警部からの電話を受けた時は、それはもう心臓が破裂するかと思うほど緊張した。

　柏木警部からの電話は、この後向かうわって感じで。一応、食事の支度も進めていたから、そのあとの料理は人生で１、２を争うほど楽しい物だった。

　食事ができあがる頃、柏木警部が到着した。

「あ、少し早かったかしら？」

「お疲れさまです。いえ、いいんですよ。作りたて食べて欲しいですし。あと盛りつけだけなんで、少し待っててもらえすか？」

　柏木警部は部屋に入ると、少し気にするようにきょろきょろしていた。

「何かありました？」

「いいえ。あの時の酷い有様しか知らないから、随分綺麗にしているのね。と思って」

　俺は、苦笑いをした。

「俺、掃除とか料理とか好きなんですよ。これでも、掃除しきれてなくて申し訳ないと思ってますし。やっぱり、子供育てると今まで通り上手くいかないもんですね」

　リビングに案内して、用意した座布団の上に座って貰った。とりあえず、コーヒーを出した。

　ウサ子は、お気に入りのアニメを観ながら、大人しくしている。

「なんか、あんたってエプロン姿意外とさまになるのね」

「そうですか、うれしいな」

　喜ぶところなのか、誉められたのかはよくわからないけれど、とりあえず喜んでおいた。

　柏木警部は気になったのか、コーヒーを少し飲んだところで、俺の背後から手元を覗いてきた。

「なあに、その料理」

「トルコ料理って言うらしいんですよ。俺も教えて貰ったところなんですけど、何がお好きかわからなかったし、どうせなら色々食べてもらえたらいいかなって思って」

　プレートにご飯の他におかずを並べていく。結局決まったのは、ハンバーグ、エビフライ、ヒレカツ、小さめのサラダとナポリタン。

「ふうん。なんか、お子さまランチみたいで楽しいね」

　よかった。第一印象は好評なようだ。

　盛り付けのすんだプレートを机に運び、スープカップにタマネギのコンソメスープを入れてそれも運んだ。

「デザートもありますから、遠慮せずに食べてくださいね。あ、飲み物は何がいいですか？　お茶、コーヒー、紅茶.....一応ワインとビールも用意しましたけど」

「そうねえ、ビール貰おうかな」

実家に帰ろう

　俺は冷えたビールを、柏木警部に渡した。

「柏木警部も、お酒お好きなんですか？」

「まあね。酔わないけど、好きは好きかな」

「俺の友達も酒好きなんですが、やっぱりロボットなんで酔わなくて。ロボットの酒好きって、どこで通じるんですかね」

　俺はふとした疑問を口にした。柏木警部は少し考えてから答えた。

「アルコール摂取すると、少しだけ冷却機能が鈍って体温が上がるのよ。そうすると、なんだかぽうっと気持ちよくなるのよね。まあ、人間と同じ酔うって感覚と同じなのかな。って、酔ってないってのは嘘になるわよね。ただ、どれだけ飲んでも泥酔したり、二日酔いってやつになったりしないけどね」

「そうなんですか、俺ちょっと飲み過ぎるとすぐ二日酔いになるんで.....羨ましいです」

「そう。不便ね。あ、あんたも飲んだら」

　柏木警部は、いただくわねと一言。ビール缶のプルタブを上げた。ぷしゅうっと音が鳴る。

「じゃあ、俺も頂こうかな。ウサ子が来てから、なんだかんだであんまり飲んでないんですよね」

　俺も自分用のビールを冷蔵庫から取り出して机に置くと、テレビに夢中のウサ子にエプロンを掛けた。

「ウサ子、すぐ汚すんで。食べさす用意しますから、柏木警部先に食べちゃってください」

「あんたも、ちゃんとパパやってるのね。じゃあ、頂くわ」

　俺はいつもの事なのだけれど、ウサ子にある程度ご飯を食べさせてからしか食べれない。一緒に食べたいけれど、それは諦めている。

「あら、すっごく美味しいじゃない。私ね、こう見えても結構食べるのよ。ロボットって、いくら食べても太らないのが便利よね。そこは、ありがたく思うわ」

「いいですね。じゃんじゃん食べちゃってください。なんなら、おかわりも」

「ありがと」

　ウサ子にご飯を食べさせながら、柏木警部が食べるのを見ていた。初めてではないのだけど、このシチュエーションは初めてで、改めて見るとドキドキする。やっぱり、俺、柏木警部の事が好きなのかな。

　彼女は上品に食べるのだけれど、その口にどんどん食べ物は消えていく。

　やっと俺が食べる頃に、柏木警部は食べ終わっていた。

「ああ、美味しかった。予想以上で大満足よ。ありがとうね」

「おかわりは？」

「いい。お腹いっぱい。あ、ビールだけ貰おうかな。あれば」

「デザートにしますか？」

「あんた、今からでしょ？　　食べ終わってからでいいわよ」

「わかりました。さっさと食べちゃいますね」

　俺は、柏木警部にビールも渡した。

「いい、ゆっくり食べな」

　けれど、ウサ子はゆっくり食べさせてくれない訳で。ウサ子を抱きながら、俺はご飯をかきこんだ。いつもの事だ。

　食べ終わって、冷蔵庫から手作りのプリンアラモードを出した。

「デザートどうぞ」

「わお、すごいわね。こんなにがんばらなくてもよかったのに、大丈夫？」

「はい、なんか楽しくて。こんなんになっちゃいました」

　ロボットといえど、柏木警部も女性なんだな。別腹というか.....。正直食べれるかなと思えるほどの量だったトルコライスを平らげ、更にプリンアラモードを食べるのだから。

　食べ終わった柏木警部は満足で幸せそう。俺まで幸せな気分になる。

「あー、本当に美味しかった。ありがとうね」

「いえ、俺こそいっつもお世話になってるお礼ですし。食べて頂いてありがとうございます」

「あのさあ、あんたいっつも私に対して恐縮し過ぎじゃない？　何度も会ってるんだし、そろそろもう少し慣れてくれてもいいと思うんだけどなあ」

　それは、どういう意味と捉えたらいいんだろうか。

「あ、いや、でも.....そんな、たいそうな.....」

「なんで？　美人だから？　やり手の警部だから？」

「あ、はい」

　俺は、目を逸らすしかできなかった。柏木警部は酔ってるのだろうか。いや、ロボットだから人間みたいには酔わない筈なんだけど。

「ねえ、もう少し慣れてよ」

　失礼かと思って距離をとっていたことが、逆に失礼だったんだろうか。

「なぜ、ですか？」

「なぜって.....皆そうよ。なんで恐縮すんの？　他の人にはもっと親しげにしてるんでしょ？」

「あ、え、えっと」

　俺が困っていると、柏木警部は声を上げた。

「やーめた！」

「え？」

「そんな困るようなこと、言ったつもりないし。もしさ、あんたが迷惑じゃないってんなら、またご飯作ってくれる？」

「あ、はい、喜んで！」

　そんなに気にってくれたのかな。嬉しいな。

「連絡するわ。あんたの連絡先は署に行けばわかるし、また時間はある時にでも」

　俺は、今しかない！　と思った。

「あの、俺、連絡していいですか？　柏木警部の連絡先、教えてもらえますか？」

「いいわよ。あとさ、プライベートで柏木警部は止めてくれない？　満嗣って呼んで」

「満嗣さん、ですね」

「そ。それでいいわ」

「あの、もののついでなんですけど、もう一つ聞いていいですか？」

「なに？」

「なんで、そんなに俺に気遣ってくれるんですか？」

　一瞬、満嗣さんの動きが止まった気がした。

　暫くの沈黙後、彼女は答えた。

「なんだろうね、昔の知り合いに似てるみたい。懐かしいのかな」

「昔の知り合いですか？　事故の後.....ですよね？」

「うーん.....そうねえ。どのくらい昔かは、忘れちゃっｔわ」

　俺は、過去に満嗣さんに会った事はない。もし出会っていたなら、こんな超絶美人を忘れる筈がないと思う。だから、絶対別人だと思う。けど、その人に似てるって.....。

「その人は、満嗣さんの想い人ですか？」

「なんで、そーなんのよ？」

「だって、そんなに覚えてて懐かしくなるほど気になるとか」

「気になるって、違う。懐かしくなってただけでしょ。もう、アホな連想すんなら、もう会わないわよ！」

「いやいやいやいや、すみません。そんな、俺がちょっと気になっただけですから」

「じゃあ、もう少ししたら私帰るわ」

「あ、そうですか」

　俺からしたら、楽しく話していたところだったので、帰ると言われて現実に引き戻されてしまった。時間もあっと言う間だった。

「送りましょうか？」

「人間が、なにいってんの。大体、タクシー呼ぶし。大丈夫よ」

「そうですか」

　一瞬、飲酒運転するのかと思ったが、そこは警察らしい。

「ふと思ったんですが、ロボットも飲酒運転になるんですか？」

「一応ね」

　勉強になりました。

　ウサ子が、うとうと始めていた。やばい、お風呂にまだ入れてないのに。

　それを見て、満嗣さんがウサ子のほっぺをつんつんした。

「ウサ子ちゃん、じゃあね。またくるね」

「またね」

　小さい声で、眠そうにウサ子は返事をした。

「じゃあ、がんばってパパしてね。仕事、最近また忙しくてさ。なかなか連絡付かないかもだけど、なんかあったら連絡して。緊急の時は、署に連絡してくれたらいいから」

　俺は苦笑いを向けた。

「緊急がないことを祈りたいですけど」

　満嗣さんは、笑った。

　彼女が帰った部屋は、寂しさがこみ上げた。次はいつあるかわからない。また、食事を作ってお話したいな。今度は、何作ろうかなあ。

　眠そうなウサ子をなんとか風呂に入れて布団に寝かすと、俺もどっと疲れが出た。あっと言う間の一日だったけれど、一日の時間はいつも通り流れていたらしい。

　俺も、死んだように眠っていたと思う。

　明日は実家に帰ろうと思った。連絡やっぱり忘れていたけど、多分大丈夫だろう。母さんも父さんも、多分家にいると思うし、息子に内緒で引っ越したりはしないだろう。

　で、ウサ子連れて暫くのんびりしてこよう。

　そういえば、俺が小さい頃、母さん女の子欲しいって言ってたような気がするし、ウサ子の事喜ぶかも。

嫁の前に孫が出来たよ

　翌朝、ウサ子と実家に帰る用意を始めた。数日分の着替えと、簡単な日用品。それから、道中のお弁当とお菓子を用意した。

　ウサ子は遠足みたいに喜んでいたが、またどこかで覚えたピクニックという言葉を連呼していた。ピクニックとはちょっと違うが、じいさん＆ばあさんの家に行くのは、子供からしたらちょっとした旅行だろう。

「ウサ子、これからじいちゃんとばあちゃんに会いに行くぞ」

　ウサ子は、首を傾げた。

「じいさあ、ばあさあ？」

「うーん、パパのママとパパの事だよ」

「パパのパパ？」

「そう」

「ママ？」

　あ、っと思った。せめてじいさんだけにしとけば良かった。ウサ子には、ママがいない。どうしよ。

「ウサのママは？」

　困った。

「ママは.....探してるから待ってね」

「ウサもさがす」

「ウサ子も一緒に探してくれるの？」

　ウサ子は俺に飛びつき、うんと返事した。

　マジで、これはなんとかしないといけないよな。

　ウサ子以前に、俺が泣きたくなる話なんだけど。

　ここから実家までは、モノレールで約１時間半くらい。ただ、実家のある場所は人間のために開発された都市住宅街だから、雰囲気も環境も古代風にいうと田舎ってやつらしい。ガーデニングで野菜や果物を栽培している人も多く、半分自給自足状態で作ることや食べることを楽しみながらのんびり暮らしている人も多い。

　うちの両親も例外ではなく、母さんなんかは時々ハガキで一緒に暮らさないかと誘ってくる。にしても、今時ハガキなのは何故なんだろうか。

　初めてのモノレールに、ウサ子は大興奮だった。それほど混んでもなかったので、ウサ子の靴を脱がせてイスに上がらせ、窓の外を見させていた。海や街の上を走る情景が、空を飛んでるように見えるらしい。目を輝かせながら、窓の外から目を離さない。

「パパあ、とりさんみたいやねー！」

「とりさん？」

「ウサ、とりさんー！　　お空びゅーん、びゅーん！」

「楽しいんだ」

「うん、たのしーねー。とりさんより、はやーねー」

　俺は鞄から、ウサ子のお菓子を出した。

「ウサ子、お菓子食べるか？」

「いい！　　ウサ、とりさん」

「とりさん、お菓子は？」

「おかしー」

　お菓子の箱を開けて、中から一つ取り出すと、それを見たウサ子はお菓子を欲しそうに見つめた。俺はそれをウサ子の前にチラつかせた。

「とりさん、とりさん。お菓子がやってきましたよ」

「びゅーん！」

　ウサ子は、ぱくりとお菓子にかぶりついた。

「ちゃんと座って食べて。まだまだ、長いよ」

「うん」

　お菓子を食べては外を見つめるウサ子。初めての旅行に、どきどきわくわくして楽しくて仕方ないみたいだ。

　行きのモノレール移動は、なんとか飽きずにいてくれたみたい。

　到着すると、駄々はこねなかったが少しだけ名残惜しそうな表情をしただけで大人しくついてきてくれた。

　駅から徒歩 10 分くらいで、実家に到着した。相変わらず、ボロすぎず綺麗すぎない当たり障りのない外観だ。強いて言えば、昔のマンガに出てきそうな家。

「あら、霞ちゃんじゃないの。珍しいねえ」

　振り向くと、隣のおばちゃんだった。おばちゃんも、もちろん人間だ。懐かしくて、嬉しくなる。

　おばちゃんは手に持っていたみかんを、俺に渡してきた。

「これねえ、うちで採れたのよ。お裾分けしようと思ってたから、あげるわね」

「お久しぶりですね。元気してました？」

「おばちゃん、いつも元気よ。にしても、霞ちゃんは大丈夫？　ロボットばっかの都会にいるって聞いたから。大丈夫なの？　ちゃんと食べてる？　病気や怪我してない？　なんか事件とか巻き込まれてない？」

　なんかの事件には十分巻き込まれているけど.....。

「大丈夫、元気だよ。元気じゃなかったら、これないっしょ」

「それもそうねえ」

　おばちゃんは、笑った。

「それより、その可愛い子は？」

　俺の後ろに隠れるように足にしがみつくウサ子を見ながら、おばちゃんはにっこりしながら問うた。

「色々あってなんですけど、俺の娘です」

　おばちゃんの息が、一瞬止まった。

「ふえええええ!!　そうかい、そうかい！　　む、娘っ！」

「あ、色々あって……なんですけど」

「お、おばちゃん、まだまだ先だと思ってたよ。こんな大きい娘がねえ。桜木さん、何も言ってなかったから」

「いえ、言ってないんで。経緯話すと長くなるんですよ。最近娘になったんで」

「連れ子かね？　　ところで、肝心の奥さんは？」

　おばちゃんは、きょろきょろ辺りを見渡した。

「いえ、いないです」

「いない！　　霞ちゃん、良い子なのにねえ、わかった。だまされたんだね」

　……なんだか、よくわからない方に話が進むんだけど。

「いや、そういうのじゃないんですよ。俺が引き取ったんです。この子が独りだったから」

　俺も説明が下手なので、どう説明していいのかわからない。

「そう、そうだったんだね。やっぱり良い子だねえ」

　今度はおばちゃん、同情するような表情になった。なんかよくわからないけど、面倒臭くなってきた。

　その時、玄関の引き戸の音がした。

「あら、前川さんと霞じゃないの」

　母さんだ。助かった！

「あら、奥さん。じゃあ、私行きますね。みかん食べてくださいね」

　母さんは、おばちゃんに深々と頭を下げた。

「いつも、ありがとうございます」

「母さん、ただいま」

　母さんは、にっこりした。

「お帰り。疲れたでしょ、とりあえず入りなさいな」

　母さんはウサ子にちらりと目配せしたが、直ぐには聞かずにまず家の中へと入れてくれた。

「お茶入れるわね。来るなら、先に連絡してくれたらよかったのに。母さん買い物に行ってないから、ロクな物がないじゃない。父さんだって、今出掛けてるし」

「いいよ、気にしなくて」

「そうも行かないでしょ。後でお留守番してて。買い物してくるから。で、その子は？」

「うん。俺の娘」

「……随分、大きいのね？」

　一瞬の間が怖い。

「うん、引き取ったんだよ。この子、親がわからなくて。俺がパパになったんだ」

　気のせいかな、母さんから安堵にも聞こえる息の音が聞こえた気がした。

「そう。安心したわ。けど、余計心配にもなる話ね」

　懐かしい、居間の座布団に座った。古ぼけた座布団は、今も健在。

　母さんはキッチンに入り、暫くしてお茶を持ってきてくれた。

「ジュースでもあればよかったんだけどねえ。名前は、なんて言うのかしら？」

「ウサ子」

「……誰が付けたの？」

「……俺……」

「あんたねえ、そのセンスの無い名前。可哀想だと思わなかったの？」

「男の俺に、女の名前付けた母さんに言われてもな」

　若干コンプレックスだったりするんだけど、この名前。

「だって、女の子が欲しかったから、女の子の名前しか考えてなかったのよ」

「事前に確認できるでしょ。性別なんて」

「男の子だってわかったら、出産への希望が持てなくなるじゃない」

「すみませんでしたね、男で」

「いいわよ。あんたはあんたで、大事な子供よ。けど、女の子も産みたかったわ。母さんね、二人目がどうしても出来なかった事だけが悔いなのよね」

　母さんは愛おしそうに、ウサ子の頭を撫でた。

「マーマ？　　ウサのマァマ？」

　ウサ子が、母さんに首を傾げながら言う。

「ウサ子ちゃん、ごめんね。私はウサ子ちゃんの、ママになれないわ。パパのママだから、ウサ子ちゃんのおばあちゃんね」

「ばあば？」

「そう、ばあばよ」

　ウサ子は、母さんの膝にちょこんと座った。

「でも、孫でも良いかもね。女の子がいるっていうのは。あんたも、思い切った決断したわね。これで、お嫁さんもまた遠くなっちゃったんじゃないの？」

親孝行しないとな

　母さんは、いつも俺の嫁さんの心配をする。この年になったら、当たり前かなと諦めてはいるけど、相変わらず胸は痛い。

「元々モテないし、半分諦めてはいるよ。それに、子持ちでも良いって言ってくれる人が今はいいかな」

「いいんじゃなくて、そうじゃなきゃだめでしょうが。あんたはもう」

「でも、なかなかいないでしょ。子持ちでもいいなんて人」

　母さんは、呆れた顔をしていた。

「まあいいわ。どんな形にしろ、孫の顔は見れたんだから。早くお嫁さん貰って、母さんを安心させてちょうだいな」

　母さんに言われなくとも、そうしたい気持ちはやまやまなんだけどね。

「で、今日はどうしたの？　　あんた、ずっとロクに連絡もしてこないし。ここんとこ顔を見せる気配もなかったのに」

「あ、うん。ウサ子のこと、黙っておくのもなあと思ってっさ。どんな形であれ、孫が出来たことに代わりはないんだし」

　と、ここまで言ったところで、玄関から声がした。

「ただいま」

　父さんだ。

「おかえり。霞が帰ってきてるわよ」

「おー、珍しいな」

　相変わらず、テンションのわからない声で返事をする父さん。

「ねえ、お父さん聞いてよ。霞ったら、孫なんか連れてきて」

「え！」

　初めて、テンションのわかる父さんの声を聞いた気がする。

「孫？」

　母さんが、父さんに大体の事情を説明した。父さんはどう反応してよいかわからないようで、無言のまま困惑した表情を浮かべ、居間で腰を下ろした。

「おいちゃんは？」

　ウサ子が、首を傾げながら父さんの顔をのぞき込む。

「パパのパパだよ。ウサ子のじいじだね」

「じいじ」

　父さんが、むせた。

「お父さん、動揺しちゃってるじゃない」

　クレームのような言い方で、母さんは俺に言う。

　そんなこと言われても。

　で、暫く妙な空気が流れた。

　口火を切ったのは、父さんだった。

「で、お嫁さんはまだなのか」

「う、うん」

「そうか。早く、見つかるといいね。この子の為にも」

「そうだね」

「霞、今日は泊まっていくんだろ？」

「あ、うん」

「いつ帰るんだ」

「決まってないんだけど、暫くいいかな」

　父さんは、にっこりした。懐かしい笑顔だった。

「親になるというのは、大変なことだろう。帰りたくなるまで、居たらいいさ」

　俺の胸が熱くなった。こんなに、ありがたいなんて思えたことあったかな。反面、恥ずかしくって顔を俯かせた。

　ウサ子と出会ってから、ロクな事がなかったのは事実だけども、ウサ子いたから頑張れたし楽しかったのも事実だ。けど、どっかで無理してたのかな。ただ、恥ずかしいだけで俯いていた目から、ぽろりと滴が落ちた。

「もう、この子ったら。父親にもなって」

　母さんの手が、俺の頭を撫でる。照れくさくて、懐かしくて、温かくて。安心した。

「母さん、ウサ子の事、頼むよ」

「もう、あんたが父親なんだから、母さんは手助けしか出来ないわよ」

　俺は、首を縦に振った。

「にしても、母さん女の子欲しかったから本当に嬉しいわ。あんたが女の子だったらしたかった事、いっぱいあったのよ。可愛いお洋服着せたり、ドレス作ってあげたり、お人形も作ってあげたいわね。それから、一緒におやつも作りたいわ」

　母さんが、いつになくウキウキして見える。

「母さん、楽しそうだね」

　一応、親孝行出来たのかな。

「母さん、お前が産まれるとき女の子の名前しか考えてなくてね。で、結局その時決めてた名前をお前に付けたんだよ」

　父さんが、苦笑い気味に教えてくれた。

「やっぱり、俺の名前。女の名前だったんだ」

　俺も、少し呆れた。

「でも、ああは言ってるけど。母さん、お前のこと本当に溺愛してたんだよ。そこは、わかってやって欲しいな」

「うん、俺もわかってるよ」

　だからこそ、疲れた俺が母さんに会いたいって思ったんだと思うし。

　ウサ子は、すっかり母さんに懐いた。母さんに抱かれながら、きゃっきゃと笑っている。

「じゃあ、ウサ子ちゃん連れて買い物でも行こうかな」

「ウサ、かいもの、いくー！　ばあばと」

　ウサ子も楽しそうだ。楽しそうでよかったが、ちょっと悔しい気もする。

「霞、あんたは少しゆっくり休んでいなさいな。疲れてるんでしょ。育児、もたないわよ」

　母さんには、なんでもお見通しらしい。

　さすが育児経験者と言うべきか、実家にいる間、俺は父親の顔だけしてればよかったから、本当に楽でありがたかった。

　が、事件は突然起こるのである。

　当初は３日くらいしたら帰るつもりでいたのだが、なんだかんだで１週間も滞在してしまっていた。

　１週間目のこと。母さんが、１枚の写真を手にしていた。古典的といえば、古典的な産物。で、それを俺に見せながら言う。

「あんた、帰る気もなさそうだし、お見合いでもどう？　この子」

「はあ？　なに勝手に決めてんだよ」

　思わず大きな声が、出てしまった。

「そう、興奮するんじゃないの。決まったじゃなくて、お見合いしてみたらどう？　　って、提案しただけじゃないの」

「いいよ、そんなん写真持ってきたら一緒のことだし。第一、俺そういうの乗らないよ」

　ただでさえ、恋愛が下手な俺が、恋愛しますよという気持ちで恋愛出来る筈がないと思う。ましてや、相手もそういうつもりだと思うと断り辛くなってしまい、最終的には誰も幸せになれない気がするのだ。

「なあに、好きな子でもいるの？」

　母さんの一言に、俺は真っ先に満嗣さんを思い浮かべた。

「そうじゃないけど、苦手なんだよ。マジで」

　母さんが、無理矢理渡してきた写真を見た。見て、直ぐ返した。見たと言うより、見えた感じ。

「見た？　　悪い子では、ないでしょう」

　おそらく母さんは、ルックスの事を言っているのだと思う。

「悪い子かどうかまで、写真じゃわかるわけ無いよ」

　緩やかな笑いを浮かべた、ごくごく普通の子だった。特別な特徴は見当たらない。

「人間の子よ。悪くないでしょ」

　そして、納得した。

「本当、無理だからさ。断っといてよ。それに、俺明日帰るよ」

「まあ、帰るのも突然なのね」

「言うの忘れただけだし」

「……そう、仕方ないわね」

　母さんは、しょんぼりした。ちょっと、罪悪感を感じてしまった。

　本当は、もう暫く居たかった。甘えたかったのだけど、お見合いなんていう面倒事は、まっぴらごめんである。母さんには悪いし、俺も名残惜しくはあるが、ここはそそくさと退散するのが一番だと思った。

「ねえ、霞。またいつでも、顔出しに来なさいね」

　母さんはぽつりと呟いて、キッチンに入っていった。暫くすると、包丁の音がした。包丁の音も、帰ったら聞けなくなると思うと寂しいな。

「なあ、ウサ子。また、ばあばとじいじに会いにこような」

　ウサ子は笑う。多分、まだ何のことかわかってないから。

「うん。じいじもばあばも、だあいすきー」

　翌朝、身支度を済ませて家を出ると、母さんも父さんも駅まで見送りに来てくれた。

　そこで初めて状況を理解したウサ子が、わんわん泣いた。

「ばあばも、いっしょにかえるのおおお〜！」

「あらあら、ウサ子ちゃん。また来てね。パパを困らせちゃだめよ」

「ばあばあああ〜」

　そこで、俺も初めて理解した気がした。母さんを祖母ちゃんだと伝えても、教えても、母親のいないウサ子にとったら、母さんはウサ子の母親みたいなものかもしれない。やっぱり、早く母親をみつけてやらないといけないんだろうな。

　自分のわがままを通さず、ウサ子のために、お見合いを受ければよかったのかな。

　いっそ、満嗣さんに告白して……。

色々諦めるとき

いっそ満嗣さんに告白して、フラれたら実家に帰るとかどうだろうか。

多分、フラれるんだろうけど。

そうしたら、ウサ子も育てやすくなるし、俺もウサ子も楽になるんじゃないかな。

この都会は、人間が暮らすには少々厳しすぎるのも確かだ。

それに、なにより、そうなれば未練もなくなる。

ようし、決めた！

俺は、満嗣さんに告白するぞ！

で、男らしく、当たって砕ける！

帰ったら今日残りの一日は、満嗣さんに悔いなく告白して、未練無くフラれる計画を立てよう！

＊＊＊＊＊

10 日振りくらいに、桜木霞から連絡があった。私が食事をご馳走してもらった直ぐ後から、暫く実家に帰っていたそうだ。

私自身も少々溜まっていた仕事を片づけるのに精一杯だったので、あれからもう 10 日も経っていたことに驚いたくらいだった。

あいつにしては珍しく、たわいもない内容の電話だった。別にそれは構わないし、自分でもわからないけど、何故か嬉しく思えたのは事実だ。

少し厄介な事件の被害者。それでももっと厄介な事件は幾らでもある。ただ、それだ

けの筈なのに。記憶をチラつく顔によく似ている、というのが始まりだっただけなのに。妙に気になって仕方ない。

「そう、ゆっくり出来たならよかったじゃない。たまには息抜きも必要よ。私は、忙しくてね。ここんところ。休む暇もないわ」

　笑っては見せたけど、それが妙にむなしく思えた。

　経過した時間を数字にして、その間仕事しかしていなかったことに溜め息が出た。

　聞こえるような溜め息を吐いたつもりなどなかったけれど、あいつには何かが聞こえたようだった。

『どうか、されました？　　やっぱり、ご迷惑でしたよね』

　電話の向こうの、気を使うような声が辛い。

「あ、うん。そう見えるなら、疲れているのよ。そういえば、私にしたら唯一の休息ってあんたと食事したときかもしれないな。あんたの手料理、本当美味しかったわ」

『そうですか、よかった。あの、調子に乗ってる訳ではないんですが.....もしよかったら、またどうですか？　　今度は、リクエストの料理作って待ってますので』

　思わず、笑みがこぼれた。

「そうね。今度は、カレーがいいな。私ね、カレー好きなのよ。久しぶりにシーフードカレーなんか食べたいと思うんだけど.....出来る？」

『もちろん！　　腕によりをかけて、作りますよ』

「じゃあ、明日。いいかな」

『はい』

　あいつは、嬉しそうだった。手間とか、迷惑だとか思わないのかな。つい、明日なんて言ってしまったけど.....楽しみだ。

＊＊＊＊＊

　満嗣さんへの覚悟と、意を決した気持ちでどうにかこうにか約束を取り付けた。

　満嗣さんは、何か察してくれたんだろう。小さな溜め息にも似た様子が電話越しに伝わったのだけど、優しく気持ちを汲み取ってくれたようで、しかも明日来てくれるという。

　早い方がいいなんて思ったのだけれど、こんなに早くなるとか、流石に俺も少しばかり動揺した。

　終始応援してくれていた、篠山さんにも礼儀として報告くらいはしたい。同じ人間だというのもあるけれど、せっかく知り合った人なので、実家に帰った後も出来ればお付き合いは続けて行きたいと思う。

　あと、なんだかんだ言って圭介にも報告しなくちゃ。ここ数ヶ月、一番世話になったのはあいつだし、子供の頃から当たり前のようにつるんで居た仲だし。

　失恋＆引っ越しパーティくらいはやりたいなあ。パーティといっても、３人だけだけど。

　俺は、篠山さんに電話した。

＊＊＊＊＊

　暫く実家に帰ると連絡をもらって以来、だから約 10 日振りくらいだと記憶する。

　毎回思うのだが、心底、間抜けにもお人好しな人間だ。

「随分、ごゆっくりされたんですね」

　仕事も無く、毎日育児だけしてればいいのだから、何かと実家の方が便利に決まっている。彼は、照れたように笑っていた。

『ええ。２～３日のつもりだったんですが、つい母に甘えてしまって。長いしてしまいました』

「やはり、実家の方が何かと楽でしょう。それに、お母様は、桜木さんという立派な子を育てた経験がおありですしね」

『いやあ、やぱり母の手際はよかったです』

　そんな感じでたわいもない話をしていたのだが、くだらなさすぎて入ってこなかった。

　それから、肝心な話になった。

『それで……篠山さんの予想通り、俺やっぱり、み、柏木警部のことが好きみたいです。それで、俺の中で決心が決まりましてね。次、柏木警部に会うとき、告白しようと思うんです。それで、フラレれたら実家に帰るつもりです。やっぱり、俺一人で育児するより心強いですし。それに……』

　桜木さんの言葉が止まったが、何かを言いたそうにしているのを感じたので、そのまま聞くことにした。

『それにですね、母がお見合いの話を持ってきたんです。そういうのもありかなっと後から思ったんで……いえ、今回は断ったんですけど。なんで、未練がなくなればウサ子の為にも色々前に進めるんじゃないかと思ったんです』

　自分の中で、込み上がる笑いをぐっとこらえた。

　人間とロボットの恋……沢山居るけど、自分からしたら滑稽以外の何でもない。

「そうなんですか。やっと自分の気持ちに気が付いたんですね。それはよかった」

　精一杯、偽善を装う。

「でも、まだ諦めるのは早いですよ。可能性を捨ててしまっては、もったいないですから」

『そうですかねえ』

「そうですとも。で、次はいつ？」

『明日です』

「へえ。積極的じゃありませんか」

『向こうから、明日空いてると言ってくれて。多分、気を使ってくれたんだと思うんですけど』

　桜木は、たいそう自信なさげに呟いた。

「あまり、悪くは考えすぎないで」

　嬉しさと不安が、シーソーゲームしているといった具合だろうか。

　そろそろ、例の実験を動かす準備に取りかかるべきではないだろうかと。

　桜木と柏木が、付き合おうが付き合わなかろうが、自分にはどうでもいい。それをきっかけに、柏木に幼女ナノマシーンンとの接触の機会を設けたかっただけだから。

　そろそろ、柏木の体内に十分なナノマシーンの一部が蓄積される頃だと思う。

＊＊＊＊＊

　篠山さんは、妙に応援してくれるけど、俺としては１％も期待していないだけに、少々胸が痛かったりする。

　篠山さんの後に、圭介に電話をした。最初は繋がらなかったものの、いつも通り暫くしてからの折り返しがあった。

　ことの説明をすると、圭介は冷静にも寂しそうな声で会話を繋げた。

『そっかー、霞ちゃん。そう、決めちゃったんだ。でもさ、その方が霞ちゃんにとったら幸せかもしれないよね。あと、ウサ子ちゃんにとっても』

　圭介の物解りのよいというか、もっともな反応に、俺は少しばかりあっけらかんとした。

『ん？　　どしたの？』

「いや、もっと色々言ってくるかと思って。妙に納得して、賛成してくれるから拍子抜けしちゃって」

　圭介は、笑った。

『そりゃね。子供の時から、霞ちゃん見てるもん。それに、やっぱりここは人間には暮らしにくいと思うよ。霞ちゃんの実家がある都市って、人間のために開発された場所じゃん。周りも人間ばかりだから理解もしてもらえる。やっぱり、人間は限界も多いから、助け合って生きていくのがベストだと思うよ』

　そんなこと、改めて言われなくても解ってることだ。

　それでも、なぜだろう、どこかでロボットに、ロボットのような生活に憧れていたんだ。けど、どんなに頑張っても所詮人間は人間だった。現に、仕事に就けないまま今もいる。

　仕事、してみたかったな。

ロボットも人間も心は同じ

　満嗣さんのリクエスト、シーフードカレーを作った。

　メインの具材となるシーフードは、冷凍の安物なんか使わず、生のものを用意した。エビも殻を剥いて背腸を抜いたし、イカも綺麗にした処理して、貝も一度軽く茹でてから、殻を取り除いた。

　食べやすい美味しい、自信のカレーだ。ただ、ウサ子の為に味は甘口にした。もし満嗣さんが辛いのが好きだったらがっかりするだろうから、別に調節用のスパイスを用意した。

　他にサラダとスープも作ったし、デザートにババロアも作った。

　ウサ子は、味見を兼ねて小さなババロアを先に食べた。美味しいと甲高い声を上げたので、きっと満嗣さんもよろこんでくれるはずだと思う。

　夕方になって、満嗣さんが来てくれた。ドアのチャイムが鳴って玄関を開けて。その時の俺の顔が、満嗣さん曰く面白かったらしい。

「なんて、間抜けな顔して出てくんのよ」

「あ、え。あ、郵便かと思って」

　正直なところ、こんなに早く来てくれると思ってなかったので、拍子抜けだった。

「今日、食事に来るって言ったじゃない。遅くなったら、迷惑だと思ってね」

「ありがとうございます」

　俺は、満嗣さんに中へ上がってもらった。

　食事の支度は出来てはいるが、正直夕飯にはまだ早いような気がする。

　満嗣さんに目配せすると、彼女は両手を天井に向けて伸びをしていた。ちょっとだけ、砕けた顔が見えた。

「あーん、疲れた。ここんとこ、ずっと缶詰状態だったから」

「え？」

「あ、お風呂は入ってるわよ。シャワーだけど、署にあるもの」

「いえ、そうではなくて。そんなに働きづめだったんですか？」

「そんなに、働きづめだったんですよ」

　満嗣さんは、小さなソファーにどかりと腰を下ろした。

「早めに来たものの.....夕飯には、まだ早いわよね。お茶淹れてくれる？」

「ダージリンとカモミールとありますが.....あ、あとコーヒーもありますけど、どれにします？」

「そうね、カモミールにしようかしら」

　俺は、ポットにカモミールのハーブティーの葉とお湯を注いだ。カモミールの優しい香りが、狭い空間に広がる。

　ふと気付いた。心臓が、少なからずドキドキと言っている。この時間も、きっと直ぐに終わってしまう。食事が済んで、お別れを言って、気持ちを伝えて.....そしたら、本当のお別れが.....。

「ねえ、どうしたの？」

　はっとした。満嗣さんの声がした。

「あ、じっくり蒸らした方が美味しいんですよ」

「そうなんだ。にしても、あんた偉いわよねえ。私なんてさ、ティーパックのお茶しか淹れないもの」

「お忙しいですから、良いと思いますよ」

「うちにも、おしゃれなティーカップセットがあるのよ。結局、１回しか使ってないかも。なんか、洗うのも面倒でね」

「へえ、お茶お好きなんですね」

「うん、好き」

　ドキっとした。なんだろう。

「あ、顔赤いよ」

「緊張して」

「そう」

　俺は、震える手元を気付かれないよう隠しながら、カモミールティーをカップに注いだ。

「どうぞ。なにか、いります？」

「うーん。もうすぐご飯だから、いいや」

　俺はウサ子にオレンジジュースを与え、俺も満嗣さんと同じカモミールティーを口にした。いつも飲んでるものなのに、なんだかとてつもなく美味しく感じる。

「ふう、やっぱり美味しいなあ」

「また、淹れますよ」

　もうないかもしれない約束をした。

「今度は、うちに来て淹れてよ」

「はい」

　果たされないかもしれない約束は、胸が痛い。

　ふと、満嗣さんの膝の上の衣類が目に入った。年期の入ったマフラーといつもの上着。マフラーは古い上に、ファッション、というか彼女には不似合いに見えた。今まで、持ってたかな？

「満嗣さん、そのマフラー随分大事にされてるんですね」

　満嗣さんは、苦笑いを浮かべた。

「ボロボロで、汚いでしょ。でもね、これ宝物でお守りなんだ。事故の時、唯一の私物だったって聞いてるのよ。だから」

「いつも、着けてましたっけ」

　満嗣さんは、首を左右に振った。あんたしか、こんなの持ってること知らないよ。なんだろうね。気持ちが落ち着かないときは、これを持って出かけるの」

「なにか、あったんですか？　　あ！　　俺襲ったりとかしないんで、安心してください」

　満嗣さんのデコピンが、俺を後ろに軽く弾いた。

「あんたなんか、心配してないわ。そうじゃない。あんたの、全然進まない事件に毎日悩まされてるってこと」

「結局、俺じゃないですか」

「まあ、そういうことね」

　俺は立ち上がった。

「俺に出来るのは、ご飯を作ることだけですね。それも含めてお詫びのカレーをどうぞ、お楽しみください」

「はーい！」

「あーい！」

　満嗣さんの声のあとに、ウサ子も声を上げた。

「ウサ子、なんのことかわかってるの？」

　ウサ子は、首を傾げてから

「ウサもね、カレーたべる」

　と、ふふふと笑った。

「ウサ子ちゃん、かしこいのね。そう、カレー食べようね」

「カレーたべる。ウサ、かちこいの」

　ウサ子は、照れていた。

　サラダとスープを並べ、最後にカレーを配った。

「すごい、本格的じゃない。冷凍のシーフードミックスじゃない」

「勿論ですよ！　腕によりをかけて、作るって言ったでしょ」

「いただきます」

「いららきましゅ」

「どうぞ、召し上がれ」

　カレーを口に運ぶ満嗣さんを、こっそり見ていた。すると、気付いたのか彼女は目線だけ俺に向けた。

「今まで食べたカレーの中で、一番美味しいわ」

「よかったです」

　俺は恥ずかしくなって、カレーをかきこんだ。

　満嗣さんも引き続き食べていると思ったのだが、照れ過ぎてドキドキする心臓を落ち着かせようと深呼吸してから再びふと彼女の方を見たら、満嗣さんは頬杖を付きながら俺を見ていた。

　思わず、噎せた。

「ど、どうしたんですか？　もう、お腹一杯とか？」

　にしては、あれから殆ど量は減っていないので、２、３口しか食べていないのだろう。やっぱり、口に合わなかったのかな。少ししゅんとした。

　すると、満嗣さんは思わぬことを口にした。

　関心したように言う。

「一緒に居ると、本当に親子みたいになるのかな。ウサちゃんと、本当の親子みたい」

　満嗣さんの目には、どんな風に映っているんだろう。

「本当の親子だって思ってるんですけど、その思いが現実になったんですかね。だとしたら、うれしいですけど」

「そうかもね。ウサちゃんの学習機能だけじゃなくて、ちゃんと愛情も伝わってるってことかもしれないわね。私も経験してるから、なんとなく解る気もするわ。なんて言うのかな.....心が、繋がるのよね」

「俺の勝手な考えなんですけど。心って、人間もロボットも平等にあるものだって思うんですよ。人間だって優しい人もいれば、冷たい人や意地悪な人、親切な人もいるように、ロボットも同じように優しい人や親切な人だけじゃなくて、冷たい人や意地悪な人もいるんですよ。プログラムで制御出来るっていいますけど、学習プログラムで少しずつ変わっていくっていうし。その学習プログラムっていうのが、心を作ってるって思うんですよ」

「学習プログラムね。人間の脳と同じ機能を開発するために生まれたプログラムが、心と繋がるって訳か」

「俺には教養も頭もないんですけど、そう思うと人間とかロボットとか言っても結局はみんな同じ人類なんじゃないかって思うんですよ」

「そうよね、ロボットだって人間と同じような感情を持ってるものね。愛情も喜びも痛みも悲しみも。ただ器が違うだけ」

　あんた、良いこと言うじゃない。と満嗣さんは笑ってくれた。

大切なもの、大切なこと

　案の定、満嗣さんとの食事の時間は、あっと言う間に終わってしまった。

　美味しいと言ってくれたデザートのババロアも、食後のコーヒーも俺には味気ないものだった。

　ただ、苦しい、切ない気持ちだけが胸を締め付けるよう。時間だけが流れていくように思えた。楽しくありたいのに、どうしてもあれなくて。最後なのに.....きっと、多分最後なのに、俺は本当に罰当たりだ。

＊＊＊＊＊

　あいつの名前、なんて呼んでいいんだろうか。などと、ぼんやり考えた。玄関のチャイムの前で、ふと指を止めて、あいつとかあんたとかカモノハシだとかそんな呼び方しかしてなかったことに気付く。

　桜木？　霞？　なんかそれもなあ。

　やっぱり、あいつはあいつで、あんただ。あいつは、カモノハシに似てる。いわゆる、癒し系ってやつかな。最初は間抜けって意味だったけど、今ではすっかり私の癒し系。

　どうでもいい事を一通り考えたら、よしっと気持ちを決めてチャイムのボタンを押した。

　暫くして、足音と共に無防備に扉が開けられた。

　おいおい、そんなに無防備に開けたら危ないわよ。と呆れたけれど、扉の向こうの間の抜けた表情に思わず笑ってしまった。

　どうやら、私を宅配便と間違えたようだ。

「思っていたより、早かったので」

　そんなに早かったかなあ、とも思ったけれど、ここ数日泊まり仕事だったので、時間の感覚がずれてしまってたようだ。

　事故で人間だった時の記憶が殆どないものの、その感覚だけは脳がきっちり覚えているようで、時々身体と脳が混乱するかのような違和感を覚えるのは未だになくならない。人間からロボットになった人間にはよくあることで、それが不便だと言う人も居るようだが、私は自分が人間だったと思い出せる大事な名残だと思っている。

　お腹が空くという感覚はない。

　食べなくても生きてはいける。

　食べることが趣味になった今となっては、いつ食べるかという楽しみは失ったも同然なのだが。

　疲れすらない私の身体。

　けれども、あいつに私は疲れたと嘘を吐いた。

　疲れたってなんだったっけ。きっと、今みたいな事を言うんだと思ってる。

　人として、私が落ち着ける瞬間が欲しいとき。

　そんな時にいつも巻く、古いマフラーと同じにおいを感じた。

　私の大事なマフラーと、あいつも、私にとっては同じ感情を与えてくれる貴重な存在なのかもしれない。

　あいつの作ったカレーは、とても美味しかった。優しい味がした。暖かい味がした。一生懸命作ってくれたんだろうな、と思ってふと見上げると、向かい合わせに座ったテーブルの向こうで、不安そうにあいつが見ていた。

　カレーの感想を月並みな言葉で伝えると、あいつは照れたのか不自然にカレーを食べ始めた。

　それを見たウサちゃんも、真似してカレーを一気に食べようとしていた。

　ふと、このちっちゃなレディが羨ましく思えて、思わずいいなあなんて眺めてしまった。

　そしたら、それに気付いたあいつが、心ってやつについて語りだした。

　それが、悔しいくらい素敵だなと。やっぱり、月並みな言葉しか言えない自分が悔しいのだけど。

　その後、デザートを頂いたのだけれど、それもすっごく美味しくて。

　料理の美味しさもだけど、それ以上に一生懸命作ってくれたことが嬉しい。

　プログラムは、毒にも薬にもなると思う。

　あいつが言うように、心にもなれば、悪にでも善にでも変わるし、当たり前や特別の区別でさえ簡単だ。

　私が警察になって、市民のために尽くす事は、当たり前だから感謝されない。プログラムでそうなっているし、警察になるロボットの大半の理由も正義感や理想のためだったりする。それすら、誰かのプログラムかもしれないし、何かで学習されたプログラムの影響なのかもしれない。

　だから、私自信も感謝されるとは思ってもいなければ、期待だってしていない。

　故に、私も仕事としてこなすだけ。ただ、淡々と。それが、当たり前になっていたのに。

「満嗣さんには、本当に感謝してるんです」

　なんて言う。感謝される喜びを、あいつは教えてくれた。

「私は、感謝されることなんてしてないよ。それが、仕事だからさ」

　と言うと、あいつは決まって必ず悲しそうな目をするのだ。

「満嗣さんには仕事でも、俺は感謝してますから。勝手に感謝させてもらってます。満嗣さんは、気にしないで」

　私の胸は、ちくちくと痛む。

　食事は食べ終わったが、私が早く来すぎたので、時間はまだまだ早かった。

　帰るのも寂しいなと思っていたら、あいつがコーヒーを淹れてくれた。

「あの、こんな狭苦しい生活感丸出しの落ち着かないところですけど、もしよかったらゆっくりしていってください。出来る限りのおもてなしは、しますので」

　私は、笑ってしまった。

「なあに、ホテルみたいなんだけど」

「こんな、汚いホテルありますか。相当、お疲れの中来て頂いたんで少しくらい、ゆっくりしてもらえたらいいなって思ったんですよ」

「ありがとね。もう、ゆっくりしてるよ。寝ちゃいそうなくらいね」

　ロボットでも、うとうとした気分になるときくらいある。ここは、落ち着く。あいつの隣は、妙に落ち着くのだ。

　あいつが、ふと何か言い掛けたときに、インターホンが鳴った。

　誰よ。

＊＊＊＊＊

　食事を終えると満嗣さんを、一旦ソファに誘導した。小さいけど、ソファの方がゆっくりできると思うし、このまま帰ってもらうには名残惜し過ぎるのが正直なところである。

　それを誤魔化すフリをしながら、コーヒーを淹れてわざと引き延ばそうとした。

　我ながら、せこいとは思う。

　せこいついでに情けないのが俺らしく、ソファに誘導したものの上手く話題すら掴めずで、何度も口にした台詞しか出せなかった。

　満嗣さんに、感謝している事を伝えると、いつもクールにかわされてしまう。今日もそうだった。けれど、いつもとは少しだけ違って、ちょっとだけ照れたように笑ってくれた。

「私こそ、感謝しなきゃね。ただ、仕事してただけで、それが当たり前だって思ってたから。なんか、照れちゃうな。どうして良いんだろ、私」

　好きだって伝えたら、なんて言われるんだろうか。

　きっと、冷たい目で俺を見ながら身の程知らずと答えるんだろうか。

　それとも、笑って流されて、帰るねって永遠にさよならされるんだろうか。

　それとも、はっきりごめんなさい。が聞こえるんだろうか。

　いずれにせよ、もう決めたことだ。

　このどれかが返って来ることは予想が出来るのだから、今のうちに覚悟はしておこう。というか、十分覚悟してきたはずだ。弱気になっていても仕方がない。

　俺は、大きく深呼吸した。

　満嗣さんの名前を呼ぶと、彼女は俺の方を見た。最後かもしれない、自然な表情。

　そして、言おうとしたところで、インターホンが鳴った。

「誰かしら？　宅配便？」

　俺より先に、満嗣さんが玄関の方を見ながら呟いた。

「あ、そうかも」

　何か届く予定はないのだけど、あるとしたら実家からの何かだろうか。

　にしても、このタイミングで来なくてもいいのに。

　無意識に溜め息が落ちる。

「すみません、ちょっと見てきますね」

「うん、気にしないで」

　俺が玄関のドアを開けると、その向こうに立っていたのは篠山さんだった。

「あ、すみません。お邪魔……でしたよね」

　篠山さんは、苦笑いを見せた。

邪魔でしたよ！

思いっきり、邪魔してましたよ！

とは言えず、俺は外に出て満嗣さんに聞こえないよう玄関の扉を閉めた。

「今、丁度来てて……これから決めようと思ってたんですよ。どうされたんですか？」

男を見せろよ！

「それなんですけどね。桜木さんを応援するために、私が少しの間、ウサ子ちゃんを見ててあげようかと思いまして。どうですか？」

　にしても、篠山さん。突然来なくてもいいだろうに。

「と、言われましても。流石に篠山さんが居る前で言うのはちょっと.....」

　ウサ子は幼児だから、まだいい。けど、篠山さんに聞かれるのは恥ずかしすぎる。ただでさえ、本人に伝えるのにこれだけ勇気がいるのに、罰ゲームでしかない。

「桜木さん、そんなの外出するに決まってるじゃないですか」

「篠山さんとウサ子が？」

　篠山さんは、呆れた顔で溜め息を吐きながら、俺の肩に手を掛けた。

「なにを言ってるんですか。柏木警部と桜木さんがに決まってるじゃないですか。いいですか、大人の男なんですから、おしゃれな店でビシッと決めてくださいよ」

「おしゃれな店.....ですか？」

「いいですか、おしゃれな居酒屋とかじゃないですよ。ラウンジ、バーとかでです」

「は、はあ」

　俺は圭介に連れられて、一度だけ行った事のあるショットバーを思い出した。暗い空間にろうそくの炎が揺らめく、渋めのマスターが上品にシェイカーを振るアレだ。

　確かに、満嗣さんには似合うだろうが.....。

「俺には似合いませんよ？」

「そんなの、雰囲気でどうとでもなります！　店とか、解ります？　リサーチしてないでしょう」

「リサーチはしてませんけど、友人に連れていってもらった事のあるバーでしたら、覚えてます。多分、篠山さんのイメージに近いと思います」

「じゃあ、今から準備してください。柏木警部を誘いたい店があるので、そこに行くために友人にベビーシッターを頼んだと言えばいいので」

「は、はあ」

　篠山さんは、案外強引だなと思った。

「言っときますが、私に気を使わないでくださいね。早く帰らなきゃいけないとか、そういうことはやめてください。朝帰りでも、明日の昼帰りでも、もういっそ２、３日帰らなくても全然かまいませんので！」

　それは、流石に.....。

「そんなに家を空けて、俺は何処に行く気ですか！」

　意外ととんでもない発想をする人だ。

　俺は、篠山さんの助言通り進める事にした。

「遅かったね。宅配便じゃないみたいね」

「あ、そうなんです」

「大丈夫なの？」

「はい。そのことなんですが、満嗣さんをお連れしたい場所がありまして.....よかったら、これからどうですか？　　奢りますんで」

「ん？　　良いけど.....」

「で、ウサ子の事なんですが。実は、今来てくれてるのが友人で。子供、入れない店なので。友人が、見ててくれることになってて」

「そ、そーなんだ」

　そっと、篠山さんが入ってきた。

「お邪魔します」

　篠山さんを見た満嗣さんの表情が、いぶかしんだ。

「あなた……篠山……」

「あ、似てるってよく言われますし、たまたま名字も同じなんですけど、あの有名人と違います。名前は太一です」

「そ、そう。本当によく似てますね」

「私が本人だったら、こんなところにいませんよ」

　篠山さんは、笑っていた。

「せっかくのデートですから、ゆっくりしてきてくださいね。ウサ子ちゃん、おじさんと遊んでようね」

「パパは？」

「少しだけ、お出かけ」

　ウサ子が、ぷっと膨れた。

「ウサも」

　けれど、篠山さんはポケットから小さな人形みたいなものを取り出した。

「ウサ子ちゃん、一緒に待ってようね」

「……うん」

　あの人形みたいなものが、気に入ったのかな。ウサ子は、おとなしく頷いた。

「大丈夫……みたいね。でも、いいのかな？」

　満嗣さんが、申し訳なさそうに言った。俺もなんだか、罪悪感を覚えた。

「あの、篠山さん。やっぱり、俺……」

　言い掛けた俺を止めるように、そして俺と満嗣さんを追い出すように押しながら、篠山さんは声を上げた。

「せっかく私が来たんですから、気を使わないでください。桜木さん、いつもお世話になってるお礼だとでも思って。さあ、楽しんでいらっしゃい」

　俺たちは、マンションから出るしかなく。

　外で２人して、今し方追い出されたばかりのマンションを見上げて笑った。

「追い出されちゃいましたね」

「そうね。まあ、こうなったら、あんたの奢りで、その店にでも行きましょーか」

「そうですね」

　あの時、終わるはずだった時間を少しだけ延ばしてくれた篠山さんに、少しだけ感謝した。

　満嗣さんは行きつけだと思ってるかもしれないけど、俺は圭介に連れられて来たので一回だけ。

『男同士で来ても、なんだかつまんないね。でも、霞ちゃんもさー、いざって時のために、こういうお店の一件や二件、知っておいた方がいいと思うんだよねえ』

　と言っていたが、そのいざって時が今でしょ。ということで、当時の俺からは考えられないシチュエーションが今目の前に現実として起きている。

「あんたにしては、おしゃれなとこ知ってるじゃないの」

　と、満嗣さんの言葉がプレッシャーのように刺さるのだけれど。

　さて、なにを注文しようかと思ったのはいいが、カクテルに詳しくないので、一番最初に思いついたモスコミュールを注文した。満嗣さんは、ジントニックを注文していた。案外、定番で少し安心した。

「プライベートなんだしさ、ちょっと個人的な会話してもいいかしら？」

　最初に話題を振ってくれた、満嗣さん。そして、情けない俺。せっかく、こんな店に誘ったのに.....スマートの出来ない。猫に小判、豚に真珠状態だ。

「はい」

「彼女、いないのよね？　つくらないの？」

　どきっと、した。よくよく考えれば、知り合って直ぐの友達との会話ではあるあるの内容なのに。

「いません。で、きませんよ。俺、かっこよくないし、たくましくもないし。良いとこないですから」

「ふうん。そんなこと、ないと思うけどな」

　再び、どきっとした。そして、ふと思い出した。

「あ、ウサ子の母親の事は考えてますよ。母からお見合いの話だってされましたし、今回は断りましたけど。俺、今回の帰省で実家に帰ろうかとも考えてるんです。それで、ちゃんとお見合いしてお嫁さん貰うのもありなのかな、と。例えばの話ですけど」

　テンパリすぎたものの、こんな話を今から告白しようと思っている相手にすべきではなかったと、今日一番の後悔をした。

「そ、うなんだね」

　満嗣さんの言葉が、詰まって聞こえた。

「そうなったら、寂しくなるね」

「そう思って頂けて、光栄です」

　モスコミュールのアルコールが少し強かったのか、ちょっとだけくらっとした。

「あんた、酔った？」

「あ、ちょっと」

　こんなんで、酔うはずないんだけどな。緊張のしすぎか。

「程々に、しなさいよね」

「あ、はい。一杯だけにします」

「それが良いわ」

　重ねて、情けない。

「なんか、俺。しょぼい男ですよね。満嗣さんに、出会った時から情けない姿しか見せてないし.....なんて言うか、本当に情けなくて涙出ますよ」

　酔った勢いなのはわかってるんだけど、酔ってるから止められない自分が出た。

「そりゃ、あんたが情けなくてしょぼいのは認めるけどさ」

「やっぱり」

「私は、嫌いじゃないよ」

　やっぱり、と繰り返そうとして、言葉に詰まった。

「だってさ、あんた。優しすぎるから」

「そうですかね」

「お人好しで、優しくて。一番大事なとこ、普通の男の何十倍も持ってんじゃん！　だからさ、自信もちなさいよ」

「自分では、わかりませんけど」

「それが、大事なんでしょ」

　満嗣さんが、仕方ないやつ、と言いたそうな表情で笑うのがろうそくの明かりの中に見えた。

　言わなきゃな、好きだって。伝えなきゃ。

君が死んだら、俺も死ぬ

　考えてもみたら、ディナーの時にシャンパンを飲んでいた。

　酔いが回ったせいで少しぼんやりしながら、会計を済ませて外に出た。

　俺が飲んだのは、モスコミュール１杯。満嗣さんは、ジントニックとムーンライトを飲んでいた。俺に遠慮したのか、その２杯だけだ。

「俺に気を遣わなくてもよかったんですよ。もっと、飲んで貰っても」

「そういうつもりじゃないわよ。どんなに飲んでも酔わないもの、楽しめたらそれでいいの」

　たわいもない雑談をして、気付けば日が変わりそうだった。

　俺は、途中まででも彼女を送ろうと一緒に歩きだした。満嗣さんは部下に送って貰ったらしい。帰りはタクシーだと言っていた。タクシーが拾える場所まで、歩くことにした。

　外の空気は、少しひんやり感じた。人工なんだろうけど、都会で不自然に光る星は相変わらずだった。

　タクシーを拾うために歩いた路地を抜けて、再び路地に入ると小さな公園があって、その先を抜けると大通りに出る。大通りは眠らない都会を象徴するかのように、ネオンと人と自動車が昼間と変わらず行き交っている。

　夜を意識させるのは、あの公園を過ぎた路地くらいまでだろう。

　まだ勇気を出せない俺は、公園でふと足を止めた。

「あの、最後にコーヒーでも飲みませんか？　　俺買ってくるんで、公園ででも」

　満嗣さんは頷くと、無言のまま公園に足を向けた。

　俺が急いで自販機で缶コーヒーを買って戻ると、すっかり寂しくなった公園のベンチに座る満嗣さんが居た。

　俺が缶コーヒーを差し出すと、彼女はそれを受け取ってくれた。

　満嗣さんが礼を言ってくれる前に、俺は告げた。

「好きです」

　と。他に色々考えたけど、シンプルにその４文字しか言えなかった。

　満嗣さんは、無言で立ち上がって俺を見た。

「あんたは、私の何を好きになったの？　見た目？　スタイル？　それとも、役職？」

　俺はシンプルに答えた。というか、唇がガクガク震えて、細かい事が言えなかった。

「満嗣さんという人が好きです」

　彼女は、このまま俺の前から居なくなるだろう。背中を見送るのも辛いが、満嗣さんの顔がどうしても見れなかった。彼女のヒールの足音が、近付く。頬に、そっと手が添えられたので俺は歯を食いしばった。

　けれど、その次の感覚は頬に受ける痛みでも耳に響く怒声でもなく、唇に触れた柔らかい感触と甘い声だった。

「霞にも、ちゃんと彼女出来たじゃない」

　全身が燃えるように熱くなり、頭がくらくらする。気付いたら、俺はその場にへたり込んでいた。直ぐに立とうとしたけど、全身の力が抜けて、動けなかった。

「どうしたの？」

「こ、腰が抜けて……」

「やだ」

　まさか、こんな展開になるなんて思ってなかったせーだ。

　ずるい。

　けど、幸せなずるさ。

　俺、満嗣さんのファンに知られたら殺されるだろうな。まあ、いいか。それなら。

「なんで？」

　信じられなくて、俺はつい質問してしまった。

「撤回しようか？」

「いえ、このままで！　　お願いします」

　満嗣さんが、いつもの笑みを浮かべた直後だった。

　なんと表現していいのか。

　強制的に電源が切られたように、一瞬にして彼女の身体が地面に崩れた。

　俺は全身から血の気の引く音を聞いたように思った。

　急いで彼女の身体を起こすと、彼女はまるで人形のようだった。息も音もないのだ。ただ、ピンクの目だけが無機質に真っ黒な空を見据えていた。

　俺は震える手で携帯を取り出し、何度か落としながら救急車を呼んだ。

　満嗣さんは、人間で言う死亡の状態だった。

　ただ、満嗣さんは人間ではないので、急遽応急処置と修復作業に取りかかるという。

　ロボット病院で、俺はそれを待つことにした。病院に着いてから、篠山さんに連絡を入れた。暫く、帰れそうにないのでウサ子をお願いします、と。

　ああ、神様は、なんて残酷で意地悪なんだ。

　そう思うと、何に祈ったらいいのかがわからない。

＊＊＊＊＊

　朝方、医者が俺の前に現れた。

「ご関係は？」

「こ、恋人です」

　で、いいよね？

　医者は淡々と告げた。

「ボディは 90 %破損しておりまして、修復は不可能です。幸い、保証期間中のようですので、状況的にも交換もしくは修理して頂けるでしょう。代わりのボディが届き次第、脳を移し変えます。幸いだったのが、脳が人間だったことですね。もし、完全なロボットでしたら、お亡くなりでした」

「じゃあ、大丈夫と」

「一応」

「原因は？」

「不明です。ただ、なんらかの原因で一瞬にして細胞の役目をなすナノマシーンがショートしたとしかいいようがなく。ボディ自体の不良かもしれませんが、あのボディは非常に高価なものですから、それも考えにくいとは思うのですが.....我々もあまり診た事のないタイプですので」

「.....大丈夫なら、いいです」

　医者は、一礼してから治療室へと戻っていった。

　入れ替わるように、ナースが現れた。

「えっと、ご家族の方？　　ですか？」

「恋人です」

　で、いいよね？？

「柏木さんのボディですが、交換してもらえるみたいですよ。在庫があるそうで、今日の昼過ぎには届けてもらえるみたいです」

「あ、ありがとうございます」

　なんだか、電化製品みたいな物言いがイヤだ。

　けど、これが現実で.....仕方がないのはわかっているから、俺はぐっと堪えた。

「今、彼女はどうしていますか？」

「今は、脳だけ保護しています。原因が分からないので、あのボディに入れておくのは危険ですし。脳としては眠っていますから、夜にでも迎えに来てあげてください」

　脳だけって、どんな気分なのかな。

　そうですか、と手放しでは喜べなかった。

「近くに、いたいんですけどいいでしょうか？」

「いいですけど、柏木さんにはわかりませんよ？　　あなただって、柏木さんとはわからないと思いますよ」

　俺は、いらっとした。

「わかるとか、わからないんじゃなくて、近くにいていたいんです！」

　少し強い言い方になってしまったとハッとして、すみませんと頭を下げた。

「人間って、不可解ですね。別にいいですけど」

　ナースは不快な表情で、俺を満嗣さんの部屋へと案内した。

　満嗣さんの病室というより、ただ機械の繋がれたカプセルに脳味噌がプカプカ浮かんでいる物がずらりと並べられた研究室のような部屋だった。

　その中の一つを、ナースが指した。物のように。

「あれです。では、機械にはくれぐれも触らないでくださいね」

　怒るのもバカらしくなった。こういう扱いは慣れているから。

　俺はナースを一礼して見送ると、満嗣さんの前に座り込んだ。

　脳味噌が何か反応をしてくれる訳じゃないけど。

「満嗣さん、次は何が食べたいですか？　今度、家に遊びに行ってもいいですか？
俺、満嗣さんの恋人って言っちゃいましたよ。怒らないでくださいね。あと、戻って忘れたとか知らないとか無しですよ。ドッキリだったとかいわれたら、俺まじ死にますからね。で、呪いますからね。そういえば、なんとなく思い出したんですけど、俺満嗣さんが持ってたマフラーとよく似たやつ昔持ってたんですよ。なくしちゃったんですけど、今も持ってたらお揃いでしたね。今度探しときます」

聞こえていないのはわかっている。無駄な事もわかってる。きっと、病院中で頭がおかしい人間だと思われているだろう。この状態の満嗣さんを、心配だとか大変だとか思うロボットが居ないことはわかっている。ボディ交換と変わらない作業だと聞いているから、ロボットからしたら着替えと変わらないなんてことない作業なのだろう。それでも、俺は安心できないのだ。

側にいることしか、今の俺にはできない。

君のために俺は死ねない

　永遠とも思える時間が流れたが、不安な気持ちのお陰で全く眠くはならなかった。

　夕方ボディが届いたようで、脳が回収されると同時に俺も部屋から出るように言われた。

　１時間くらい待合室で待たされた後、病室に案内された。

「今日はもう遅いので、もう目は覚めないと思いますよ。泊まるんでしたら、毛布も貸し出しますけど、そこのソファしか場所はないです。朝になったら、自動的に目は覚めますが、問題なく作業は完了しましたので心配する事はなにもありませんので」

「構いません。目が覚めるまでは一緒にいたいので、ソファで構いませんので毛布だけお願いします」

「では、後程お持ちします。あと、食堂は 19 時までですので」

「ありがとうございます」

　そういえば、あれから何も食べていない。

　あのナースの冷たいような物言いも、きっと心配がない証拠なんだろう。それでも、俺は何かを食べる気分にはなれなかった。

　満嗣さんを覗くと、小さく息をしているのがわかった。それだけでも、俺の不安は半分くらい楽になったと思う。

　ボディが新しい証拠だろう、不自然な艶が見える。髪も皮膚も蝋人形みたいに艶やかで、少しばかり表情が違う気もした。それでも、俺の好きな満嗣さんには変わりない。

　さっきとは別のナースが毛布とは別に、折り畳みの椅子を持ってきてくれた。礼を言うと、先程のナースと違って気さくな人だった。

「貴方、人間なんですよね？　　先輩がそう言っていたので」

「あ、はい」

「私の父も、人間だったんですよ。心配ですよね。大丈夫って言われても自分が人間だから信用できないって、よく父の口癖でした」

「そう、なんですか。でも、本当にそうなんですよね。おお恥ずかしい」

「そんなことないですよ。それは、人間だからこその深い愛情の証拠なんですから。ロボットって、相手の状況が分かるじゃないですか。だから、よほどの事がないと心配しない。私のオイルの温度がが少し上がりすぎたときも、父は真剣に心配してくれたけど、母は余裕でした。いつもそう。でも、そんな父のようになりたくて、ナースの道を選んだんです。柏木さん、幸せですよね。人間の恋人じゃなかったか、こんなに心配してもらえないもの。羨ましい」

「俺には、もったいない人だと思ってるんで。これくらいしか、出来ないので」

「うん。でも、本当に心配ないので。少し眠った方がいいですよ。人間の貴方の方が、まいっちゃいますから」

「ありがとうございます」

「そういえば、売店に軽食と栄養ドリンク売ってますよ」

「重ね重ね、ありがとうございます」

　ナースが病室を出てから、俺は教えて貰った通り売店に行ってみた。

　栄養補助食品と記載された焼き菓子と、栄養ドリンクの瓶とミネラルウォーターを買った。

　先程のナースの忠告通り、少しくらいは自分の身体を労らなければよろしくない気がしたから。

　再び病室に戻ると、満嗣さんのベッドの横で焼き菓子を食べ、栄養ドリンクを飲んだ。

　あとは、手を洗ってから彼女の手を握っていた。

＊＊＊＊＊

　ベッドの揺れで目を覚まして、不覚にも眠ってしまっていたことに気付いた俺。

　顔を上げた時、そこには上半身だけ起き上がり、ぼんやりと俺を見る満嗣さんの姿があった。

「あれ？　私、どうなったの？」

　視界が歪む。

「なんで、泣いてるの？」

　満嗣さんが、不思議そうに問うが、俺は泣き声を堪えるのに必死だった。

「ねえ、なんか言ってってば」

「うぐぅ……う、、み、つぐしゃん……よか、った……」

「え？」

「たお、えて……とつ、ぜん……」

「え？　私、倒れたの？　全然、覚えてないわ」

「ご、ごめん……と、とまら、なく、って」

「いいわよ。迷惑かけたみたいね」

　俺は、首を左右に振った。倒れる前に近付いた距離は、幸いにも変わっていなかったようで、満嗣さんの掌が俺の頭を撫でてくれた。

「あれから、どのくらい経ったの？　ずっと、居てくれたんだ？」

　少し泣いてから、泣き止んで、落ち着いてから俺は一連の流れを説明した。

「あの後、満嗣さんが倒れて、救急車呼んで。ボディが突然壊れたらしくて、医者も原因不明だって言ってましたけど。でも、満嗣さんのボディは保証に入ってたから、それで交換してもらえることになって、昨日の夜それが終わったんです。だから、あれから１日挟んで今日になってます。一応、俺から署には伝えておいたんですけど、よかったですか？」

「あ、そうなんだ。それは、構わないけど.....なんで突然」

「医者も原因不明だって。でも、本当によかった」

　満嗣さんは、ベッドから降りた。

「署に行くわ。調べたいこともあるし。あんたは、帰って休みなさい。ウサちゃんにも、会ってないんじゃないの？　だめよ、パパなんだから」

「大丈夫、なんです？　もう少し休んだ方が.....病み上がりなんだし」

　満嗣さんは、笑った。いつもの、彼女の笑いだった。

「私は、ロボット。あんたは、人間でしょ。ねえ、霞。彼氏がいきなり過労死するとか、マジ勘弁だから」

　俺の顔が真っ赤になるのがわかった。それ以上、何も言えなくなった。

「いい？　ちゃんと寝て、ちゃんと食べる。お風呂にも入る。寝不足度 95 %による疲労度 87 %。通常に戻るまで 70 %の睡眠が必要で、あと 30 %は良質のタンパク質を中心とした食事ね。体力が 85 %まで回復したら、またゆっくり話ましょう。他に何か必要なデータは？」

「いえ、ないです。帰って、飯食って寝ます」

「よし」

　満嗣さんは、俺の前から去っていった。けれど、俺が予想していたものと全く違うつかの間の別れ方だった。

＊＊＊＊＊

　もし、本当に将来の伴侶として選ぶことが出来るなら、人間がいいよ。

　そう、継母に教わった。

　子供ながらに、何故かと問うた私に、継母はこう答えた。

人として、最も愛情深い存在だから。

私はその深い愛情見て、羨ましいと思った。そんな、羨ましい心があいつを選んだ。

そして、その深い愛情を感じた。

目が覚めて、私は全く知らない場所にいた。パニックになりそうな程驚いたが、ふとあいつの姿が目に入り、握られた手の感触に落ち着きを取り戻した。

一瞬でも戻りそうだった、事故の後のあの恐怖と不安の感情を回避出来ただけでも良かったと思う。

独りじゃなくて、本当に良かったと思った。

ずっと、側に居てくれて嬉しかった。

霞の話からしたら、何故私の身体が突然ダメになったかが分からないようだ。

けど、私の身体が突然ダメになるという事実が受け入れ難く、その為に私は取り急ぎ署に戻る事を決めたのだ。

医者に私の身体の行方を確認したところ、90 %が破損しているとのことで、メーカーが原因解明のためにも身体を欲しいと言っているようだった。

とりあえず、私の許可がないまま返送する事はできないとのことで、まだ病院にあった。

私はメーカーに直接交渉し、少々荒い手ではあったが、その身体を警察で先に調べさせて貰うよう話を付けた。

身体は早々、専門分野にまわした。

「柏木警部、聞きましたよ。大変だったんですってね。しかし、あのカモノハシ君と何でまた？　あ、ケアってやつですか？」

川田がヘラヘラ笑いながら詰め寄ってきた。

「なんでって、彼氏だから」

「ああ.....って、えええええええええええええ？？？？！！！！」

「そんなに、驚くことでもないじゃない」

「いや、驚きますでしょ！」

「私だって、彼氏の１人や２人くらい作るわよ」

「に、してもですよ。あの？」

全ロボットの憧れ

「悪い？」

　河田は、私の言葉を復唱するかのように叫んだ。

「悪いです！　　俺だって狙ってたんですから！」

「は？　　ばっかしゃないの？」

「酷！」

　なんか知らないけど、川田は泣きながら署を飛び出して行った。

「いいんですかあ？」

　今度は、暢気そうに最上。

「そのうち、帰ってくるでしょ」

「でも、意外でしたあ。もう、カモノハシなんて言えませんねえ。でも、なんで彼なんです？」

「そうねえ、ちょっと羨ましくなっちゃったからかな？」

「羨ましく？」

「あの、子がね」

「はあ」

　最上は、首を傾げながらコーヒーでも淹れにその場を去った。

　机には、川田が頑張って揃えてくれたらしい資料が山となっていた。

「そうそう、せめて川田さん労ってあげてくださいよ。ずっと、柏木警部と付き合うためにキャリアあげなきゃって頑張ってたんですから。鳶に油揚げ持ってかれたって、彼のこと刺しに行ったらどうするんですか」

「やめてよ、そんな事件想像すんの」

「色恋沙汰は、怖いですからね」

「川田もバカじゃないんだから。まあ、近いうちになんか考えるわ」

「よろしくお願いしますよ」

　まさか、まさかの展開だったなと思った。

　それが、所詮ロボットの愛情か。だとしたら、継母は正しいと思う。

＊＊＊＊＊

　随分家を空けてしまったし、ウサ子の事も併せて、篠山さんには大変なご迷惑を掛けてしまった。と同時に、本当に助かった。

　家に着いて早々、ウサ子が俺に飛びつき、その後を疲れた顔で篠山さんが追って来た。

「ああ、もう大丈夫なんでしょうか？」

　俺は、出来る限り深く頭を下げた。

「本当に、お世話になりました！　あと、成功しました」

「おおお！　良かったじゃないですか。で、彼女は？　倒れて病院と聞いて.....でも、その様子だと死んではいないような？」

「はい。脳が人間だったので、お陰で助かったそうです」

「え、脳が人間だった？」

「ええ？　どうか、しましたか？」

「あ、いえ。意外だったので」

「あ、そういうことですか」

「でも、よかったですね。これで、次はプロポーズですね」

「ま、まだ早いですけど」

「まあまあ」

　篠山さんは笑った。

「しかし、子育てとは、なかなか体力がいるものですね。私も、これで帰らせてもらおうかな？」

「はい、何もお構いできずで。また、後日お礼をさせてください」

「気にしないで」

　篠山さんは、俺と入れ替わるようにして帰っていった。

「ごめんな、ウサ子。良い子にしてた？」

「うん！　いっぱい、あしょんだ！！　ウサ、いっぱいいー子だった」

「そっか」

「パパ、おちゅかれ？」

「すこしね」

「ねむい？」

「すこしね」

「ねんね、いーよ。ウサ、てれび観てゆからね」

　ウサ子と同じ目線に並んだ俺の頭を、ウサ子の小さな掌が撫でた。

　満嗣さんの、あの手の感覚を思い出した。俺はどうやら、頭を撫でられるのが好きみ

たいだ。

「ウサ、ありがとう。ウサに、ママもできるかもね」

「ウサね、ママね、あのおねーしゃんがいいなあ」

「そっか。がんばるね」

「うん」

　これから、頑張らなきゃいけないことも沢山増えた。でも、それは幸せな頑張りだ。

　なんでもいいから、仕事して指輪買いたい。子連れでも出来る仕事、ないかなあ。度々頼って申し訳ないが、俺の知ってる人間で唯一仕事している、篠山さんに相談してみよう。寝て起きたら。

＊＊＊＊＊

　失敗！

　失敗!!

　自分としたことが.....。

　けど、実験としては成功したようなものだ。

　人間には無害。

　次に、アンドロイドはどう影響される？

　では、アイノコは？

　まだまだ、データが必要だ。

＊＊＊＊＊

　時折、ウサ子が起こしに来たものの、特に用事がないときは大人しくテレビを観ててくれていた為に、俺はゆっくり眠ることが出来た。

　俺がちゃんと起きたのは、今度はウサ子が眠る時間。

　急いで風呂に入れて、ウサ子を寝かしつけた。明日にでも、何かご褒美をあげないとな、と思っている。何がいいかな。明日、聞いてみるか。

　ふと、圭介にまだ何も伝えていなかった事を思い出したので電話した。

　満嗣さんの事もそうだけど、実家に戻るのは止めた旨を伝えないと。

　で、圭介に満嗣さんへの告白が成功したことを伝えると、彼が喜んだ後に笑った。

『だから、自信持ちなっていったでしょ』

「けど、結論として結果が奇跡的にこうなっただけで、実際はダメだと思ってたし」

『それが、ダメなんだって。霞ちゃんは知らないんだろうけど、本来人間ってのはモテる筈なんだよ？　　人間ほど、愛情深い人って存在はいないからね。オレだって、なかなか運命の恋人に巡り会えないのは、半分以上っていうか、殆ど霞ちゃんのせいだって思ってるもん』

「え？」

『やっぱり、深い愛情っていいよ。羨ましいもん』

「満嗣さんはともかく、お前が俺に何を羨ましがるんだよ」

　顔もスタイルも恵まれた男が。よく言うよ。

『ウサ子ちゃんがね、羨ましいって話だよ』

「子供欲しいの？」

『そうじゃないよ。全く。人間の霞ちゃんには、きっと一生わかんないよ』

「ごめん」

　思わず、謝ってしまった……。

『まあ、いいよ。オレだって、寂しくなるかもって思ってたんだからさ。よかったよ。本当。あ、でもあんまり会えなくなるかな。たまには、遊んでよね』

「満嗣さんも忙しいし、そんなに気にしなくてもいいと思うよ。でも、来るときは事前に、連絡だけ頂戴」

『わかってるって』

「俺、もう少しここで頑張ってみるよ」

『わかった。また、困った事があったらいつでも言ってよ』

「ああ、ありがと」

　圭介は、最後まで笑っていた。

　電話を切ってから、自分が妙ににやけているのに気付いた。

　まだ実感はないのだけど、それでも恋人が出来たんだと思うと嬉しくって仕方ない。

　一生恋人なんて出来ないと思っていたから、お見合いでもいいって思っていたくらいなのに。

　それも、憧れの、高嶺の花と言うのも恐縮するくらいの完璧美女の満嗣さん！

　俺は、一生分の運を使いきったと思う！

　それでも、いいのだ！

　幸せだから。

　独り幸せに浸っていたら、まさかの満嗣さんからの着信が鳴った。署からではなくて、プライベートの電話だし！

　俺は、慌てて電話に出た。

『あ、起こしちゃった？』

　満嗣さんは、少々気まずそうだった。

「いいえ、起きてましたよ！　さっき、ウサ子を寝かしつけたところです。どうされました？」

　満嗣さんは、少し深刻そうに話を始めた。

『あの、篠山太一とかいう人物だけど、霞とどういう関係？』

　霞と呼んで貰えたことが、改めて嬉しかった。

「最近、近所に引っ越してきた方です。篠山さんも人間で、この辺りの勝手が分からないからってことで、訪ねてこられたんですけど、それから友達みたいな付き合いをしていますね。頭が良いし、頼りになるし、本当に出来た人ですよ。そういえば、満嗣さんから俺を紹介されたって言ってましたけど？」

『何それ？　知らないわよ』

「え？」

『だって、プライバシーじゃない。常識的に考えて、おかしいでしょ』

　なんだろう、血の気が引いたと言うか、狐につままれたっていうのがこれなのかな。少なくとも、オレオレ詐欺に気付いた時とか、こういう気分になるんだろう。

「え？　ちょ、俺、どうしたらいいんですか？」

『静かに！　盗聴されてたらどうすんの？』

「とと、盗聴!?」

『ばか！　電話の内容を復唱すんじゃないわよ。全く』

　とりあえず、俺は謝った。

『色々確かめたい事があるのよ。一旦、うちに来れる？　部下に車出させるから。先に私のマンション行ってて』

なんか知らんけど、川田さんめっちゃ怒ってる

　俺は、満嗣さんからの電話を切ると、身の回りの準備を始めた。

　満嗣さん曰く、持ち物は最低限、篠山さんから貰ったような物は一切持ってくるな、とのことだ。

　最近、ウサ子がお気に入りの篠山さんから貰ったぬいぐるみ。これも置いていかなければならないのかと悩んだのだが、目が覚めて泣くウサ子を想像するとどうしても置いて行けなかった。

　持っていって、満嗣さんには直接説明することにした。

　満嗣さんの部下の迎えの車は、30 分くらいで到着した。

　俺は眠るウサ子を抱えて、車へと乗り込んだ。

「桜木さんですか？　　柏木警部の部下の川田です」

「はい、よろしくお願いいたします」

　川田さんは、俺より若いかもしれない雰囲気すらあるのに、何か怒ったような無愛想な雰囲気を纏っていた。きっと、仕事終わりで疲れていたに違いないと思い、俺は恐る恐る詫びだけ入れた。

「あの、お仕事で忙しいの、余計な事をさせて、すみません」

「いえ、構いませんよ！　　柏木警部に、自分が行きましょうかって名乗り出たんですから」

　なんだか、言い方にトゲがある。

「そうですか、ありがとうございます」

　車がゆっくりと走り出した。無言の車内。俺はなんてこともないが、何故か川田さんから流れ出る雰囲気が重い。

　暫くして、口火を切ったのは川田さんの方だった。

「柏木警部の、何に惚れたんですか？　　柏木警部に何をしたんですか？　　何が目的ですか？」

「あ、え？」

　急にまくし立てられたので、俺は頭が追いつかなかった。

「いつから狙っていたんですか？　　将来のことは考えているんですか？　　本当に幸せにできるんですか？　　って言うか、自分が釣り合ってるとか思ってるんですか？」

「あ、え？　　あの、なんなんですか？」

　瞬間、車が急ブレーキを踏んで、俺の身体が前のめりに動いた。ウサ子が、びっくりして一瞬起きたが、また直ぐ眠った。

　見れば、信号が赤だった。

「あの。こんな事を言うのは失礼な事だと十分わかっているのですが、子供が寝てるので急ブレーキには気を付けて頂けると助かります」

　川田さんは、何も言わなかった。

　再び、車は走り出した。あれから、何時間経ったんだろうと問いたくなるような、眠らない街はあの時と変わらない。少し忘れかけていた、柔らかな唇と息遣いを思い出して、切なくなった。

「……ない……」

　川田さんから、蚊の鳴くような声がした。

「……あんたに、俺の気持ちなんて……わかるはずない……」

　ああ。

　彼は、川田さんはヤキモチを焼いているんだ。

　失恋して、傷付いて……もしかしたら、今の川田さんの立場が、俺だったかもしれない。

「俺に幸せに出来るかどうかなんて自信はないですけど、俺が出来る限りの事はするつもりです。例え、死んでもそれは誓います」

川田さんは、こくりと頷いた。

それ以降の会話も反応もなく、満嗣さんのマンションの前で車は停車した。

「このマンションの 53 階の 12 号室です」

「すっご.....」

俺は、川田さんに礼を言ってから見送り、再びマンションを見上げて絶句した。

地区内でも超超有名なゴージャス高級マンションだった。

確かに考えてもみれば、地区でも有名な凄腕警部。事件にこの人ありと言われた、超有名人なのだから、給料もそれなりに貰っていてもおかしくないだろうと思う。

高級マンションのラウンジにはホテルのような受付レディがいるし、シャンデリアと小川みたいなインテリアが目を引く。大理石の廊下を歩くのも、なんかもう気が引けるくらいドキドキした。

受付で名前を言うと、受付レディは聞いていますの一言。で、鍵を貸してくれた。

奥のエレベーターで満嗣さんの階まで行くのだが、エレベーターはまさかのシースルーで、外のネオンが眩しいくらい綺麗な夜景を映し出していた。

玄関を開けて、部屋に上がらせて貰うと、満嗣さんがいつも付けている香水のにおいがした。心臓が、ドキドキする。なんか、スケベだよな。

広いリビングに部屋。女性の部屋の中をうろうろするわけにもいかないので、リビングの高そうなレザーのソファにウサ子を寝かして俺も座った。

当たり前だが、妙に落ち着かない。

部屋の中は、片付いているとも散らかっているとも、どちらとも言えない具合で、生活感が出ていた。

忙しいんだろうな。と言うのがわかるくらい。あんまりじろじろ見たら、失礼だろうと顔を伏せた。

　ウサ子は相変わらず、気分良さそうに眠っているので、何よりだ。

　満嗣さんからの、電話が鳴った。

『着いた？　　散らかってて悪いけど、適当にやってて』

「いえ、すみません」

『もう少ししたら、帰るから』

「待ってますね」

『あれだったら、私のベッド使っていいから、寝てて』

「ありがとうございます」

　会話は、そんな感じで終わった。

　ベッドを使っていいと言われても、そこまで自由に振る舞えないので。俺は、ソファに横になった。

　幸い、ウサ子を寝かして尚自分が横になれるほど大きなソファだったからそれで十分だ。

　うとうととして、どのくらい時間が経ったかはわからないが、身体に掛けられた毛布の感触で目が覚めた。

「あ、起きた？　　もう、ちゃんとベッド使いなさいって言ったのに」

　満嗣さんは、呆れたように呟いた。

「女性の部屋を、歩き回るのも失礼かと思って」

「私がいいって言ってるんだから、よかったのに。見られて困るようなもんなんて、たいしてないわ」

「そう、なんですか？」

「まあ、忙しくて寝に帰るだけのようなものだから」

「こんなに立派で広くて綺麗なマンションなのに、ですか？」

「どんなに綺麗で立派なマンションでも、独りだったらそんなもんよ」

　なんとなくだけど、満嗣さんは寂しかったのかな。

「あの、話って」

「そうそう、霞には悪いけど、あんたのアパートの部屋を調べさせて欲しいの。気になる事があってね。それで、荷物は私の指示通りにしたわよね？」

　俺は、ウサ子のぬいぐるみの件を思い出した。

「どうしようか悩んだんですけど……篠山さんからウサ子へのプレゼントのぬいぐるみだけ、持ってこさせてもらいました。ウサ子の大のお気に入りなので、置いてくるのが可哀想で」

　へらっと笑った俺の頬を、満嗣さんが思いっきりつねった。激痛に涙が出た。

「あだだだだだだ!!　い、痛いんですけど」

「それ！　　直ぐに出しなさい」

　満嗣さんは、怖い顔で腕組みをしながら仁王立ちだ。

　俺の身体は恐怖で震えながら、持ってきたバッグの中からぬいぐるみを取り出し、満嗣さんに渡した。

　カカア天下になるのは、最初からわかっていたことなので、いたしかたない。

　満嗣さんは、ぬいぐるみの首を無造作に引きちぎった。俺の口から、情けない声が出た。

　ぬいぐるみの中身のふわふわの綿が、辺りに散らばる。中から、小さな機械も顔を出した。

　満嗣さんはそれを掴むと、床に投げつけ、踏み砕いた。

「盗聴付き発信機よ。ここもわかったんじゃないのかしらね、だとしたら最悪」

俺の全身から血の気が引いた。

「篠山太一、あいつは篠山誠太よ。あいつには、兄弟がいた。兄弟の名前が、篠山太一。一緒にロボットの研究をしていたみたいだけど、研究中の事故で死んでいるわ。即死だったせいで、今の医学や技術でも助ける事ができなかった。篠山の住んでいた実家のあった地区は、今はオフィス街になっていて、跡形もなかった。随分、太古昔からの風習を大事にしていた地区だったみたいだけどね」

篠山さんが.....俺は、呆然とするしかなかった。

俺が悪いんかな

「その、篠山さんが……もし、本当に誠太さんだとしたら……なんの目的で、俺に……」

　満嗣さんは、溜め息にも似た一息を吐いた。

「さあね。それをこれから調べるのよ。だから、霞には暫くここに居て貰うわ。嫌ならホテルでもいいけど、私も独り暮らしには飽きちゃったし。なにより、あんたに家事やってて貰ったら楽で良いし」

　主夫ですか。

「それは、構いませんけど」

「なあに？」

「あの篠山さんが……と思うと、気になって」

「まあ、事がわかったら、霞には教えてあげるわ。ただ、極秘事項だからね」

「口が裂けても言いません」

「よし！」

　考えれば考える程、疑問しか浮かばない。

　偶然出会ったとか、昔会ったことがあるとか、そんな要素は微塵もなかった。

　篠山さんが俺を訪ねて、わざわざ来てくれた。以来、篠山さんが俺を気にして、訪ねて来てくれて、話すことも多くて……頼りになる友達が出来たと思っていたのに。

「今更、考えても仕方がないわよ」

「そうなんですけど……」

「そうだったら、これからの事を考えましょう。あんたも疲れたでしょう。もう寝なさい。本当にソファで大丈夫なのかしら？」

「あ、はい。十分ですよ」

　そろそろ、夜が明けそうだ。カーテンの隙間から、うっすらと紫色の光の筋が射していた。

　こんな時間まで仕事してたんだ。疲れない身体でも、しんどいと思うけどな。

「満嗣さんも、寝ますか？　　それとも、コーヒーでも淹れましょうか？　　お腹は.....」

　ああ、空かないのか。寂しいような、便利なような。

「そうね、少しシャットダウン（ 睡眠 ）するわ。この身体、前のタイプと同じだけど、やっぱり少し違うからまだ違和感がね。慣れるまで、無理は出来ないなって思うから」

「そうなんですか」

「シャワー浴びてくるわ。もし起きてたら、コーヒー淹れてもらおうかな」

「はい」

　ロボットの身体の感覚も扱いも、全くわからないけどそれなりに繊細なんだろうな。

　満嗣さんは、シャワーを浴びにバスルームに入っていった。

　コーヒーメーカーもコーヒー豆も、高級な物が置いてあった。

　摂取すればエネルギーにもなるのだけど、それはおまけみたいな話で、趣味として楽しむものの一つとなった飲食。ロボット達には、必ずしも必要でない分、より高級な物が好まれる。滅多に飲めないコーヒー、俺も後で貰おうかな。味、わかるかな。

　満嗣さんがシャワーから上がって来たタイミングで、淹れ立てのコーヒーをマグカップに注いだ。

　マグカップを持って降り返ると、シャンプーのアロマの香りとバスローブを纏った満嗣さんの無防備な姿があった。思わずドキッとして、マグカップを落としそうになった。

「あの、このコーヒー高級なやつですよね。俺も貰っていいですか？」

　目が合わせられない。

「飲めば？　　そんなの気にしなくっていいのに」

「満嗣さんって、大胆ですよね。付き合って貰っちゃって本当にいいのかなって思うんですけど、俺あんまり経験ないから……その……どうしたらいいか」

「大人なんだからさ、お互い」

　満嗣さんは、俺からコーヒーの入ったマグカップを受け取った。

「大胆っていうか、そんなつもりもないんだけどなあ。霞だったら、自然にしてても良いかと思って。私的に楽なんだけど、迷惑だったのかな？」

　俺は、首を左右に振った。

「もっと、霞も自然に振る舞ってくれてもいいのにな」

　なかなか難しいけど、努力します。

　高級なコーヒーは、上品な香りは勿論、飲んだこともない深みのある香ばしい味がした。

「美味しい」

「そう？　　よかった。私は飽きちゃったけどね」

「え？」

「このコーヒー一時期好きでさ、いっつも飲んでたんだけど、飽きちゃってずっと飲んでなかったのよ。事が済んだら、持って帰っていいわよ」

「あ、ありがとうございます」

　なんかちょっと、恥ずかしい。もっと、満嗣さんの嗜好とか色々知らないきゃなと思った。

「ところで、俺のアパートで何を調べるんです？」

「さっきみたいな盗聴機とか、あと篠山の指紋と何かＤＮＡが取れる物が欲しいの。霞の

指紋は以前貰っているから大丈夫だし、ウサちゃんの分も以前調べている。問題の篠山誠太の指紋が警察でも保管されていた。研究室に入るための鍵が指紋だったの。指紋も年を重ねるごとに少しずつ変化するのだけど、それもコンピューターで予測出来る範囲だから大丈夫。ただ、篠山は天才だから、全てお見通しってこともあるだろうけど」

「そうですか。警察に物色されるのも、慣れてきましたね」

「そうねえ、あんたには悪いけど何回目って感じだもんね。そのうち、大家さん怒って追い出されたりして」

「もう、悪い冗談やめてくださいよ。そうなったら、俺マジで行くとこ実家しか無くなります」

「ここに来たら？」

　俺は、きょとんとして言葉を失った。

「ジョーダン」

　悪い冗談だ。

　けれど、この冗談が現実になるとは思ってもいなかった。

　３日程して、大家から物凄い剣幕で電話が鳴った。

　何度も警察に入られているのは勿論、知らない間に子供を引き取った事に関して、同じアパートの住民からクレームが殺到しているとのこと。アパートの評判にも関わることなので、直ぐにでも出ていって欲しいと。

　出ていって欲しいと一方的に告げられ、どうしようもないのだが、直ぐにといわれても行く場所がないので少しだけ猶予が欲しいと告げた。大家がくれたのは、たった１週間。丁度、明日アパートに戻れる許可も下りたので、荷物をまとめなきゃいけないのだけど。はっきり言って無茶苦茶だ。

　あれから、篠山さんからの連絡はない。どうしても気になってこちらから一度だけ電話をしてみたが、電源が入っていなかった。いよいよどうしても気になり家を訪ねてみたが、既に退去されていた。

　まだ結果はでていないが、やはり篠山さんは、あの篠山さんだったんだろう。ウサ子のぬいぐるみに仕掛けられた機械も、篠山さんの仕業で.....満継さんが全てに気付き

始めたから、逃げてしまったってことなんだろうか。

満継さんは、俺がマンションに来た次の日の夕方、また仕事に行ってから帰って来ていない。今夜、帰る予定らしいので、何か美味しい食事を用意して待っていることになっているのだけど。今この事態について電話しても迷惑だろうし、どう相談してもいいのか整理ができない状態だったので、いつもの如く圭介に相談することにした。

けれど、圭介は電話に出ず、珍しく折り返しの連絡もなかった。何度か電話してみたものの、やっぱり何の連絡も無かった。

ふと、満継さんが倒れたあの日の事を思い出して、嫌な予感がした。変なウィルスでも流行っているのかな。

妙な胸騒ぎで、ずっと観ていなかったテレビを付けた。妙なタイミングで、胸騒ぎが的中したのか、ニュースキャスターがその事実を告げていた。

『ロボットの身体の 90 %の機能が破壊されるという、謎の現象が起きています。病院、警察が原因を究明しておりますが、まだわかっておりません。ただＥ地区のみでしか起きていないとのことで、Ｅ地区を応急的に隔離する方向で動いています』

満継さんが、戻らないのはこのせいか。あの日の事もあるし、大丈夫なのだろうか。そして、連絡の付かない圭介も、もしかして.....。

ウサ子のいた病院が映し出された。そのあと、俺のアパートの周辺が。

どういうことだろうか。俺が、最近関わった場所ばかりじゃないか。

俺が、原因なのか？

満継さんが倒れたのも.....俺の.....せい？

知らん間に世界征服

　もし俺に、ロボットを破壊できるような力があったら、この先満嗣さんとこの関係を続けることは出来ないと思う。

　もし俺にそんな力が本当にあるなら・・俺は・・。

　そこまで考えて、子供っぽいことが頭に浮かんだ。

　世界征服。

　いやいやいやいや！

　それ以前に、犯罪者だろ。

　しかし、ただの人間にそんな力がある等とは考え難く、更に今の今まで何も問題なかったのだから、やはり違うと思うのだ。

　どちらにしろ、この件は俺にはどうしようもい。

　第一、俺がもし本当に原因だとしたら、満嗣さんが気付いてくれるだろうと思うのだ。なんたって、超エリートの警部なんだから。ははは。

　そこまで考えて、なるべく考えすぎないようにしようとは思ったものの落ち着かず、せめて満嗣さんの様子だけでもと思って携帯でメッセージを飛ばした。

　暫くしてから、返事が来た。

『大丈夫。今夜帰るから。』

　という、シンプルなものだった。

　今夜帰ってくるんだ、大丈夫なんだ。と思って一旦安心はしたが、相変わらず圭介からの連絡はない。

　夜になって、満嗣さんが帰って来た。

　俺は、すっかり日課の夕飯の用意をテーブルに並べながら言った。

「お仕事中に、すみません。ニュース観て、心配で」

　満嗣さんは、疲れているように見えた。当たり前か。

「私が倒れた日から、急に何人ものロボットやアンドロイドが倒れだしてね。ボディの90％が破壊されてるロボットが殆どで・・その、言いづらいんだけど、病院でウサちゃんの担当していたカウンセラーと看護士が、亡くなったわ」

「え？」

　俺の全身から血の気が引いた。随分経つのだけど、定期的にウサ子を看てもらっていたのに。

「それ以外にも、何人か亡くなってて。彼女達は、完全なロボットだったからダメだったみたい。あと、アイノコだったりアンドロイドだったりする人達については、一部の救命プログラムが作動して、何とか一命を取り留めたって感じみたいね」

　圭介は・・。

「あの、俺の友達と連絡が付かないんです。圭介っていう、アイノコなんですけど」

「そうなんだ。もしかしたら、巻き込まれてるかもね。けど、あんたが居た病院を中心に広まってるみたいだから、どうなのかな。彼は、結構来てたの？」

「はい。俺の家族の代わりに着替えとか日用品とか持って来てくれてました」

「もしかしたら、Ｇ区の病院に隔離されてるかもね。Ｆ区は隔離が決まってて、Ｇ区は最先端のロボット病院とか研究施設があるから。殆ど、研究の為の区だから、今回の件は原因究明も兼ねてＧ区の研究病院に隔離する事になってるの」

「面会に行けますか？」

「人間なら大丈夫だと思うわよ。ただ、証明のパスは忘れないようにね。明日にでも、私が連絡してみてあげるわ」

「ありがとうございます」

　圭介、とにかく無事だといいんだけど。

「そういえば、あんたのアパートも隔離されたのよ。住民が倒れて、検事達も倒れちゃって。アパートが原因と言うより、あの場所が結構酷いんだけど」

　俺は、生唾を飲み込んだ。そして、満嗣さんに思っていた事を言った。

「俺が、原因なんでしょうか・・」

「はあ？」

　と満嗣さんが、声を上げた。

「だって、俺がここ最近行ったことがある場所ばかりだし、俺が関わった人が倒れて、死ぬとか・・サライさんにしても、満嗣さんだって俺に・・した後に・・あと、もしかしたら圭介だって・・」

　満嗣さんは、笑った。

「そうねえ。もしそうなら、世界征服出来ちゃうね。でも、それはないわよ。あんた、ただの人間でしょ？　　人間にそんなこと出来るはずないもの。それに、大凡の目星はついてるから」

「というと？」

「霞に、丁度今夜話そうって思ってたのよ。私の身体から、今まで無かった最新のウイルス型ナノマシーンが発見されたの。そのナノマシーンが原因なのはわかったのだけど、それが何処から出てきて、どこから潜入したのかわからない。そこで浮上したのが篠山」

「篠山・・さん？」

「ええ、篠山は篠山誠太だったの。それで、そんなナノマシーンを開発出来るのは、あいつだけだって話になって」

「それだけで、犯人だって疑うんですか？」

「まあ、聞きなさい。失踪直前まで研究されていたナノマシーン細胞があるのだけど、どうやらその細胞によく似てるってことなの。その細胞を分析したくても、開発者にしかわからない。で、高度な研究機関にまわしたところ、少しだけ当時の篠山の研究を知ってる人間がいたの。その人間が、篠山の研究細胞によく似ていると証言したわ。そして、

当時の篠山がこう言っていたことも。毒にも薬にもなる細胞、だってね」

「毒にも薬にも・・」

「そう、篠山の判断でどうにでも出来る。そして、もしそれが本当だったとしたら、篠山は毒を選んだことになる。無差別にロボットを殺し、殺そうとした重罪人」

　篠山さんは、篠山さんのさじ加減で、多くのロボットを救うことも殺すことも出来たって事か。

「もしそうだとしたら、悲しいな。確かに、気に入らないロボットはいるかもしれないけど、例えもし人間だけになったとしたって、そんなの変わらないと思うんだけど。何とか、助けてやれないのかな。きっと、こうなってしまったのは、篠山さんだけのせいじゃないと思うし。だって、最初は薬になるための研究をしてたんだって話だったし」

　満嗣さんは、溜め息をついた。そのあと、感情のない声で告げた。

「霞が、犯人として仕立て上げられたとしても、あんたは、そう言えるの？」

　俺は、はっとした。

「私は、そんなこと言えない。警官である以上に、あんたの恋人になったのだから」

　篠山さんが、なぜ俺を選んだのか。自分の代わりの犯人が欲しかっただけだとしたら、そんなの誰でもよかったんだろう。

「私は、霞を助けるために、篠山を捕まえなきゃいけない」

　やはり、俺に疑いが掛けられているのだろう。だから、満嗣さんは俺をここへ呼んだ。バカな俺でも、さすがにわかる。

「俺、本当にバカですね」

　満嗣さんが忙しいのも、帰れないのも、きっと今は全部俺のせいだ。じゃあ、俺が諦めたら・・満嗣さんは救われないし、他に被害も出続けるのだろう。

「俺、出来る限り協力しますから。篠山さんを捕まえて、犯人にしろそうでないにしろ、はっきりさせましょう」

「よし」

　と言った満嗣さんの顔を見た。少しだけ、笑っていた。

「さあ、ご飯にしよ！　　もう、あんたのせいで冷めちゃったじゃないの」

「あ、すみません。温め直しますから」

「お願いね」

　料理を前にした満嗣さんは、楽しそうで幸せそうで、俺も嬉しくなった。

「さあ、ウサ子は丁度いい温かさだから、一人で食べれるよね」

「うさもー」

　なんで真似したがるので、温めるフリをしてやった。気付かず、満足そうに笑う。

「さあ、いただきますしてね」

「いららきまうー」

　言い終わるのが早いかどうかのタイミングで食べ出すウサ子。この子の為にも、なんとかしないとな。

　ふと、思い出す。

「そういえば、さっきの話の後で今度は、って感じの問題なんですけど」

　満嗣さんが、前菜のサラダをつつきながら「なに？」と問う。

「俺、アパート追い出されちゃったみたいです。ウサ子のこともですけど、警察沙汰が立て続けで・・迷惑だから出ていけって。ご迷惑承知に・・もう少し置いてもらえません？」

「恋人なんだから、気遣わなくてもいいって言ってるでしょう。もういっそ、ここに引っ越してきたら？　　霞も慣れたでしょう？」

将来はパートの主夫になるよ

　引っ越してきちゃえば、って。それはそのまま、同棲という意味でしょうか？

「けど、それじゃ迷惑じゃ。俺、収入ないし」

　人間生活保護者です。

「別に、そんなの期待してないわよ。それに、霞が主夫やってくれた方が私も楽だし」

　まあ、そういう家庭なんてナンボでもありますが。結婚してないのに、なんだか悪いなあ等と思ってしまう。けれど、もし俺も働くとなるとウサ子はどこかに預けなきゃいけないし。満嗣さんが育児とか家事とか想像もつかない。寧ろ、彼女はこのまま働いていてくれた方が、世のため家庭のためである。

「結婚、しましょう」

「は？」

　とっさに出た。なんか、わからんけど。半分やけっぱちなのか。

「結婚もしてないのに養ってもらうわけにはいかないので、俺責任持ちますから」

　満嗣さんは、一旦食事をやめた。

「後悔するかもよ？　　今決めたら」

　俺は、首を左右に振った。一生付いていきますとも！

「そうね。この一件が片づいたら、考えてあげる。その時は、改めてもっとムードのある感じでプロポーズし直してよね」

　かわされたんだな。まあ、仕方ない。

　食事を終えて、片づけを済ますと、ウサ子を風呂に入れて寝かしつけた。

　昼間、何となく手洗いで洗濯しておいた満嗣さんのマフラーを彼女に渡した。

「あの、大事にしてたマフラーなんですけど。汚れが目立っていたので、洗っておきましたよ。手もみで大切に洗ったので、傷んでいませんから、安心してくださいね」

「あ、ありがとう。私も洗濯したかったんだけど、どうしていいかわからなくて」

　ふわふわになったマフラーに、満嗣さんは顔を埋めた。

すっごく嬉しそうで、俺まで嬉しくなった。

「そういえば、そのマフラーとよく似たやつ、俺も子供の頃持ってたんですよね。ただ、いつ何処でなくしたのかまで覚えてないんですけど。多分、実家にあるのかなあと」

「そーなんだ。じゃあ、同じとこで売ってたやつなのかな」

「そうかも。今度探してみます」

「そうねえ、あんたの実家も行ってみたいな」

「実家って言っても、今は父の実感ですけどね。俺は元々、人間保護対象地区になってたＦ区で生まれ育ったんですけど、こっちは住みにくいってことで田舎の実家に両親だけ戻ったんですよ。両親も仕事に就いてみたかったらしんですけど、結局叶わなくて諦めたんですって。でも、俺はまだ若いし諦められなくて。けど、もういいかなって思ってきてたところなんですけどね」

「そうなんだ。仕事ってそんなにやってみたいものなのかなあ。私だって、嫌だって思うときしょっちゅうあるもの」

「そうなんですか。でも、仕事するってなんかちゃんと生活してるって思うんですよ。受給で生きてても、生活させてもらってる感しかないし」

「ふうん」

　少しの間をおいてから、満嗣さんが再び口を開いた。

「なんでもいいの？　　飲食店の店員とかでも」

「はい、この際なんでも」

「なら、この前行ったあ定食屋あるじゃない。あの店主、ロボット嫌いの人間なのよ。最近年だからバイト雇いたいらしいんだけど、ロボットは嫌だから諦めたんだってさ。ちょっと聞いてみてあげてもいいけど。本当に雇ってくれるかどうかまでは保証しかねるけど。でも、そうなったとしたらウサちゃんどうするの？」

「そうなんですよ。だから、諦めようかなって」

「そうなるわね」

　保護金受給してる人間が、ちょっとだけ働くという理由で保育園も幼稚園もベビーシッターも子供を預かってくれないような気がする。

「小学校に入れるようになったら、再度考えます」

「そうね、そうなるわね」

　満嗣さんは、優しい上に顔も広いし頼りになる。やっぱり俺は主夫として、家庭を守ることにしよう。

「満嗣さんは、優しいですよね。こんな俺のわがままにばかり付き合って」

「そうかな。でも、私達からしたら当たり前で簡単そうな夢なのに叶えられないって、なんか切なくてね。でも、無い物ねだりよ、ほんと。働き出したら、もう嫌だーってなるわよ。きっと」

　満嗣さんは、笑っていた。

「次は、いつ仕事に戻るんですか？」

　圭介も心配だけど、もう少し満嗣さんとゆっくりしていたいと思った。

「本当は、直ぐにでも行きたいんだけど。まだ身体変えたばかりで無理は出来ないからさ、明日はお休みもらったの。明後日から、本格的に篠山を捕まえる準備しないと」

　捕まえる、と決めてしまうのにも、俺はまだどこかに抵抗があった。もしかしたら、万が一にでも、篠山さんが犯人でなければ。本当に、太一さんだったらいいなあと思う気持ちがあるのだから。甘いんだろうけど、せっかく頼りになる人間の友達が出来たのだから。

「俺、明後日Ｇ区の病院に行ってみようと思います。圭介が居たら、ですけど」

「そう、わかったわ。気を付けるのよ」

「はい。満嗣さんも、十分気を付けてくださいね。俺、またあんな思いしたくないので」

「で、ウサちゃんの件だけど。病院には入れないと思うけど、別の施設で私の話が出来る場所があるから、そこで少しの間預かってもらえるように手配してあげるわ。友達、無事だといいわね」

「本当に。一番はG区に行くことにならなければ、いいのですけど」

＊＊＊＊＊

　柏木満嗣。超エリートと言われる警察官。それが近くに居るというだけで、恐らく近いうちはこうなるだろうという予測は出来ていた。

　ナノマシーンに持たせたぬいぐるみに仕込んだ盗聴発信機が見つかり、あっけなく破壊されたが、それは予想の範囲だと言える。自分の正体も完全に裏付けされてしまったようなものだけれど、どうせ近いうちにまとめて一掃するつもりなので大した問題にしなくてもよいだろう。お陰で、あの警部の自宅の場所がわかっただけでも、大きな収穫だったといえる。

　自分は、早急にＦ区から撤退し、潜伏先のあるＧ区に入った。

　ここには、失踪後からずっと住居件研究所として使っている場所が存在しているから。

　元々Ｇ区は研究地区として発展した場所で、研究病院やその他多くの研究所が密集している地区であるから、身を隠すには好都合な場所だった。木を隠すには森の中、とはよく言ったものだ。

　場所が場所だけに、研究するための設備や資材も手に入りやすく、過ごしやすく、また研究者である人間も多く存在するので研究に集中することが出来たのも大きい。

　また、今となっては面白いことに。自分が開発した幼女型ナノマシーンの犠牲者が、研究のために次々と運ばれてきている。滑稽で、仕方ない。

　もう少ししたら、幼女型ナノマシーンに仕掛けた最後のプログラムを起動させ、機械共を一掃する。そして、人間としての人権やモラル、存在価値や居場所を取り戻す。

機械は廃棄だ。人などではない。人が人として理解されなかったのと違って、自分は機械を機械として理解する。

桜木霞、あの男には悪いが、今回の犯人になって自分の代わりに処刑されてもらう。

この事件が機械共の恐怖の引き金となり、先の一掃に繋がる事を自分は考えている。

幼女型ナノマシーン、２号機。これの完成まで、あと少し。

２号機、ただただ破壊するだけの実験サンプルの１号機とは違い、本当の意味での完成品幼女型ナノマシーンである。

桜木霞が処刑された後、篠山誠太が発表するのだ。医療タイプの幼女型ナノマシーンとして。コンピューターでいうところの、遠隔型セキュリティソフトである。２号機を連れていれば、ある程度のコンピューターウィルスのフィルターになるというプログラム付きで売り出す。今回の事件を恐れた機械共は、こぞって手に入れたがるだろうと。

順調だ。

お弁当持って遊園地に行くよ

　自分の開発したナノマシーンは、機械に対してはいわば毒にも薬にもなる。

　生きた、細胞のようなナノマシーンが、機械を修復することも破壊することもできるのだ。その能力は、人間の細胞とは違い、自分のプログラムでどうにでも動かせる。どうにでも動かせると言ってしまえば、ナノマシーンを遠隔でどうにでも操作できると言うことなのだ。

　その完成度については、今回の事件で証明している。

　人間に対して無害という点で、完全に壊せなかった機械が存在する事も確認できた。

　その実験データを元に、2号機の完成度を強化する必要がある。

　自分は、Ｇ区のとある研究病院に篠山太一として就職していた。

　その病院は、人間が管理してるコンピューターウイルスによる被害者を保護する為の専門病棟だ。だから、簡単に就職することも出来た。

　Ｆ区には、病気のため長期休暇を取得していた。

「篠山君、もう身体の方は大丈夫なのかね？」

　年老いた院長だ。老いで死ぬ運命を間近にした、実に人間らしい院長である。

「はい。少々、無理がたたっていたいたようで。十分に、休ませていただきました」

　幼女型ナノマシーンの影響で、次々に運び込まれる患者達。院長は、院内放送を聞きながらも溜め息を吐いた。

「我々人間からすれば、ロボットの身体というものは、実に万能なものだと思えるが、一度弱点を突かれてしまうと、本当にもろいものだね」

「万能なものなど、存在しないのということです」

　万能なものなど、存在してはいけないのだ。もろく、はかないからこそ、美しく完璧なものだってあるのだから。

「我々人間がロボットに居場所や存在意義を奪われたと感じるも同様、ロボット達からすれば、居させてやっている存在なのだろうが。こうなってしまっては、その王様の存在も下々に頼るしかないと、惨めなものだね」

　院長の皮肉は、時に眉を潜めたくなる。自分は、機械を一掃するためだけに全てを捧げてきた。では、この人は一体.....。

「院長は、ロボットがお嫌いなんですね」

　院長は、笑った。

「好きでも、嫌いでもないさ。ただ、さっき言ったのは本音だ。そして、人類に出来ることは、この脳味噌でその裸の王様を上手く利用することだね」

「なるほど」

「裸の王様のお陰で、我々は自由を得ていると言うわけだよ」

　働かなくとも、生活出来る。働けば、少しの労働で多くの給料や待遇が得られる。働ける人間も一部だから、仕事など限られていて、その仕事では自由が与えられる。だから自分もこうして、自由に長期休暇などももらえる訳だ。

　そして、今のような現状になれば、機械は我々を神のように縋り、求める。実に、滑稽である。

「では院長は、ロボット達を一掃したいとか、憎い等と思ったことはないのでしょうか？」

「そう思わない人間がいると思うのかい？　　君は。もし居たとしたら、随分なお人好しだね。しかし、これは我々人類が築き上げた現実でもあるのだよ。少子化により、人類が減り、その労働源をロボットに頼った。やがて、ロボットがロボットを開発するようになり、人間のコピーとして生まれ変わった。ロボットは更なる人類へのコピーを求めはじめ、人間は辛うじて太古昔の人間の作った法により生かされるだけの存在。それすらも、ロボットのさじ加減で、いつ消されるかわからない崖っぷち。今のうちに一掃し、本来の人類の在り方を.....そう、夢は広がる。しかし、無理だ」

「というと？」

「わからんかね？　人類は、減りすぎた」

　そう、わかっている。だから、自分が機械を力で抑え付ける道を選んだのだから。

「では、院長。もし、ロボット達を力と恐怖で押さえつけることに成功したとしたら、どうなると思いますか？」

　院長は、目を丸くしてから軽く笑った。

「戦争が、起こるかもしれんな」

「では、その戦争すら起こさせない力を持った人間が現れたらどうしますか？　それこそ恐怖という名の力かもしれないし、高度な電磁波によるプログラムかもしれない」

「そうじゃなあ」

　院内放送が、我々を呼んだ。サボってないで、廃棄寸前のポンコツ共を何とかしろとのお達しだ。やれやれ。

「それこそ、形勢逆転ってやかね。しかし、恐ろしいことを考えるな。篠山君は」

　よぼよぼとした背中を見送りながら、自分は気付かれないよう笑った。

＊＊＊＊＊

　翌朝、満嗣さんがG区の病院に問い合わせてくれた。

　やはり、圭介は入院していた。が、アイノコだったので、セキュリティプログラムの発動で、一命を取り留めたらしい。今はボディ交換も終わり、念のための検査と研究のため、数日入院してから退院出来るとのことだった。

　面会の要求もして貰ったが、事件は想像より酷く、現場が荒れすぎているので控えて欲しいとの事だった。

　圭介と直接話すことは出来なかったが、退院したら連絡を貰えるよう伝言を頼んで貰った。これでやっと、俺としても一安心できた。

「満嗣さん、本当にありがとうございます」

「いいのよ、たいしたことじゃないもの。それより、面接の件だけど、ごめんね」

「いえ、構いません」

「それで、本当はその時ついでに話そうと思ってたんだけど、G区の研究施設にウサちゃんを連れていって欲しいの」

「最初、面会の間、預かってくれるって言ってた施設ですか？　でも、どうして？」

「そう、その施設よ。これだけ倒れて、ロボットのウサちゃんに今後影響が無いとは考え辛いの。だから、念のための検査よ。それに、ウサちゃんが最新のロボットだというのは最初の時に説明を受けてるでしょ。もしかしたら、ウサちゃんに、そのウイルスにも対処できる最新のプログラムか何かが入っているんじゃないかっている。今は、被害を食い止めるためにも、少しでも多くの情報に、小さくてもなんら手がかりが欲しいのよ」

　俺は、頷いた。

「ウサ子をモルモットにするのであれば反対ですけど、ウサ子のための検査であれば納得します。ただ、手がかりのための研究というのが気になるのですが.....」

「大丈夫。酷い扱いはさせない、丁寧に事を進めるし、親のあんたも同席してもいいものだから。通常の検査の中で同時に行う、検査と変わらないものよ」

　満嗣さんが言うなら、信じてみようかな。少し、心配だけど。

「もし、酷いと思ったら。これ以上はイヤだと思ったら、途中で止めて帰っていいでしょうか？」

　満嗣さんは、頷いた。

「もちろん。けど、そんな目には遭わせないから」

「はい」

　俺は明日、ウサ子をG区の研究施設に連れていくことにした。

　で、今日だけど

「満嗣さん、お休みですよね？」

「そうよ、今日だけね」

「じゃあ、次のお休みは？」

「わかんない。適当なの」

「もしよければですけど、少しデートしませんか？　気分転換に」

「デートかあ.....いいわよ！　何処に連れてってくれるの？」

「映画館とか遊園地とかショッピングとか.....何がいいですかね？」

　情けないけど、満嗣さんの好みが全くわからない。

「ゆーえーぃちー？」

　ウサ子が、ハイテンションに叫んだ。

「ウサ子、遊園地わかるの？」

「ちらなーい」

　へへへ、と笑う。

「そうね、遊園地にしよっか。ねえ、ウサちゃん」

「ウサね、ゆーえぃち行くのお」

「じゃあ、今から３人で遊園地だね」

　ジェットコースターはあんまり得意じゃ無いけど、ウサ子が居るから乗らなくても済むだろうし、観覧車はのんびりしてて好きだな。お昼は、お弁当がいいかな。

「俺、急いでお弁当作りますね。その間に、用意しといてください」

　満嗣さんに言うと、俺はキッチンに飛び込んだ。ウサ子の準備は.....簡単でいいだろう。大人の女性ほど、時間はかかるまい。

　久しぶりに、楽しくって仕方ない。最高の一日になりそうだ。

ウサ子を助けてください！

　サンドウィッチに唐揚げ、卵焼きにブロッコリーとミニトマト。簡単だけど、楽しいお弁当らしいお弁当。を、大きめのランチボックスに詰め込んだ。それから、水筒にジュースも忘れずに。

　遊園地自体、果たして何年振りなのだろうか。

　子供の頃の遠足を思い出すように、俺の気持ちは多分３人のうちの誰よりもわくわくうきうきしていたように思う。

「着いたらすぐお昼になっちゃうかもね」

　満嗣さんの言葉に、ふと気づいた。そうか、そうだよな。

「着いたら、すぐお昼にしましょうか」

「うん、おひるー」

「そうね」

　満嗣さんが、ウサ子の頭を撫でた。

　遊園地まで、満嗣さんが車を出してくれた。

　一番近くの遊園地は、幼児向けの規模の小さいローカルなタイプ。お陰で、平日なのもあって空いているうえに、お弁当を食べるための小さな広場もあった。

　そこにレジャーシートを引いて、作りたてのお弁当を並べた。場所も近いし、さっき作ったばかりだから、お弁当はまだほんのり温かくて変な感じだ。

「こんな事だったら、家で食べてきてもよかったかもしれませんね」

　と俺が苦笑いを見せると、満嗣さんはお弁当の唐揚げを摘みながら

「ほか弁みたいでいいじゃない。お弁当でもあったかい方が美味しいわよ」

　と返してくれた。

　少し作りすぎたかもしれない俺特製のお弁当は、残らず綺麗に片付いた。

　ウサ子も雰囲気に呑まれたのか、いつも以上に沢山食べていた。

「ウサ子、少し休憩したら何か乗ろうか？」

　食べた直後だし、と思って休憩を促したのだが、ウサ子は待ちきれずに走り出した。

「あれ！　あれ！」

　ウサ子が指差すのは、メリーゴーランド。小さいながらに、華やかな馬が上下に動きながら回る風貌は、魅力的に見えるのだろう。

「懐かしいわね、メリーゴーランド。私も子供の頃、好きだったな」

　いつもクールな顔の満嗣さんの表情が、柔らかく揺れた。正直、ドキッとした。

「じゃあ、皆で乗りましょうか」

「この年で、なんだか恥ずかしいな」

　満嗣さんの照れた笑いが、また愛おしく思えた。

「そうですよね、でも俺乗ってきますね。ウサ子のために」

　満嗣さんは「見てるわね」とその場を離れようとしたのだが、それをウサ子が引き止めた。小さな手にしっかり握られた、満嗣さんの服。

「ウサ子、我儘言ったら迷惑だよ」

「まーまーも、のるの！」

　まーまー.....ママって、お前！ なんて事を！

「あの、満嗣さん、違うんですよ。ウサ子、なんか勘違いしてて！」

俺はなんとか誤魔化そうと、必死に弁解しようとした。超絶美人で、キャリアウーマンで、しかもまだ付き合って間もなすぎて、俺自身受け入れきれないのに.....なんてことを！　いくら子供でも、許されることと許されないことがあるのだと教えなければ！

しかし、俺の心配をよそに、ウサ子は頬を膨らませたまま、握ったその手を話さない。

「満嗣さん、すみません。すぐに言い聞かせます」

けれど、満嗣さんはウサ子と同じ目線になるよう、ウサ子に向き合って座った。

「そうよね、せっかくだもんね。皆で乗ろうか。パパとママとウサ子ちゃんと」

ウサ子は、満嗣さんに頭を撫でられて、嬉しそうに笑った。

「満嗣さん.....」

正直、俺は呆気に取られた。

「ママ、だって。ママになる事なんて、無いって思ってたのに。ウサ子ちゃん、なんでママって呼んでくれたのかな」

珍しく満嗣さんの顔が赤らんで見えた。

「はっ！　ママなんて、柄でもないっ！　擬似よ」

それでも、嬉しかったのかな。ツンっとそっぽ向いた顔は、さっきより紅潮した上に柔らかかった。

「満嗣さん、ママになるのは嫌ですか？」

「私は、この仕事の為に人生捧げようと思ってたのよ。人並みの生活も幸せも憧れはしたけど、人並みの生活が私の幸せとは限らないんじゃないかなあ、なんて。私には私にしか出来ないことがあるから、それを貫くことが私には優先すべき事だとそう思ったわけ。でも、ママって呼ばれると嬉しいものね。私にも、母性があったんだ.....」

俺は、ロボットの事なんてよく知らない。それがプログラムでなんとかなるものなのかどうかもわからない。けど、少なくとも満嗣さんは元々人間だった訳だし、心も頭も人間なのだ。母性が無いはずがない。

「それを貫きながら、ママになるのは難しいんですかね。どっちの幸せも手に入れるの

は、欲張りですか？　人は元々欲張りなものだし、2頭追うのもなんて諺もありますが、そんなの単なる諺な訳で。満嗣さんなら、十分にそれを手に入れられるって思うんですけど、どうでふか？」

俺達の話が長引いてしまったせいか、ウサ子がメリーゴーランドの前で手を振る。丁度動きが止まり、現在の利用者が降り始めていた。

「あんたとなら、出来るのかな。でも、それでウサ子ちゃんが許してくれるなら.....私は.....」

満嗣さんは、言葉を止めてしまった。ウサ子の元に歩み寄る。相変わらず、ママと言うよりキャリアウーマンと言った足取りなのだけれど。

満嗣さんの、本当の心って。俺はもっと彼女の深いところを理解してあげたい、そう思った。目に見えるものじゃなくて、もっと深いところがあるような気がする。

メリーゴーランド、コーヒーカップ、動物の歩行ロボット、観覧車。ウサ子がまだ小さいから、乗れるのはこの辺りだけだった。どれもレトロで時代遅れで、デートにはつまらない物ばかりだと思う。現代の遊具なら、バーチャル体験型遊具が殆どだから。けれど、この雰囲気が好きだという人も少なからずいるのだから、このローカルでレトロな遊園地はまだ残っているんだろう。

ウサ子が乗りたい物を何度か乗って、あっという間に夕陽が射した。

最後に、もう一度だけど観覧車に乗り込んだ。何度乗っても、ウサ子はどれも初めてみたいな反応をする。

「ウサ子、これで最後だよ。ウサ子が、1番好きなのはメリーゴーランドだったのかな」

人が殆どいないせいで、乗りたい放題状態だったので、メリーゴーランドには本日5回は乗った気がする。

けれど、ウサ子は首を傾げて即答はしなかった。

「んとねえ、んとねえ、かんらんちゃしゅきだよー」

「今乗ってるからだろ？」

俺は笑った。

「ちがうよー！ パパもママもいっちょだからだお！」

　そうだね、大人になるとちょっとした事、当たり前のことに気付かなくなるんだ。

　皆一緒に顔を合わせて乗れるのは、観覧車だけなんだ。

「ウサちゃんは、私がママでいいの？」

　ウサ子は、満嗣さんに抱きついた。

「まーま、だいちゅき」

　満嗣さんの表情が、悲しそうに揺れた。

「お仕事ばっかで、ごめんね」

　けれど、ウサ子は強い子だ。

「おちごとしゅる、まーまもだいちゅき。パパいっちょだから、だいじょーぶ」

　ウサ子の方が、きっと俺よりずっと満嗣さんの事をわかってるのかもしれない。ウサ子が何故満嗣さんをママに選んだのか、それは何故ウサ子が俺をパパとして選んだのかに近い愚問なのかもしれない。

「満嗣さん、もう考えるのは止めましょう。満嗣さんが、ご迷惑じゃないのなら」

「迷惑な訳、ないじゃない」

　こんな美女と野獣みたいな夫婦もありかな。

　翌日、G 地区への行くために満嗣さんの車に、俺もウサ子も乗り込んだ。

　昨日話を聞いた時とは変わって、満嗣さんの表情は少しばかり険しく見えた。満嗣さんも、俺と同様あまり気が進まないのかもしれない。

「ウサ子ちゃんは、私がちゃんと見てるから安心して」

　それは俺に言うより、自分自身に言い聞かせているようにも聞こえた。

車は窓ガラス越しに見慣れない風景を映しながら、どんどん進む。重苦しい車内の雰囲気が伝わるのか、ウサ子も大人しくぬいぐるみを抱きしめて座っていた。

コンクリートの壁と有刺鉄線の薄汚れたレトロで重々しい壁が見えた。

壁伝いにその先を行けば、鉄の扉の前で車を停めた。

暫くして、その扉が開けられた。

「ここが研究所ですか？」

「そう、見た目は原始的だけど、刑務所よりセキュリティはキツいわ。最新の認識システムで、もう受付完了したみたいよ」

「すっげ」

「ここには、人間しかいないんでしたっけ」

「みたいよ。私も、正直来たの初めてだし。ここには人間の研究員しかいないし、安全性の問題なんじゃない」

「そういう事ですか」

確かに、非力で脆い人間には、必要な事だろうと納得した。

重々しいのは、外観だけだった。中の建物は真っ白の綺麗なビル。シンプルで無機質なデザインが、病院みたいだけど。

満嗣さんは駐車場に車を停めると、俺達を先導して歩き始めた。不安がったウサ子が、俺にしがみつくので、俺はウサ子を抱いてそのあとに続いた。

「お待ちしてました」

迷うことなく歩いてきたのは、白衣の若い男。若いと言っても、30 歳半ばくらいだから俺より上だと見える。

「この子が例の」

「事前に伝えてある通りよ。簡単な検査だって聞いてるわ。検査内容は全て私の了承を取って頂戴。それから、無理に実行しないで頂戴。それと.....」

男は、困ったように苦笑いをした。

「信頼されてないんですね、わかってますよ。ご安心ください」

「心配なだけよ」

それを世間では信頼してないと言うのだが.....俺は内心、そう思いながら男の顔を見た。目が合ったので、軽く会釈した。

「では、こちらにどうぞ」

俺と満嗣さんは、それに従って続いた。

案内されたのは、それなりの大きさのモニターがある休憩室のような部屋だ。広さは恐らく6畳くらい。真ん中にダイニングテーブルと椅子が用意されていて、そこの上にインスタントの飲み物とポットとお菓子が用意されていた。

「ここでお待ちください。お手洗いは、出て右の突き当りです。モニターで検査の様子が確認出来ます」

「休憩室？」

「雑務室ですかね。常に、目を話せない状況はありますから。チャンネルは、この子の検査室に合わせておきますので、他は見ないようにしてくださいね。極秘ですから。まあ、念の為リモコンはお渡ししませんけど」

「仮にも警察ですしね」

男は笑った。

「そんな、捕まるようなヤバい事はしてませんよ」

男は、ウサ子の頭を撫でた。

「えっと.....ウサ子ちゃん、だっけ。じゃあ、パパはここで待っててくれるから、検査

に行こうか」

　ウサ子は嫌そうに首を振ると、俺にしがみついた。

「ウサ子に、今の状況はわかりませんよ。俺が言い聞かせます」

　俺だって怖いさ。信用し切れない。けれど、必要な検査なのは確かだ。満嗣さんが攻撃的なのも、どこかこの異様な雰囲気を感じているからかもしれない。

「ウサ子、待ってるから。ウサ子に病気がないか、お兄さんが診てくれるんだよ。いつものお姉さんと違うし、いつもの場所と違うけど頑張ろうね。パパ見てるから、なんかあったらパパを呼んで」

　ウサ子は、少し間を置いて、こくりと頷いた。

　ウサ子が俺の手を離れ、男の手の中に収まった。なんだろう、これで最後かもしれない嫌な気持ちになった。

「では、また後程」

　男は何事にも動じない様子で、ウサ子を抱いて部屋を後にした。

「本当に、大丈夫ですかね」

　俺の口から、ぽつんと本音が零れた。

　満嗣さんは、テーブルの上のお菓子を手に取るとそれを食べた。

「信じるしかないじゃない。なんかあったら、すぐ助けに飛び込むわ」

「そうですね、その為にここにいるのだし」

「まあ、最初はウサ子ちゃん以外は入館禁止みたいな事言ってたんだけど、あんまり私がうるさいからきっと、気を使ってくれたのね。まあ、その辺は信用出来るんじゃないかな」

　と、思いたい。

　暫くして、真っ暗だったモニターに電源が入った。真っ白な服に着替えさせられたウサ子の姿が映し出された。

ずっと見ていたけど、心電図的なものやレントゲンみたいなものとか、そういう基本的な検査の姿か映っているだけだった。

特に心配はしていなかったのだけれど、夕方くらいになってから、先程の男が険しい顔で部屋に来た。

「柏木さん、直ぐに検査をして頂けませんか？」

「は？」

満嗣さん自身も意味がわからないと言った顔で、眉間にシワを寄せながら疑問符しか出せなかった。

俺は俺で、黙ってその場にいるしか出来ない。

「何よ？」

「ウサ子ちゃんから、例の物質が見つかったのですが.....これが少々厄介でして。後程詳しく御説明致しますので、大至急検査を」

「お、俺は.....」

「人間には影響がありませんので、このままこちらでお待ちください」

「あの、ウサ子は？」

俺の質問を無視して、男は満嗣さんを引っ張るようにして部屋を出て行ってしまった。

俺は、とりあえず椅子に座った。衝動的に、気付かないうちに立ち上がっていたようで。

「なんなんだよ」

本当に、何が起こってるんだ。

全てが終わった頃は、日が変わろうとしていた。

先程の男が現れ、ウサ子は返せないと言った。隔離だ。

幸いと言っていいのだろうか、満嗣さんから例のウィルス？ は発見されなかった。

「御説明致します」

　男は改まったように、話を始めた。

「近頃、騒ぎになっている奇病をご存知ですね。先日、柏木さんからボディのご提供を受けまして、あちらも併せて研究させて頂いておりました。極秘で研究チームを立ち上げ、この件についてはここの研究所の一部しか知り得ません。また、今回の事も一部しか知らせておりません」

「どういうことですか？」

　俺は、堪らず問うた。

「はい、ここの研究に篠山なるものがおりまして.....こちらとしても、疑うところがあったのです。彼は太一、ですが誠太ではないかと」

「それで、彼の正体を暴くため、とか」

「品のない言い方にはなりますが、その通りです 」

　篠山太一さんは、篠山誠太さんだった。恐らく、そういう事なのだろう。幾らアホな俺でもなんとなく察しがつく。

「篠山誠太は、表向き救世主でした。しかし、裏の顔は違うと言うことを誠太である時から一部の人間は気付いていました。研究途中のナノマシーンを持って行方を眩ませた時、来るべき時が来た。という感じでした。そして、再び今度は太一と名乗って現れた。私は、わかって受け入れました。彼を止めなければならなかった、それが自分の使命だと思っていたから。やはり彼は、私の予想していた通り、道を誤って進んでいたのです。あの頃から.....きっと、既に誤っていた」

「あの、貴方は？」

「申し遅れました。丹波 (たんば) です。篠山の親友でした。親友だったから、わかるんですよ。彼だって」

「.....」

「私も人間、彼も人間。誤魔化す事なんて出来ませんよ。桜木さんになら、分かるでしょう」

そうなのかな。俺の返事を待たずに、丹波さんは続けた。

「私は篠山が行方を眩ます前に、念の為ナノマシーンを少しだけ盗んでおいたんです。私には彼ほどの解析は出来ませんでしたが、それなりの事はわかりました。彼の開発したナノマシーンは、体内で独立したメカニックのように動き、力を出す。破壊することも修復する事も可能ですし、それは自らを作り出す、言うところの細胞分裂と同じ働きをするのです。彼があの小さいナノマシーンにどうプログラミングしたのか。恐らく電磁波か何かだとは思いますが、そこまではわからなかったのです。ですが、彼はそれを破壊するために使うことを選んだのです。機械は自立し、独立し、増えすぎた。人間が優位に立つ為の筈が、人間が地に落ちる結果となった。バベルの塔が破壊されるように、それは訪れた。修復する役目が必要なのだ。と、以前酔った勢いで零した言葉が本音この結果だったのです。修復すること、破壊することではなく、優れ、敬われる事でも彼なら実現できただろうに」

「それで、ウサ子は.....？」

怖い答えだった。

「ウサ子ちゃんそのものが、そのナノマシーンです」

「篠山を逮捕するわよ」

「彼は誰より優れた研究者です。道を誤わなければ、英雄にすらなれる本物の天才だ。彼を、改心させて英雄にする事を、私は望みます」

「彼がそれを望むかどうかよ」

「直ぐに、捕まえますか？　そして、報道しますか？」

「先ずは、話をしてみたいわ。逮捕は免れないけど、処分はそれからよ」

暫くの沈黙の中、丹波さんは立ち上がった。

「篠山を呼んできます。彼は、この事を知りませんから」

「あの、ウサ子は.....？」

「今のままでは、お返しする事が出来ません。ウサ子ちゃんをなんとか出来るのは、篠山だけです。私には、力がなく。申し訳ない」

　丹波さんの声に表情はなかった。きっとこの件はまだ、丹波さんと俺達しか知りえないのだろう。

　丹波さんは、部屋を出た。

「満嗣さん」

「予想外の展開ね、正直私も困ってるわ 」

「ウサ子を.....」

「ウサちゃんを助けるのは、私も最優先だと思ってる。けど、あの子そのものがナノマシーンだなんて.....」

　その先の言葉が見つからないのは、俺も同じだった。

　１時間くらい待ったと思う。

　部屋に篠山さんと丹波さんが現れた。

「あ！　桜木さんでは無いですか」

　篠山さんは、少し動揺したような素振りを見せたが、何食わぬ顔で会話を始めた。

「どうされたんです？　というより、よく私の勤め先がわかりましたね。話があると、丹波さんから言われて来たんですが、まさか貴方達でしたとは」

「篠山さん、お勤めご苦労様です。凄い人だったんですね」

　何を言っていいかわからず、天気がいいですね、みたいな事しか言えない俺。満嗣さんは、俺の前に手を翳した。少し黙っていなさい、の合図だと思った。

「篠山太一は、既に亡くなってるわ。篠山誠太、よく誤魔化しきれると思ったわね」

　満嗣さんの挑発にも似た発言に、篠山さんは動じなかった。

「けれど、事実騙されていたでしょう。今の今まで。やっと見つけてくれましたか」

「あんた、わざとやってたの？」

「ええ、勿論」

「何のために？」

「さあ？　かくれんぼみたいなもんですよ」

「あんた.....舐めんじゃないわよ」

「舐めてなんかいませんよ、失敬ですね。ただね、私だって暫く隠れていたんですから、少し楽しみたかったんですよ

。ところで、ママのご気分はどうですか？　いいものでしょう」

　篠山さんは、にっこり笑った。

「こんな凄いものが作れるのに、なんでこんな酷いことに使うんですか.....篠山さんは、本当は悪い人じゃないって、俺は今でも信じています」

「どこまでもお人好しですね。私は、桜木さんのそういうとこ、大好きですよ。時々、うざくはなりますけど。でも、好きですね。人間らしくて。信じるのは勝手ですが、私は自分の目的を達成しようとしているだけです。どうぞ、逮捕してください。私は構いませんよ。かくれんぼは終わったのですから、次は私が鬼になりましょう。本当の鬼にね」

　本当の鬼、とは。嫌な予感がした。俺は、俺に出来ることをした。必殺、土下座だ。

「ウサ子を、助けてください」

「そんなにあの人形の事を想ってくれるんですね。私の研究が、成功したとの結果で、本当に嬉しいです」

　俺はイラッとしたが、床に付いている手をぎゅっと握って我慢した。そうでもしないと、篠山さん殴ってしまいそうだった。

　バシイイイイイン！！

　俺の頭上で、激しい音がした。

　見上げると、険しい顔の満嗣さんと頬の赤く腫れた篠山さんが向かい合って立っていた。

「あんた達には、単なるプログラム、人工知能かもしれないけど、それを人間では生命って呼ぶんじゃないの。ロボットを怨むのは勝手な個人の感情でしょ。それに救われた者だっている。それは、人間同士だって同じ事のはずよ。あんたみたいな力のある人間が、その感情を剥き出しにしてどうするの」

「貴女は、私に何が言いたいのですか？」

　満嗣さんの代りに、今まで黙って見ていた丹波さんが答えた。

「篠山。改心してくれ.....頼むから。お前なら英雄になる事で、敬われる事で、復讐出来るだろう」

「それでは、済まされないんだよ。俺の持つ感情は」

「哀しいのね」

「哀しいさ、だがそれを乗り越えた」

　これが、本当に乗り越えたと言えるのだろうか。

「お願いです、ウサ子を助けてください。篠山さんがウサ子の、本当の親だって知ったから俺はこうしてお願いしてるんです。俺の出来ることなら、なんでもしますから。どうか」

「桜木さん、面白い人ですね。ですが、貴方に出来ることなんて何もありませんよ。残念ですけど」

「篠山、ナノマシーンにプログラミングする方法を教えては貰えないだろうか。それで、俺が今回の事件を事故でまとめる。それで罪が軽くなれば、その先の事は俺が引き継ぐ。お前がロボットを助けたくないのなら、それでいい。この部署のリーダーとして、俺が償う。けれど、この研究自体はお前のものだから、結果はお前が償ったのと同じことだから」

「綺麗事は、やめてくれます？　俺がいつ償う、償いたい、後悔していると泣き言言ったんだ？　丹波、お前はいつもそうだよ。昔から、ちっとも変わっていない。それが正義感だというなら、何の価値にも得にもならないから考え直した方がいいと思うよ」

「あんた、目的も達成出来ずに死罪になるわよ」

　篠山さんは、笑った。

「俺の目的が世界征服だとでも思ってる？　そうだね、そんな中二病な考えもあるわな。けど、本気でそう思ってる訳がないだろ。俺はお前達ほど甘くないんだ。俺がやったと発表したらいい。寧ろ、そうしてくれた方が好都合なんだ。事故でも構わない。人間は怖いんだ。機会達は恐れる、暴走する。そしたら、俺の研究がこれまで以上に大いに役に立つだろう。大義名分とは、よく言ったものだ」

　本当に、もうどうしようもないんだろうか。

　パパ、パパと呼ぶウサ子の顔がうかんだ。

　昨日まで、平和だったのに。

「どうか、ウサ子を助けてください」

　俺には、これしか言えなかった。

　しかし、悪は栄えないともよく言ったもので。

　突如、数名の警察官が篠山さんの後ろの扉から現れ、彼を逮捕してしまった。

　呆然とする俺の前に、あの川田さんが満嗣さんの前につかつかと現れ、敬礼した。

「お疲れ様です」

「ご苦労、よくやってくれたわね」

「柏木警部の作戦があったからこそですよ！」

「あんた達が頑張ってくれた結果よ。私は、手助けしたにすぎないわ」

　俺には状況が飲み込めない。

　篠山さんが連行された後、奥から白髪の老人が現れた。

「ウサ子ちゃん、でしたね。あの子は、こちらでプログラミングの改正が完了次第送り届けますので、ご安心ください。詳しくは、柏木警部の方からお聞きください」

俺は何も言えず、満嗣さんを見上げた。

「ごめんね、驚かせてさ。でも、もう大丈夫だから」

訳がわからないけど、満嗣さんの大丈夫に救われて、俺の全身から力が抜けた。

「また、腰抜かしてるんじゃないでしよーね」

「情けない男。こんな奴やめて、自分と付き合ってくださいよ」

「うるさいわね。あんたは私の最高の後輩でしょーが！」

川田さんは不満そうながらに、てれていた。

外に出ると、パトカーが数台待機し、施設を出ていくところだった。その１台のパトカーの中に、篠山さんの後ろ姿が見えた。

「さあ、私達も帰りましょ。もう、夜が開けてもおかしくないわよ」

夜明けまでには、まだ時間があるのは確かだった。それでも、凄く凄く長い１日がようやく終わったと実感するには十分な時刻だった。

「疲れたね。説明しながら帰ろうか」

最終回幸せな結末

満嗣さんは、あとは部下に任せてマンションに帰るのだという。俺は満嗣さんの車に乗り込んだ。思えば、2 人っきりになるのは、あの夜以来かな。

「あの人（ 院長 ）が情報を流してくれて、今回の逮捕に至ったのよ。あの人も、ロボットが嫌い。けど、篠山と別の意味でロボットに復讐する事を誓った人。だから、篠山が許せなかったのね。篠山を止めるための使命を背負ったのは、丹波さんだけじゃなかったってこと」

「じゃあ、あの人は篠山さんのナノマシーンとかいうのの研究を受け継いでいるんですか？」

「みたいね。それが出来たから、初めて情報を流した。彼は言っていたわ、篠山さんは道は間違えど正真正銘本物の天才だったって」

道は間違えど.....本物の英雄になれたからこそ、それを見ていた人が沢山いた。信じていたからこそ、止めてくれる人がいたのかもしれない。

「哀しいね。人は、思うようには生きられないものなの」

バベルの塔は、かつてロボットを作りだし、ロボットに生命を与えた人間なのではなく、篠山さん自身だったのかもしれない。

「これで、本当の意味での解決よ」

あっ.....

「恋人って、まだ有効でしょうか？」

「え？」

「だとしたら、俺と結婚してください！」

3 日程して、ウサ子は丹波さんに連れられて、満嗣さんのマンションに帰ってきた。

　そして、事件の真相は研究所のミスだとして報道された。研究所から、ナノマシーンの破壊プログラムに対処する為の機械も配布された。多くの人が助かった。人間の病気とは違い、ロボットだけに回復が速い。まさに、即効。

　暫くして、回復した圭介から連絡があって。今、彼と食事中。満嗣さんのマンションに呼ぶのもアレなので、近くのファミレスで。彼には報告があるので。

「俺、結婚する事になりました」

　圭介の吹いたビールが、俺の顔に掛かった。

「は？」

　先ずは謝れ。

「は？　じゃねえよ。汚いな」

「おかしなこと言うから」

　だから、謝れよ。

「おかしなことって、なんだよ」

　俺は、おしぼりで顔を拭いた。

「結婚って誰と？　　もしかして、あの実家帰った時のお見合い相手とか？　　あー、わかった！　　お前、柏木さんに振られたんだろ。血迷うな、今日は飲もう」

　圭介は、俺もまだ飲みきってないのに、今度は焼酎を追加してきた。

「あのなあ、満嗣さんとだよ」

　本日、２回目のビールを吹きかけられた。

「は？　　てか、早くね？」

「まあ、式も入籍ももう少し先なんだけどさ。まだ奥さんっているより、フィアンセってやつかな。なんか照れるけど」

　俺は、再びおしぼりで顔を拭いた。

「それは、嘘偽り無く？　　まあ、待てよ。どんどん先延ばしにして、逃げられるパターンかもしれない」

　圭介が、失礼な独り言を言っている。

「お前、応援してくれてたんじゃないの？」

「いや、応援はしてたよ。でも、霞ちゃんだよ。彼女ってのも妄想だと思ってたし、霞ちゃんだよ？」

　そこまで言わなくてもいいじゃないかと思いつつ、溜め息が出た。不思議に順調に結婚までいってしまったものの、世間から見たらそんなもんかもしれない。

　けど、満嗣さんの照れるように笑いながら言った

『あんたね、ムードのある雰囲気でっつたじゃないの。どこまで、桜木霞なのよ。でもまあ、私が選んだ人だし、諦めるわ。そこは！』

　は、嘘偽りない答えだったし、実際に式場も見てまわって、いくつか候補も出したところだった。

「式は決まったの？」

　何故か、恐る恐る聞く圭介。

「半年後、かな。ようやく式場の候補も固まって来たところ」

＊＊＊＊＊

　少し遅くなったのだけれど、満嗣さんを実家に案内した。

　母さんは、満嗣さんを見るなり声を上げた。

「あら、霞。そんな汚ったないマフラーあげて、失礼じゃないの」

「？」

　と、疑問符を飛ばす俺と満嗣さんに、母さんはズンズン入ってくる。

「なくしたとか言ってたのに、ちゃんと持ってたのねえ」

「母さん、呆けた？」

　母さんのボディーブローが、綺麗に俺の腹へと収まった。悶絶する俺。

「母さん、まだ呆けてませんよ。大体、これは母さんが作ったものなんだから」

「え？」

「やあねえ、この子ったら。この子の方が呆けてるわ。若年性アルツハイマーなんじゃないの？　　あんたか小学生に上がったとき、そんなに立派なプレゼントが出来ない代わりに作ってあげた、母さんからのクリスマスプレゼントじゃないの。気に入ってずっと持っててくれてたのに、中学の時なくしたーって呆気なくどっかやってきて。で、何処にあったの？」

　俺は、何も言えずに口を噤みながら満嗣さんを見上げた。ふと目が合って、笑いを堪え切れなくなったのは俺も満嗣さんも同じだったようで、２人その場で大笑いした。

「おかしな子ねえ。そんなんじゃ、捨てられるわよ。こんな立派なお嫁さん、来てくれるなんて。貴女、なんて言うのかしら？

「柏木満嗣です」

「柏木さん、こんなんでいいの？　　後悔しても遅いですよ。早く入りなさいな」

　母さんも、なんだかんだ言いつつちょっと照れてるように見えた。

　父さんは居間で、緊張して座っていたのだが、満嗣さんを見て持っていた湯呑みを落とした。

「お父さん、何してるんです。みっともない。そんなことなら、散歩でも行ってきてください。邪魔だから」

　相変わらず、母は強い。

「霞から、聞いてますよ。こんなダメ息子の元に嫁いでくださって、本当にありがとうございます。不束者を通り越して、不束過ぎるダメ過ぎる息子ですが、どうかお尻を叩きながら支えてやってくださいな」

　酷い言われよう。

「私は、幸せになれると思います。さっき、運命を知りました。多分、彼と一緒になる導きだったんだと思います。全てが」

　女は女優とはよく言ったもので、満嗣さんの母さんへの挨拶の清楚っぷりが凄い。けど、俺はいつもの少し意地悪そうな満嗣さんの方が大好きだ。自然で、楽しそうで。これから、もっといろんな顔が見れるのかなあ。

　その日は実家に泊まって行くことになっていた。先日の事件で休めなかった分の休暇を、満嗣さんは今回取ってくれたようで、久しぶりにゆっくり出来ると笑っていたのだが。

「結局、ゆっくり出来そうにないわね。式場見たり、考えたり、挨拶したり、何かと忙しいものなのね」

　眠るウサ子に布団を掛けながら、満嗣さんは笑っていた。

「あの、無理しなくても。もう少しゆっくりでも、俺は大丈夫です」

「大丈夫よ。もう余計な気を遣うのは止めましょう。私、少しはママらしくならなきゃね」

「満嗣さんは、どんな家庭にしたいですか？」

　ふと気になった。

　容姿も地位も仕事も満たされた彼女が、一体何を求めるのかを。

「そうねえ。普通の家庭がいいかな。私がいて、あんたがいて、ウサちゃんがいて。一緒にご飯食べて、お休みは何処かに遊びに行くの。それだけで、私は満足だけどなあ。あんたは？」

　俺も。等と答えたら怒られそうなので、少し考える。けれど、やっぱり同じ答えしか浮かんで来なかった。

「すみません、やっぱり俺も同じです」

　けど、満嗣さんは笑っていただけだった。

　本当に幸せ者だ、俺は。

　色々あったけど、終わりよければ全てよし！　　とは、昔の人はよく言ったものだ。

　それに、今回のことで、ちょっとやそっとの出来事じゃ驚かなくなった自信もある。少しだけど。

「俺も、成長しないと。守る者ができたから」

　多分、この言葉は満嗣さんには届かなかっただろう。だって、言うのは止めて自分の中で誓った言葉だったから。

【完】

ロボット育児日記～俺とウサ子の成長記録～

著　者　　鞍馬 榊音(くらま しおん)

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社